

Newsletter

2014 No.34

鹿児島大学大学院連合農学研究科

THE UNITED GRADUATE SCHOOL OF

AGRICULTURAL SCIENCES KAGOSHIMA UNIVERSITY



佐賀大学

SAGA UNIVERSITY

鹿児島大学

KAGOSHIMA UNIVERSITY

琉球大学

UNIVERSITY OF THE RYUKYUS

表紙 浜木綿「はまゆう」 学名: *Crinum asiaticum*

ヒガンバナ科の多年草。花の様子は、コウゾなどの樹皮を細く裂いて作った繊維から作った布と似ており、神道神事で用いられる白い布をゆう（ゆふ）と呼ぶ。水はけが良く日あたりの良い場所を好み、主に温暖な海浜で見られる（海浜植物）。道ばたや公園、庭に植えられることもある。

宮崎県の県花となっている。

裏表紙 鬱金「ウコン」 学名: *Curcuma aromatica Salisb*

ショウガ科の多年草。高さ約 50 センチ。根茎は黄色で多肉。バショウに似た長い葉を 4、5 枚出す。秋、大きな穂を出し、緑白色の葉と数個の淡黄色の花をつける。熱帯アジアの原産。根茎を黄色染料やカレー粉の原料にし、また漢方で止血・健胃薬にする。

琉球王国から島津藩への献上品でもあった。

表紙・裏表紙絵：琉球大学名誉教授 秋永 孝義

目 次

◆鹿児島大学大学院連合農学研究科長挨拶	杉 元 康 志	1
◆鹿児島大学大学院連合農学研究科副研究科長挨拶	山 本 淳	2
◆退職のあいさつ		
退職のご挨拶	尾 野 喜 孝	3
謝々 TerimaKasih CamOn Thanks	野 瀬 昭 博	4
望外の幸せ	岩 井 純 夫	5
長らくお世話になりました	徳 永 正 雄	6
オトーリ（酒の回し飲み）教育論	仲 間 勇 栄	7
これまでの教員生活を振り返って	諸見里 善 一	8
◆旧代議委員のあいさつ		
御礼とお願い	稲 岡 司	9
代議委員の任期を終えて	岩 井 久	10
楽しかったです	板 倉 隆 夫	12
雑感	及 川 卓 郎	13
代議委員の任期を終えて	外 山 博 英	14
◆新代議委員のあいさつ		
ご挨拶	鈴 木 章 弘	15
代議委員就任のご挨拶	玉 置 尚 徳	16
振り返れば連大	上 西 由 翁	17
ご挨拶に代えて	芝 正 己	18
ご挨拶	内 藤 重 之	19
◆新入生の素顔		20
◆学生の研究活動		48
◆研究室紹介		69
◆留学生の近況		70
◆修了生より		71
◆学会賞等受賞		72
◆平成 25 年度～26 年度 連大行事と活動		
平成 2 5 年度大学院連合農学研究科学位記授与式（前期）		77
平成 2 5 年度大学院連合農学研究科学位記授与式（後期）		78
平成 2 5 年度大学院連合農学研究科 1 0 月入学コース入学式		79
平成 2 6 年度大学院連合農学研究科入学式		80
平成 2 6 年度連合農学研究科入学式告辞		81
平成 2 5 年度全国連合農学研究科協議会		83
平成 2 5 年度連合一般ゼミナール「農学特別講義Ⅱ」		85
平成 2 5 年度中間発表会		87
平成 2 5 年度 TA 研修会		90
平成 2 5 年度英語論文作成指導セミナー		91
平成 2 5 年度ハラスメント防止のための講演会		92
平成 2 5 年度男女共同参画推進セミナーを開催		93

目 次

平成25年度農学特別講義Ⅰ(一般セミナー)実施報告	94
平成25年度「人材養成学生支援セミナーⅠ」実施報告	111
平成25年度人材養成学生支援セミナーⅡ(洋上セミナー)開講報告書	139
◆資料	
年度別入学者数	151
平成25年10月入学生及び指導教員名簿・平成25年4月入学生及び指導教員名簿	154
平成25年度奨学金及び研究助成金受給状況・入学料及び授業料免除状況	157
学位記授与状況	158
平成25年度学位取得者名簿	160
平成25年度学位取得者(課程博)就職状況	162
研究科教員組織	163
代議委員会委員名簿	164
平成26年度年間行事予定表	165
平成25年度連合農学研究科活動記録	166
事務局だより	168
代議委員会委員・連大事務室事務係電子メールアドレス一覧表	169
◆編集後記	170

◇連合農学研究科長挨拶



連大の現状とこれから

鹿児島大学大学院連合農学研究科長

杉元 康志

鹿児島大学大学院連合農学研究科は開設されて27年目を迎えています。多くの教員、修了生、学生に支えられて発展を続けています。更なる発展を目指し、関係者一丸となってこれに努めています。

昨年のミッションの再定義により構成大学、各研究科の目指す方向が示されましたが、連大はそれらと密接に関係しており、全ての研究科と協働して社会のニーズに応えていきたいと思えます。

本年は、鹿児島大学は大学機関別認証評価、来年は国立大学法人評価を受けることとなります。それら評価に基づいて連大も対処して行かなくてはなりません。前回の大学機関別認証評価では定員超過が指摘され、改善が求められました。博士課程は定員の管理は難しく、年度によって変化し、時勢によっては定員割れの危険性もあります。今回はどのように評価されるか心配ではありますが、最近の専攻での定員割れや留学生の減少など危惧される要因もあります。

本年度実施の先進的研究推進事業にて各研究科から多くの研究プログラムの申請がありました。この中から鹿児島連大の特徴ある研究が創生されることを強く望みます。そのためにも継続して支援したいと考えています。

学生は博士論文作成のため、日々研鑽を積んでいますが、良い研究は勿論のこと人間性、社会性、国際性も要求されてきます。貴重なこの時間を如何に過ごすか？実り多い日々にするべきでしょう。教員とコミュニケーションをよく取り、同じ目的を持つ内外部の学生と交流することを勧めます。そのような機会を是非、多く作り、自分の成長に役立たせてください。

第2期中期計画・中期目標が来年度で終了し、28年度から第3期に入ります。連大もそれに向けて案を作る作業に入ります。国立大学改革プランにおいて改革の加速が求められており、大学の強み・特色を最大限に生かし、自ら改善・発展する仕組みを構築することにより、持続的な「競争力」を持ち、高い付加価値を生み出す国立大学を目指すとされており、連大もその意向に添って改革をする必要性があります。運営費交付金や評価の在り方について、抜本的に見直しがあるとされております。そうなりますと連大の予算も今以上に厳しいものになる可能性もあります。そのためにも博士課程のみの大学院としての存在感を強くし、優れた教育・研究を発信することが強く求められます。構成教員の多大なる協力の下に連大の仕組みを維持しながら、連大の発展のために前に進みたいと心に誓っております。

◇連合農学研究科副研究科長挨拶

今後の課題が見つかりました



鹿児島大学大学院連合農学研究科副研究科長
山本 淳

昨年度は、自己点検評価委員会の皆様には、自己評価報告書の作成に際して多大な労力を割いていただきました。おかげで本年2月に報告書が完成しました。この場を借りてお礼申し上げます。

前回（平成19年度受審）の報告書の中で改善すべきと判断した項目の多くは、今回の報告書では改善されたと判断されました。それらは、

- ①教育組織を再編し現在の3専攻9連合講座+1連携大学院とした。
- ②単位制を導入し、成績評価を行っている。
- ③ホームページ上に学生相談窓口を設け、ハラスメントに対しても相談助言体制を整えた。
- ④FD委員会を設置し教育の内部質保証システムを改善した。

です。

一方、改善すべき項目としては、

- ①教員組織の活動をより活性化するために適切な処置を講ずる。
- ②18歳人口の減少に伴う日本人学生の入学者減少を視野に入れ、今後の入学定員数について考慮する。
- ③在学生に対して講義や管理運営に関するニーズを把握し、改善に役立てる。
- ④修業年限内の学位取得率が、本研究科設置以来の標準修業年限内の学位取得率に比べ低下している。
- ⑤ステークホルダーの意見聴取の機会を積極的に設け、時代に即応した研究者・教育者・技術者の養成に向けて、常に教育研究指導体制等の刷新に努める。

などが挙げられました。

これらのうち①は連大のシステムとして対処ができませんが、②～⑤の事項については何らかの対処が必要であり、今年から取り組む課題であると考えておりますので、どうかご協力をお願いします。

昨年はここで釣人としての運気を失うのではと心配しましたが、懸念は的中し、秋から冬は絶不調でした。

◇退職の挨拶

退職のご挨拶



佐賀大学教授 農学部
尾野 喜孝

退職の挨拶をさせていただきます。私の場合、定年までは4年残っていますので、やや早めの、そして体力を温存(?)しての離職となりました。しかしそれでも、1977年に博士課程1年中途中で退学して教員となりましたので、勤続年数は実に37年にもなっていました。

その間、連大には佐賀大学に赴任してから、主・副指導教員、学位論文審査員そして代議員として、現在まで13年間お世話になりました。それらについての色々な思い出の中で、印象的な事柄について少し紹介することで、挨拶に代えさせていただきます。

指導教員としては、修士課程から進学した日本人学生や留学生、そして社会人学生の指導に係りました。留学生の場合は、出身国の違いによって、宗教や食事などの文化の違いを知ることができましたし、社会人学生(県の研究員)の場合は、研究内容が県の推進する課題と深く関係する必要があるなど、それぞれに特徴を持った学生たちと交流することができました。そして、主指導教員として接した学生全員が修学年限内で学位取得を果たしてくれたことは、何よりもありがたいことでした。

学位論文審査員としては、審査論文の課題が畜産学としての研究の専門は同じでも分野が異なる場合も多々あり、実験手法や専門用語をちゃんと理解するため、関連する参考書を買って勉強したりしたことなど、色々な思い出が残っています。おかげさまで学問的な視野が広がったかもしれません(?)

また、代議員としての楽しい思い出のひとつに、代議委員会構成員の先生方や事務の方々との懇親の会があります。ふつうでは接点のないような専門の異なる先生方や他大学の事務の方々と、鹿児島、沖縄そして佐賀の地で、美味しい料理やお酒をいただきながら色々な話題について語り合えたことは、とても新鮮で、またとても実りのあるものでした。私にとって、大切な思い出であるとともに、貴重な財産になったと思っています。

そして、退職後はどうするのかと問われると、庭いじりを中心に、現役中にはできなかったことなどを自由気ままに楽しんでいきたいと答えるようにしています。

最後に、連大の構成員として出会え、そしてお世話になった多くの方々へ心より感謝いたしますとともに、連大のさらなる発展をお祈りします。

謝々 TerimaKasih CamOn Thanks



佐賀大学教授 農学部
野瀬 昭博

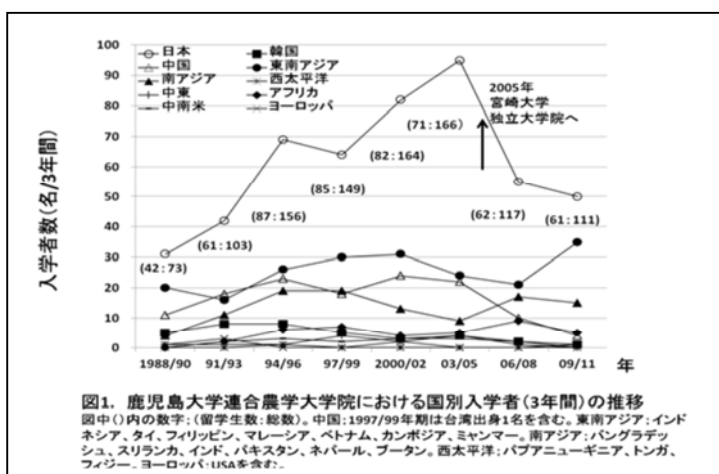
昭和63年（1988）にスタートした連大であるが、琉球大学農学部は大学の事情から平成3年（1991）に遅れて連大へ参加した。それに合わせ私自身も連大へ参加させていただき、平成6年（1994）に佐賀大学への転任を経て23年間、連大でお世話になった。この間、平成13～15年は、代議員という役目も仰せつかり、大隅・薩摩半島を探索しながら連大の運営にも参加させていただいた。本来の目的である学生指導については、9名の博士を直接指導し、38名の博士の副査としてお世話させていただいた。

連大への私自身の評価を要約すれば、まず研究のアクティビティが格段に上がったということだと思う。修士までは、指導するという一方の研究が、博士では双方向の啓発へと変化した。また、大学というレベルで見れば、地方大でも旧帝大に負けない研究ができる人的ポテンシャルが確保され、サイエンスと地域の課題を相互に結び付ける研究力が備わり、地方国立大学の研究・教育を魅力あるものにしたと評価できる。

以下には、「消え去る者」の余計な分析かもしれないが、平成24年度（2012）までの連大生の特徴を要約し、連大への期待の一端を述べさせていただく。図に1988～2011年の国別入学者数（3年間単位）の推移を示した。基本的な特徴は、学生の50～60%が留学生であるという構成が、当初から現在まで続いていることである。そこで留学生の出身地域についてみると、当初は中国・韓国の留学生が多く、その後は東南アジア、南アジアへと出身地域が変化している。このような出身地域の変化は、出身国の科学あるいは経済の発展に対応して日本への留学の位置づけが変化していることを推察させる。つまり、鹿児島連大の学問的レベルの魅力が留学生を送り出す国の科学・技術・経済のレベルに応じて変わるということである。言葉をかえれば、留学生の出身地域の変化は、連大の研究レベルへの国際的な評価とも理解され、現状に満足することのない研究レベルの向上に取り組む必要性を示すものであろう。また、視点を変えれば、国際的人材育成への貢献は流動的なものと理解し、対象とする地域を見直してゆくことも必要であろう。日本人も含めた連大への期待は、平成24年日・越・カ国際人材育成シンポジウム・報告要旨集（主催：佐賀大学アジアまちづくり・ひとづくり協働研究所）に書かせて

いただいた。合わせて参考にしていただければ幸いである。

学部の際に読んだA トゥインビー「歴史の研究」にある「文明は周縁から始まる」という思いを胸に40年の大学生活を楽しませていただいた。南の端の薩摩が、日本の歴史を動かしたように鹿児島連大が日本の農学を動かすように発展することを期待している。



望外の幸せ



鹿児島大学教授 農学部
岩井 純夫

大学というものに奉職して16年9か月。連大への加入が認められたのはその3か月後だったので、16年6か月、皆様にはお世話になりました。退職するにあたり、この間を振り返る時、忸怩たる思いを禁じえません。16年あれば二仕事、いやうまくいけば三仕事と、取らぬ狸の皮算用で、研究の場を企業から大学へと移しましたが、大学という組織の正体も掴めず、また、学生という春秋に富む人を育てる責任の重さに右往左往し、学生という未熟な存在と共に研究を進めることの困難さをひしひしと感じる日々でした。研究は遅々として進まず、三仕事どころか一仕事も完成しないままに大学を去る日が来てしまいました。後3年あればと何とか格好がつくのと思う、往生際の悪い私がいいます。

でも、65歳になっても実験台の前に立ち試験管をふれたことは望外の幸せでした。これ以上の事を望むべきではないのかもしれませんが。これからは、連大から画期的な研究成果が現われること楽しみに余生を過ごしていきます。

長らくお世話になりました



鹿児島大学教授 農学部
徳永 正雄

1993年7月31日、羽田発鹿児島行きJALに乗り鹿児島上空まで来ると、ものすごい悪天候でなかなか着陸できず、どのくらい旋回していたのかは忘れましたが、なんとか着陸、ラッキーにも未だ鹿児島市内へのリムジンバスが動いていたので、市内にたどり着きました。すぐ後の便で鹿児島空港に到着された方は、市内への便が止まり、一晩、空港に足止めされた方も大勢いたそうです。鹿児島を100年ぶりに襲った大水害「8・6水害」の真只中に赴任し、「これは、大変なところだ」と思ったのが、昨日のように思い出されます。あれから、約20年、皆様のおかげで、なんとかやっとのことで定年まで漕ぎ着けることができました。数々のご厚情を感謝申し上げます。

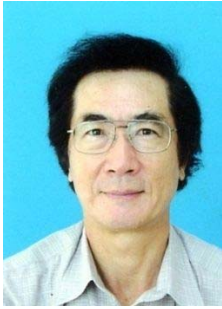
まず最初の経験が上記の大雨で、私が育った関西では、台風を除いて、たいてい雨はシトシト降るもので、バケツをひっくり返したような大雨と、時にはすぐウソのように回復するダイナミックな天候にはその後も何度も驚かされました。ただ、最近は、ゲリラ豪雨とか言って、鹿児島・長崎など大雨と災害の多い地域以外にも日本中で荒い天候が見受けられるようになりました。

それはさておき、鹿児島大学に来てしばらくは、それまでやっていた酵母を宿主にした有用異種タンパク質の分泌生産の仕事を継続しました。何か自分にとって新しいものはないか？と探したところ、前任者の大西先生が研究されていた好塩菌が多数研究室に保存されているということを知り、極限環境で生きる微生物の極限能力を利用することができれば面白いだろう、と少しずつ始めました。好塩菌というのは、私が大阪府立大学での学生時代に、大亦正次郎先生がやっておられた細菌で、みそや醤油といった高い塩濃度の伝統的醸造食品と関連して、高い関心を持たれていた研究材料でした。ただ一般的に、好塩菌がつくる好塩性酵素は、高い塩濃度には強いが、塩がないと失活してしまう扱いがむずかしいタンパク質と思われていました。私が始めたころは、遺伝子工学がほぼ今のように基盤技術に発展したころであり、好塩性酵素の遺伝子をクローニングし、大腸菌などで大量に発現生産できれば、なんとか、精製などもできるのではないかと安易に始めました。ラッキーなことにこの予想が当たり、遺伝子技術を使っていくつかの好塩性酵素を生産させてみたところ、特に、中度好塩菌由来のタンパク質は、塩がなくても安定なものも多く、中でも分泌型酵素は、塩がなくても塩濃度が高くても、どちらでも十分安定で活性も示すということが分かってきました。

高濃度塩環境に強い理由は、好塩性タンパク質のアミノ酸組成に特徴があり、親水性アミノ酸が多いこと、特にグルタミン酸、アスパラギン酸という酸性アミノ酸の含量が高く、タンパク質の総荷電が大きくマイナスに偏っていることで、広いpH領域で荷電を持ち、高い水可溶性を示し、「塩析」されにくいことがあげられます。この性質は、タンパク質が変性してもその高い荷電状態により溶けやすく、また変性分子間でもマイナス荷電でおしりの反発が強く、不可逆的な変性凝集体を形成しにくいので、変性要因が除かれると、可逆的に元の高次構造を再形成することができる、つまり、高いrefolding能を持つことを示しています。通常タンパク質を好塩性化する「好塩性酵素工学」に期待が持てると思っています。

最後になりますが、連大のおかげで多くの先生方とお知り合いになり、大変お世話になりました。心より感謝申し上げますとともに、このすばらしい連大組織のますますのご発展をお祈り申し上げます。

オトリー（酒の回し飲み）教育論



琉球大学教授 農学部

仲間 勇栄

10年以上前の話だが、大学近くのある居酒屋で、学生数十人が“一気飲み”で盛り上がっていた。そのときの光景が今でも忘れられない。学生達は、“一気一気飲んで死んでしまえ”、と手を打って囃し立てながら、代わり番こに、一気飲みしていたのである。これは単なる酒の飲み勝負であって、下手すると急性アルコール中毒で本当に死んでしまうかも知れない、と心配したほどである。このときふと思いついたのが、宮古島の酒座でよく行われる“オトリー”という酒の飲み方であった。私も宮古島の出身で、大学生のころは、この“オトリー”酒を友人達とよく回していたものである。私は研究室に入ってくる学部生や院生には、まず最初に、宮古のオトリーで人生を磨くことから教えてきた。

宮古のオトリーの特徴は、お酒を回す前後の口上の述べ方にある。まずオトリーを回したい人は、最初にオトリー用の盃に酒を入れて掲げながら、オトリーを回したい旨を皆に告げ、その意義と目的を述べて、その盃の酒を一気に飲み干す。そのときの内容がポジティブで、夢を語る話でないと、誰もそのオトリーを喜んで飲まない。また、この意義と目的の話に、人をうならせるウイットが効いているか、それによって、回す人のオトリーのランクが決まる。無事に最初の口上をクリアすると、次に盃について、一人一人回し飲みさせていく。居合わせた人すべてに回し終えた後で、オトリーの結びの言葉を述べ、最後の盃の酒を飲み干して、最初のオトリーが完結する。一度オトリーが始まると、盃は次の回す人にリレーされ、座全員が回し終えるまで続くのが普通である。

この宮古のオトリーの回し方は、私流に解釈すれば、その口上の展開の仕方が、論理的になっている点にある。その口上の流れには起承転結があって、まさに論文を書くときの論理展開と同じであると、学生には教えてきた。無口で人前で話すことが苦手な学生が、オトリーの経験を積むことで、物怖じせず、人前で堂々と論理思考で話すようになる。口で百回説くよりも、一回のオトリーの方が、学生への教育的効果は大きいのである。

オトリーは、『琉球国由来記』（一七一三）などによれば、「御通り」・「大通」と表記され、正月元旦に首里城正殿前の御庭（ウナー）で、国王から御酒を賜る儀式に由来している。この儀式を当時の宮古の役人が体験して、帰島後、真似たのが宮古のオトリーの起源であろう、と思う。「御通り」＝「オトリー」の発音の類似性も、そのことを裏付けている。

元来、オトリーの目的は、連帯感の強化と自己意識の鍛錬にあった。一気飲みのように酒の飲み勝負ではない。そのことを理解したうえでオトリーを回すなら、その教育的効果は計り知れないものとなろう。

末筆になったが、この度、定年退職するにあたり、これまでお世話になった連大の諸先生方と事務局の皆様へ御礼の言葉を申し上げたい。長年、ありがとうございました。頓首。

これまでの教員生活を振り返って



琉球大学教授 農学部
諸見里 善一

来る3月31日をもって、琉球大学および鹿児島連大を定年退職することになりました。私の専門は植物病理学で作物の安定生産に欠かせない学問分野です。私が植物病理学と言う学問に初めて接したのは高校の時でした。琉球大学に最も近い所にある首里高校の時代（2年生）に微生物に興味があったので、農学部に行ったところちょうど田盛先生がハワイ大学から琉大に赴任しており、カビや植物病についてうかがったのが最初でした。その後琉大に入学し植物病理学研究室に入り、卒論研究をやりました。私の生家は造り酒屋で、子供のころから麹菌や酵母菌には普通に接していたので、このことも影響されていたのかもしれない。

その後、大学院を経て、昭和53年6月に琉大に助手として採用されました。着任して2か月後にはこれまでの右側通行から今の左側通行に変わるいわゆる730をよく覚えております。

助手時代は植物病理学実験を担当し、その後植物病理学概論、土壌伝染病学、土壌微生物学および熱帯植物病理学などの講義を担当しました。研究では、最初ソラマメ壊疽モザイク病から出発しましたが、その後リゾクトニア菌、トリコデルマ菌、コレトリカム（炭疽病）菌など多くの菌を取り扱い、最近では土壌線虫病にも取り組んでおります。

植物病理学の目的は最終的には植物病の防除法を確立することにあります。防除は病原菌との戦いであり、中国の古書、孫子の兵法からは非常に有用な示唆がえられます。たとえばその一節に「彼（敵）を知り己を知れば百戦危うからず」と言うのがあります。これはすなわち敵である病原体に実体（病原学）やその性質・能力（生理、生態学）を知ることによって的確な防除体系が確立でき、被害を最小限にすることができるということであろう。逆に、「敵を知らず、己を知らざれば戦うごとに危うし」とある。病原体のなんたるかも知らず、その性質や行動も知らないうえに、自分の科学的思考も手法も備えていなければ、的確な防除法どころか、大被害をまぬかれないということであろう。孫子の兵法にはさらに、「百戦百勝は善の善なるものにあらざるなり、戦わずして兵を屈するのが善の善であると説いている。これは防除とは、何も病原菌を皆殺しにすることではなく、病原がいたままでも、病気が起こらないことにすること、さらには病気が少々発生しても実害がないのならそれでよしとするという考え方である。私の植物病防除の基本的な考えはそこに行きつきます。なぜなら、病原菌を皆殺しにする考え方が、農薬による環境汚染、リサージェンス、人畜への影響、耐性菌の出現など様々なリスクにつながっているからです。今日植物病の防除の主流となっている化学合成農薬によって病原菌を殺菌・静菌する方法は、実は他の方法に比べるとその歴史はせいぜい120年余である。一方、宿主植物の栽培法の改善や抵抗性品種を利用する方法は長年にわたり行われてきた。また、農家レベルでは適期適作、適地適作が行われてきました。さらに発生の誘因である環境に働ける方法は、マンゴー炭疽病が雨よけ栽培を導入することにより激減させ、経済的栽培ができるまでに功を奏したように、大きな効果をあげています。的確で環境負荷の低い防除法を確立することがこれからの時代に要求されています。

地球レベルでは人口の爆発的増加、資源の枯渇、国内ではTPPなど様々な難問に直面している今日、病害虫の防除はさらに重要性を増すでありましょう。

私は鹿児島連大には学位審査に参加したのみで、これと言った仕事はせずにまことに恐縮しております。長い間お世話になりました。皆様の益々のご発展を祈っております。

◇旧代議委員のあいさつ

御礼とお願い



生物生産科学専攻
地域・国際資源経済学連合講座
佐賀大学教授 農学部
稲岡 司

ここ2年間、いたらないながらも当該講座の代議員を務めさせていただきました。最初の年の研究科長・副研究科長だった菅沼先生・杉元先生、そして昨年からの研究科長・副研究科長の杉元先生・山本先生には特にお世話になりました。それから川添さんをはじめとする事務の方々には私が無知で怠惰なためにいろいろとご迷惑をおかけしました。改めてお詫びと御礼を申し上げます。また、同じ代議員として一緒に議論させて戴いた先生方にも厚く御礼申し上げます。私の専門が農学部にとっては境界領域である健康科学や地域研究（途上国の環境問題と健康問題）なので、正統な先生方には異端児だったかもしれませんが、ようやく連大というものを理解し、少しは考えることができるようになりました。

そんな僕でしたから、最初に就任した時に代議員として実行しようと思ったのは、第1に代議委員会には全部出席してトンチンカンでも何でもいから何か発言すること、そして第2に宴会には必ず出席すること、でした。2～3回を除いて上の2つは叶えられたと思うのですが、残念なことに最後の代議委員会と宴会（歓送会）には出張の都合でどうしても出席できませんでした。ちゃんと皆さんに感謝のご挨拶を、と思っていたので、ここで紙面をお借りして少し書かせて戴きます。

基本的に連大にはこんな僕を仲間に入れて戴いた、という意味で感謝していますが、幾つか疑問を持つとか次の代議員の先生に議論をしていただきたいことがあります。第1に博士論文の最終審査のことですが、教授会が最終決定機関とは言え、博士論文を審査するのではなく博士論文審査会の結論を支持するか否かという形がよからうと思います。同じことと思われるかもしれませんが、農学は広い分野を包含する（僕が入れて戴いたのが証拠です）ために、個人で審査できない論文が多くあると思われます。ついでながら以前「この論文は農学ですか？」という原理主義的な質問を受けたことがあるのですが（これは「評価できない」と同義だと考えられます）、その先生は否と入れられました。

第2に博士論文受理に関することですが、鹿児島連大基準の「3年間に2報」というのは分野によってはかなり厳しいと思われます。実際には在学してから2年半しかないのに、その間に受理されなければならないということで、指導教官の先生方はジャーナルを探すのに四苦八苦します。この基準と同じ連合大学院は世の中の半分だと聞きます。もう少し考慮してあげてはどうでしょうか。ついでに、その受理期間も少しでも在学3年間に近づけるように、「年内の受理」とか「審査委員会までの受理」にすれば3年で修了できる学生も増えると思われます。

なお、これらは僕なんぞが言うまでもなく代議委員会でも議論がされましたが、結論が持ち越されました。「学生のため」という金科玉条は余り好きではありませんが、変化のないところには何も起こりませんので、ぜひ学生のために改善をお願いしたいと思います。既に創立後25年の歴史を持った鹿児島連大ですが、これからは保身に走らず、ぜひ斬新な改革を推し進めていただきたいと思います。最後に、酒の好きな僕もこのまま行けば退職まであと6年ありますので、これからは事あるごとに宴会には参加しようと思っています。特に同期の代議委員の先生方とは「OB会」の名目で飲みたいと思っていますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

代議委員の任期を終えて



農水圏資源環境科学専攻
生物環境保全科学連合講座
鹿児島大学教授 農学部
岩井 久

あつという間の2年間でした。この間、私は、代議員名簿上では、専攻とは別に選ばれた、いわゆる講座外委員で、最後まで連合講座選出委員にはならないままでしたので、気楽にやれるはずでしたが、どういわけか、入試検討委員長や専攻長などを拝命し、戸惑いつつの職務でした。しかし、事務の方々が忍耐強く親切に支えてくださいましたので、大過なく終わらせて頂きました。というか、その実は、まだ退任したくなかったのが本音です。それは、任期を終了する先生方が毎年必ず書いておられるように、3 大学4 部局の先生方や事務の方々との懇親会の例えようのない楽しさでした。また、通常ですとまず知り合いになるはずがない他大学の異分野の先生に畏友ができたことは、今後の大きな財産です。今年5月の代議員会は沖縄ですか?・・・何か理由をつけて出張して、夜だけ合流するのはだめでしょうか?・・・とは言ったものの研究科長からも事務室長代理からもお誘いがありませんが?! (これは冗談)

毎月の代議員会の席上では、持論を展開し過ぎて会議の進行を滞らせたことが多々ありましたことを、この場を借りてお詫びいたします。しかし、懇談を継続して頂きたいことを、最後ですので一点だけ申し送らせてください。

巷では(というかマスコミでは)、理研の STAP 細胞に関する論文の疑義が延々と続いています。電気泳動画像の切り貼りの是非という次元が高くない議論で、内部調査委員会委員長が退任するは、あげくは IPS 細胞の論文までがやり玉に上げられるなど、再生医療を牽引する重要な頭脳人が、エネルギーを本来使うべきでないところで消費している有様は見ていてもどかしい限りです。ネタ探しのマスコミと執拗なネット・クレマーの仕業が、同分野で日本を迫撃している外国に利し、日本の首を絞めることは間違いなく、残念極まりないです。理研では理事長の指示で所員全員の過去の論文の洗い出しが始まるというので驚愕・・・文科省が全ての分野の大学院の発表論文の検査というまさかの命令をして来ないことを祈ります・・・その一方で、トップレベルのインパクトファクター(IF)を維持する Nature 級の雑誌の論文でも、その製造工程はやぶの中ということが露呈されました。例え学术论文といえども、編集者や読者は「性善説」に立ちながら、常に懐疑をもって利用するしかないといえましょう。

まわりくどい前振りを申し上げましたが、私が言いたいのは、学位論文提出に係る論文の基準についてです。そろそろ、PubMed への掲載やトムソン・ロイター社の IF に偏重した物差しにだけ頼るのではなく、各専門分野で独自の基準を作る努力を始めてみてはどうでしょうか?・・・これだけ多様な分野からなる研究

科なので、論文の質を量る際に IF という数値で評価するのが手っ取り早いのは解ります。しかし分野や学界によっては国内での活動が中心で IF が出難い雑誌が相当ある。トムソン・ロイターは合衆国の一大手情報企業です。しかも、ある雑誌に IF を付与するかどうかの基準は社独自のもので判然としない。そして、論文の引用回数が雑誌の質や価値を示しているかどうかについては疑問視する声も多いのです。その一方で、和文論文のことを考えると日本学術会議の協力研究団体および登録学術研究団体の学会誌一覧は、まだ意味があるかもしれない。各連合講座で IF の有無に拘ることなく、評価に足る論文のリストを独自に作成したと思うのですが、いかがでしょうか？・・・昨年の代議員会では、この考えについて賛成の人が多かったのですが、具体的な行動には移せないまま終わってしまい、面倒を先送りしてしまいました。自分の不徳を棚に上げつつも申し上げますが、是非とも実現してほしいと思います。

最後になりますが2年間本当にお世話になりました。今後も指導教員として連大の発展に微力ながら貢献していきたいと思います。

楽しかったです



応用生命科学専攻
食品機能科学連合講座
鹿児島大学教授 水産学部
板倉 隆夫

早いもので、代議委員の2年の任期が終わりました。水産学部では教授会の時の連大報告を1年目の代議委員がすることになっていますが、2年目になった時その役目が終わったので少しほっとしたことを覚えています。2年目では、水産学部が「一般セミナー」の担当となり、代議委員2年間でそれが一番の仕事でした。会場を、それまで利用していたホテルから、より交通の便が良いホテルに考え、実際に見に行くと、天井が低い、スクリーンが小さい、など悩みましたが、交通の便と、水族館が近い、ということなどを優先しました。天文館（繁華街）が近いということは、ややプラスと判断しました。ホテル側との事前交渉では、交流会（レセプション）を、いかに作り上げるかに腐心しました。結果的には、スクリーンの方は連大からお借りしたものがまずまずのサイズであり、交流会も学生の負担を抑えたままで満足していただけるものになったと思います。交流会で予算を浮かせ、ポスターセッションで茶菓とソフトドリンクを提供したことは、海外ではごく当たり前のことですが、「一般セミナー」での新しい試みでした。セミナーの最初と最後に私が司会を務めさせていただきましたが、クリッカー（レスポンスカード）を持ち込み、質問を少し工夫してアイスブレイクとしました。学生が受けてくれたので楽しい思い出となりました。

代議委員2年目でのもう1つの仕事として、水産学部設置されているSINET3の設備を、大教室（学部の授業での利用頻度が高く、連大で利用し難い）から、タイミングよく改装となった附属図書館水産学部分館に新設される多目的室に移設することを考えました。幸い私が分館長であったので、連大、図書館、水産学部の連携で移設を進めることができました。分館長としての私の考えは、多目的室を通常の教室として使えるようにして、図書館利用（利用者数）を高めることにありました。それにSINET3の設備が加われば価値の高い教室になります。連大から配分された予算を活用させていただき、SINETの工事担当は東京の業者に決められていますが、学部会計担当者と協力して映像設備だけは地元の業者に依頼できるようになんとかできたため、当初の見積りよりもりっぱな設備を入れることができました。40席の小さな教室ですが、200インチワイド（横4.4m×縦2.5m）のスクリーンに、7,500ルーメンのプロジェクタと、学内でも例の無い設備となりました。SINET3での遠隔授業で十分な品質の映像を提供できることはもちろんです。

2年目で2つ仕事のできたので満足は、しておりますが、ちょっと心残りなのは、代議委員会で使っているiPadの利用方法の改善が実現できなかったことです。技術的には簡単なもので、いずれ、利用しやすく、かつ事務的に問題無い形で実現することを願っています。あと、今年1月の「英文論文作成指導セミナー」の前座で少し話をさせていただきましたが、連大生の英語力（英語基礎力と言っていいでしょう）の改善は大きな課題だと感じています。「一般セミナー」（参加者の訳半数が留学生）でも感じたことです。ほんとうは、学部教育、あるいはそれ以前の学校教育の問題かもしれませんが。

代議委員の役は、今思えば、沖縄や佐賀に行って美味しいものを食べたり、セミナーで学生の明るい顔を見たり、楽しいことだけが思い起こされます。今年からは、普通の指導教員に戻り、学生指導に努めたいと思っております。連大のますますの発展を祈念いたします。

雑 感



生物生産科学専攻
動物資源生産科学連合講座
琉球大学教授 農学部
及川 卓郎

2年前に代議委員を仰せつかった時には、2年間の期間は相当長いと感じられたものですが、いざ2年間の任期を終えてみると、あっという間の2年間であったという思いです。1年目は菅沼研究科長、2年目は杉元研究科長と2人の研究科長の元での任期で、中間には研究科長選挙も経験できました。代議委員としての2年間の内の1年目は見習い期間のような意味合いのある期間であると思いますが、私も琉球大学に着任後2年あまりで拜命したもので、事情がよくわからずの1年目であったと思い返しています。1年目の後半の委員会では次期代議委員を選ぶ会議があり、代議委員会の配置表が配られますが、事務局の方で絶妙の配置が考えられているので、活動しやすいよううまくバランスがとられています。この配置のおかげで、安心して1年目の活動を行うことができたと感じています。

代議委員と仕事としては、委員会活動、講義の企画と講師の選択、母体大学との橋渡し役などいろいろありますが、これらの仕事の中で一番印象に残っていることは、研究科長裁量経費によるプロジェクトの企画とコーディネートでした。2年目には予算が増額されたこともあり、企画しがいのある仕事になりました。外山先生、川満先生それと私と3人いる代議委員でそれぞれプロジェクト案を考えて活動したわけですが、中でも川満先生が提案したフォローアップセミナーが強く印象に残っています。全予算の約70%を費やすビッグプロジェクトでしたので、3人の代議委員と協力者も含めて役割分担を行い、開催にこぎつけたわけです。企画の段階から国際交流、留学生受け入れに有効な計画なので成功することが予想されていましたが、実際に当セミナーを開催したら予想以上の成功を収めたプロジェクトになりました。成功の要因は、連大修了生が再び母校を訪れたいという熱意、国際交流を進めたいという連大側と修了生側のベクトルの一致、師弟関係をはじめとする絆、そして旧指導教員を中心とした担当教員のおもてなしの心であったと思っています。このように修了生と教員、修了生同志、修了生と退官教員とのコミュニケーションでは大いに成果が上がったものの現連大生との相互活動という意味では物足りなかったと思います。異質なもののぶつかり合いから新しいものが産み出されるという原則を活かす工夫があっても良かったと思います。また、プロシーディングを出版して記録として残すということも大事かと思っています。最後にボランティアとして参加した多数の学生、院生の協力があつたことを記して、ペンを置きたいと思っています。

代議員の任期を終えて



応用生命科学専攻
生物機能科学連合講座
琉球大学教授 農学部
外山 博英

鹿児島大学大学院連合農学研究科の代議員を2年間務めさせていただきました。沖縄から毎回飛行機に乗ってやってくるのは結構な時間が取られますので、当初は非常に苦痛でしたが、終わってみればそれほどでもなかったかな、という感じです。それでも計算してみますと、飛行機以外の移動の時間も含め、4時間くらい使っていますので、往復8時間、月1回として年に96時間、2年間に換算すると移動だけで実に丸々8日分の時間を費やした計算になります。ではありますが、代議員をしたことで、連大の仕組みや管理運営上のことをよりよく知ることができ、貴重な経験でした。任期中に自分がどれだけ連大に貢献できたのかはわかりませんが、精一杯やったつもりです。

その中でも、研究科長裁量経費を使用して、分野別（農芸化学関連）のセミナーを、第1回を沖縄で、第2回を佐賀大学で開催できたことは、よかったのではないかと思います。卒業時の学生アンケートでは、他大学の学生と接する機会が少ない、という意見がいつも出ていましたので、このようなセミナーを開催することで、それに答えることができているのではないかと思います。一般セミナーではできないような分野の近い学生同士でのより密な情報交換ができ、学位論文作成のための研究にもいい影響があったのではないかと思います。修士学生も何人か参加していましたので、連大への進学のもち付けになった学生もいるかもしれません。今年度は鹿児島大学主催で開催する予定です。今後も継続して開催できるように働きかけていきたいと思っています。

連大の代議員をすることで、今まで接する機会の無かった鹿児島大学や佐賀大学の異分野の先生方と懇意になれたことも、大きな財産となりました。また、代議員に与えられたインセンティブ経費も大変ありがたかったです。菅沼前研究科長、杉元現研究科長には改めて御礼申し上げます。また、鹿児島大学農学部の焼酎学講座の玉置尚徳教授とは以前から個人的に知り合いで懇意にさせていただいていたので、ほぼ毎回夕食の宴に付き合っていました。時々委員会の翌日の土曜日に観光に連れて行っていただきました。玉置先生にも改めて御礼申し上げます。代議委員会でも年に2回の懇親会があり、そのおかげもあって、鹿児島の街にも詳しくなりました。

終わってしまっ、これから鹿児島へ出張でいく機会もずっと減ってしまうと思うと、少しさみしい感じもあります。今後とも連大の発展のために、微力ながら尽力してまいりたいと存じます。

退任のご挨拶の代わりに文章とさせていただきます。

◇新代議委員のあいさつ

ご挨拶



生物生産科学専攻
熱帯自然・植物生産科学連合講座
佐賀大学教授 農学部
鈴木 章弘

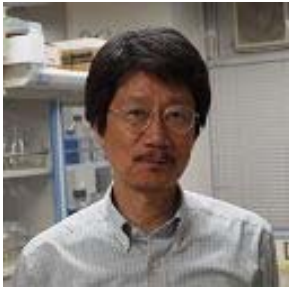
平成26年4月から熱帯自然・植物生産科学連合講座の代議委員になりました鈴木章弘です。よろしくお願いいたします。

私は静岡県で生まれ、北海道大学、農水省（ポスドク）を経て平成10年4月に鹿児島大学理学部生命化学科に助手として採用されました。そしてそこで現在の研究テーマである「高等植物と微生物との共生に関する研究」をスタートさせました。着任直後の研究室は、今では考えられないことですが教授2名、助教授1名と私という4人体制で、教育・研究いずれにおいても分からないことを直ぐに質問できる環境でした。したがって研究を推進するという点ではかなり恵まれていたと思います。しかし今思えば恵まれていただけに、それに甘えてしまった部分が相当あったと残念な気持ちもあります。そして7年後の平成17年4月に佐賀大学農学部へ赴任しました。異動してからしばらくの間は、共同研究や学会等で鹿児島を訪れるたびに、何とも言えない「大事なものを失ってしまった時の切なさ」のようなものを感じており、その時初めて鹿児島島という町が自分の中で相当大きな存在になっていたのだと気付かされました。代議委員になるとほぼ毎月鹿児島を訪れることができるので、個人的には大変嬉しく思っています。

専門は作物生理学です。ご存知のようにマメ科植物は根に根粒菌を住まわせて、空気中の窒素を固定して窒素源として利用することができます。そしてこの非常に有益な作用のメカニズムを世界中の科学者が競って研究し極めて膨大な情報が蓄積しています。しかしながらそこで得られた知見を作物生産に応用するという点では研究が進展しているとは言い難い現状です。このような状況を踏まえ、私は何とかしてマメ科作物の窒素固定能力を増強させて、作物生産に結びつけたいと考えています。また、佐賀大学へ移ってからは高等植物と菌根菌との共生の研究にも着手し、共生の効率を上げることで作物の生産性を向上させる方法を模索しています。

研究の進展は、博士課程の学生がいるとしないでは大きな違いが出てきます。したがってこの連大を効率よく維持・運営していくことは、私達にとって極めて重要な意味を持ちます。現在の私は、連大のシステム等まだまだ分からないことばかりですが、代議委員会メンバーの先生方からのご指導を受けながら、まずは与えられた仕事を1つ1つこなしていきたいと考えております。2年間、どうぞよろしくお願いいたします。

代議委員就任のご挨拶



応用生命科学専攻
生物機能化学連合講座
鹿児島大学教授 農学部
玉置 尚徳

この度、生物機能化学連合講座の代議委員を仰せつかりました鹿児島大学農学部の玉置です。私、不勉強のため連大のシステムをまだ正しく理解できているとは思えず、代議委員としてお役に立てるのか非常に不安ではありますが、皆様のご指導ご鞭撻を賜り職責を全うしたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

私が、鹿児島大学に赴任したのは平成19年の3月ですから、かれこれ7年の歳月が過ぎたこととなります。当時、鹿児島大学に設立された寄付講座「焼酎学講座」の特任教員として赴任してまいりました。焼酎学講座は、鹿児島県の酒造メーカーと鹿児島県の寄付によって設立されたのですが、従来の寄付講座とは異なり、学部・大学院の学生を受け入れて教育と研究を行うという特別なものでした。そのため、赴任の半年後からは、連大にも参加させていただくことになりました。焼酎学講座は、平成23年3月末に終了しましたが、平成23年4月からは、鹿児島大学農学部附属焼酎・発酵学教育研究センターとして新たなスタートをきり、焼酎はもとより発酵産業にまで範囲を広げた活動を行っています。

私の専門は、応用微生物学で主に酵母に関する研究を行っています。酵母は、遺伝学をはじめとするエレガントな研究手法が確立されているモデル生物であり、様々な研究分野で使われています。これまでに、細胞周期やテロメアの解析に用いられノーベル賞受賞につながっています。また、昨年のノーベル賞（生理学・医学賞）を受賞したRandy Schekman博士も酵母を用いて小胞輸送や分泌に関する先駆的な研究を行ったことは記憶に新しいところです。ただ、使いやすいため、通常のスクリーニングでは新規な遺伝子を見出すことは難しくなっていることも事実でしょう。私はこれまでにその落穂拾いのような形で、酵母におけるグルコース認識とシグナル伝達についての研究や、細胞膜リン脂質のメンテナンス機構に関する基礎的な研究を行ってきました。焼酎学講座に赴任してからは、焼酎酵母に関する応用的な研究をスタートさせています。焼酎酵母は2倍体で孢子を形成しにくいことから、育種を目的とした変異株の取得が難しいと考えられています。このことを解決し、焼酎酵母の育種を容易にする方法の開発に取り組んでいます。このように、酵母は基礎研究と応用研究の両方に用いられるわけですが、連大においても基礎と応用の両方に適応できるような人材の育成を行っていきたいと思っています。連大では、4名の学生の副指導教員と1名の社会人学生の主指導教員を務めています。今後は、研究指導はもとより代議委員として広い視野を持って勤めさせていただきたいと思っています。どうぞよろしくお願い申し上げます。

振り返れば連大



応用生命科学専攻
食品機能科学連合講座
鹿児島大学教授 水産学部
上西 由翁

板倉隆夫先生にかわり、平成26年度から代議員になりました上西（かみにし）です。生まれも育ちも鹿児島です。高校卒業当時に家業が鹿児島市内でさつま揚げを製造しており、また、跡取り息子だったことから、鹿児島大学水産学部に入學しました。さつま揚げにみられる水産ねり製品業界は今でもそうですが、職人さんの経験からくる技能に頼るところが大きいです。「地元のねり製品業界が大手資本に対抗するためには、科学の知識を取り入れる必要がある」というのが父の口癖で、その影響を受けての入學だったと思います。その後、大学院に進學しましたが、研究テーマは卒論と同様「さつま揚げ」に関するものでした。

大学院修了後、家族の期待通り？に家業を継ぎました。仕事を始めて4年目に、鹿児島市が募集していた「海外青年派遣生」に選ばれて、米国に行くことになりました。事業の趣旨は、海外を視察して鹿児島市の発展に貢献することでした。国際化が進んでいる米国に行くのだから、今後の参考にと物と人の流れを見たいと思い、私の指導教官だった先生に相談に行きました。その時でした。「来年から鹿児島大学に連合農学研究科ができるので、チャレンジしてみないか」との先生のお言葉に、時間が止まったような不思議な感じを覚えました。昭和62年10月のことでした。

昭和63年4月、連大の第1期生として入學しました。研究テーマはもちろん「さつま揚げ」に関することです。先生方の熱心なご指導の下で、研究は当然のこととして、それ以外にも現在の仕事の基盤となる多くのことを学ばせていただきました。連大在学中は、従来の研究手法にとらわれずに新しい切り口で研究ができないかと無謀にも思い、宮崎大学や鹿大農学部、水産学部の野呂先生に電子顕微鏡を、工学部にはNMRを習いに行きました。また、異なる分野の研究手法にも興味があり、他の研究室にお邪魔するたびに多くの先生方から親切なご対応をいただきました。連大修了後は遺伝子工学が普及し始めた頃で、鹿大医学部の第3内科で1年間、遺伝子診断に関する基礎研究をさせていただきました。今から考えれば、連大の学生という身分が幸いしていたのかもしれませんが。

人生どこでどう変わるか分からないもので、医学部でお世話になった直後に、ひよんな話から下関にある国立水産大学校に赴任することになりました。生まれてから初めて、鹿児島県を離れて生活することになりました。水産大学校は農林水産省の管轄で、行政と深く関わっている大学です。そのため、専門以外の補助事業の研究をすることもあり、連大在籍中に先生方から教えていただいたことが大変役に立ちました。水産大学校に9年間、在職した後、平成14年に海洋生物工学研究室に赴任して12年目になります。指導している学生は、ウナギ筋肉の緑色蛍光タンパク質について研究しており、同じ研究室の板倉先生からアドバイスもいただきながらやっています。趣味は芋焼酎を飲むことぐらいです。自分史を書き終えてミッションの再定義をしてみると、「振り返れば連大が転換期」だったような気がします。今度は、連大にお役に立てるように頑張りますので、よろしくお願いします。

ご挨拶に代えて



農水圏資源環境科学専攻
地域資源環境工学連合講座
琉球大学教授 農学部
芝 正己

この度、新しく代議員になりました琉球大学の芝 正己です。
鹿児島大学大学院連合農学研究科の代議委員会のメンバーとして研究科の運営に係るのは今回が初めてですので、諸先輩方にご迷惑をおかけすることも多いかと思えます。
どうぞ宜しくお願い致します。

琉球大学に赴任してまだ3年あまり。もう、と言うべきなのでしょうが？
沖縄の気候、文化、衣食住、歴史……。ありとあらゆるものが本土のそれとは異なり、五感を通して新しい刺激が私のうちに入ってくるのがわかります。私が学生時代も含め故郷より長く住んだのは、京都でした。日本の歴史そのもの、と言っても過言ではない土地からの赴任ですから、なおさらです。
教員後半の頃は、とにかく無難に無難にと過ごしやすいものですが（それも、また否定するわけでは決してありません）、その時期に若者のような刺激に満ちた毎日を過ごせる贅沢に浸っています。

また、沖縄は同じ日本に居ながらも、少し離れた角度から本土の営みを見る、ことの出来る土地です。
海外に出て、初めて日本という国が見えてくるのとは全く一緒、ではありませんが、それに近い感覚は得ることも出来ます。その意味からも、沖縄の存在は大きい。
鹿児島大学大学院連合農学研究科の中でも、琉球大学がそんな役割を果たせればなあ、と思います。

気候は、そこに住む人間の営みに大きな影響を及ぼします。本土の私達は、温帯という画一の気候の中で長い年月、同じような影響を受けてきた集大成の人間です。また、それが日本人の大部分です。
このことは利点もたくさんありますが、世界がグローバル化した現代では弱点になりかねません。
そこを沖縄的なものが補完出来るのではないかと感じています。亜熱帯という、唯一温帯とは異なる気候の影響を受けている土地なればこそ、の強み（従来は弱点とされてきましたが）とでも言いましょうか。（北海道も冷帯に属しますが）

本研究科での外国人留学生の割合は5割に迫ろうとしています（平成25年4月1日新3専攻現員：42.4%）増加しています。少子化も相まって、その比率は増すばかりでしょう。言い換えれば、外国人留学生に魅力ある連合農学研究科でなければ、生き残りは難しい。
しかも彼らは、帰国後は母国の中核となる人材です。その彼らに日本の中にも多様なものはあるよ！、と紹介する手助けを琉球大学、沖縄が出来れば素晴らしい、と思うのですが……。

ご挨拶



生物生産学専攻
地域・国際資源経済学連合講座
琉球大学教授 農学部
内藤 重之

この度、代議委員になりました琉球大学の内藤です。よろしくお願いいたします。

私の専門分野は農業経済学、なかでも農業市場論や食料流通論です。私は2007年5月に琉球大学に赴任しましたが、それまでは大阪府の試験研究機関に勤めていました。地方公務員という立場でしたので、そこでは専ら地域貢献のための研究を行っていました。大学院博士後期課程を中退して研究所に赴任した1993年には、ちょうど大阪府内で花き卸売市場の統合整備が進められており、卸売市場の大型化による花き流通の変化とそれに対応した産地・生産者の販売戦略について研究することが大阪府での最初の仕事でした。幸い調査研究の成果が行政職員や農業改良普及員、卸売市場関係者などからも評価され、受託研究などにも恵まれたことから、数年間この研究を継続することができ、博士論文としてまとめることができました。その後は都市化の著しく進展した大阪で農業を継続していくためには地産地消や都市農村交流を進めていくことが重要であるため、それらに関する調査研究に取り組みました。その間、大阪府立大学、東京大学、京都大学などの学生・院生の研究指導や学位論文審査を担当したり、農業大学校の非常勤講師を務めたりする機会がありましたが、常時学生の教育を行う機会はありませんでした。かねてから農業が重要な産業として位置づけられており、農村が重要な生活の場となっている地域において研究を行いたい、また学生の教育を行いたいと考えていましたので、琉球大学で教育・研究ができることは私にとって大きな喜びです。ただし、あえて難を言えば、琉球大学には農業経済学の教員が2人しかおらず、森林経済学分野を含めても社会科学を専門とする教員は4～5人にすぎませんので、教育・研究には限界があります。

このような中、鹿児島大学大学院連合農学研究科は非常に重要な役割を果たしています。3大学による指導体制があればこそ、社会科学分野の学位取得が可能になっているといえるでしょう。また、連合農学研究科での交流が共同研究の推進など研究面でも大いに役立っています。

今後とも連合農学研究科がますます発展するよう、代議委員として微力ながら頑張りたいと思いますが、何分わからないことばかりですので、ご指導・ご協力のほどよろしくお願いいたします。

◇新入生の素顔

平成25年10月入学（4名）

【応用生命科学専攻】
生物機能化学連合講座

ドアン ダン フィ コング
Doan Dang Phi Cong (Vietnam)

Title of research: Biodiversity of Petroleum Degrading Microorganisms in
the North-west Pacific

Advisory Professor: Yoshie TERASHIMA (University of the Ryukyus)

First Vice-Advisory Professor: Hirohide TOYAMA (University of the Ryukyus)

Second Vice-Advisory Professor: Hisanori TAMAKI (Kagoshima University)



My name is Doan Dang Phi Cong from Ho Chi Minh city, Vietnam. I obtained my BSc. and MSc. (both major: Microbiology) from University of Science, Vietnam National University-Ho Chi Minh City (HCMUS-VNU) in 2001 and 2005 respectively. I have been working as a researcher in Research and Development Centre for Petroleum Safety and Environment, Vietnam Petroleum Institute (CPSE-VPI) since 2001. As a researcher in CPSE-VPI with over ten years, my research interests are ecotoxicology, especially the toxicity for marine organisms and biodegradation of contaminated oil and other relevant petroleum chemicals; and petroleum-degrading microorganisms. Recently, I am anticipating a project in which some abundant petrophilic bacteria in the coastal sediment of Southern Vietnam were isolated, studied and developed into a suitable production for treating crude oil contaminated sand/sediment. In addition, one of unforgettable experience which I want to share is my environmental surveys in oil and gas fields by survey vessel for assessing the impact of oil and gas activities to offshore environment in Vietnam.

Now I am a PhD student in Bioscience and Biotechnology and my research about petroleum-degrading microorganisms. My research focus on the diversity of hydrocarbon degrading microorganism in the North-west Pacific including Southern Vietnam (tropical), Iriomote Island – Okinawa (sub-tropical) and Kanto Region (temperate) area. The hydrocarbon biodegradability and interspecies interactions of

isolated strains are also determined.

I hope that I will be able to gain scientific knowledge, experiences and establish good relationships with colleagues and friends during three-year study in Japan.

Finally, I would like to pass my special gratitude to Professor Yoshie Terashima for her helpful support and supervision for my study in Japan.

【農水圏資源環境科学専攻】
生物環境保全科学連合講座

ひぐち さとし
樋口 聡志 (日本)

研究 題 目：ウイルスを媒介するタバコナジラミの生態
および防除に関する研究

主 指 導 教 員：津田 勝男 (鹿児島大学)

第一副指導教員：坂巻 祥孝 (鹿児島大学)

第二副指導教員：徳田 誠 (佐賀大学)



平成 25 年 10 月から農水圏資源環境科学専攻に在籍することになりました。私は、鹿児島大学の害虫学研究室を卒業後、平成 12 年から熊本県の職員として働いています。現在、熊本県農業研究センター生産環境研究所病害虫研究室に勤務しており、稲や野菜の栽培で問題となる病害虫の生態や防除技術に関する研究を行っています。

勤務場所である熊本県は、施設果菜類の生産では全国有数の産地で、各地域に施設ハウスが多数あります。特に、全国における生産量をみると、トマト、スイカが 1 位、メロンが 2 位となっています。現在、これらの果菜類の栽培で問題となっている病害虫は、タバコナジラミが媒介するウイルス病です。そのウイルス病は、トマトでは **Tomato yellow leaf curl virus (TYLCV)** を病原ウイルスとするトマト黄化葉巻病、スイカおよびメロンでは **Cucurbit chlorotic yellows virus (CCYV)** を病原ウイルスとするスイカ退緑えそ病、メロン退緑黄化病です。これらウイルス病の被害は、果実収穫量が大幅に少なくなるなど、深刻な問題となっています。そのため、今回の研究では、これらの病原ウイルスを媒介するタバコナジラミの生態や防除に関することを題材としています。

久しぶりに鹿児島に行ってみると、桜島の火山灰がひどくてびっくりしました。10 月の入学式後も火山灰が降り、スーツが真っ白になっていました。火山灰はほどほどにしてほしいですが、鹿児島での焼酎は楽しみしています。

【農水圏資源環境科学専攻】
地域資源環境工学連合講座

プリーチャー ガーベツ
PREECHA KAPETCH (THAI)

Title of research: Optimized Sugarcane Modeling for Estimation Sugarcane
Yield in the Northeast of Thailand

Advisory Professor: Kazuhito SAKAI (University of the Ryukyus)

First Vice-Advisory Professor: Shinya Nakamura (University of the Ryukyus)

Second Vice-Advisory Professor: Toshiyuki Cho (Saga University)



Hello, my name is Preecha Kapetch from Thailand. I received a scholarship for study PhD. Program from Agricultural Research Development Agency (Public Organization) (ARDA), Thailand. Thanks you very much to ARDA and thanks also to University of the Ryukyus for gave an opportunity to come here. I entered to the university in the second semester, 2013 with the research that relate to sugarcane production in the Northeast of Thailand. Before I come here, I have been working for sugarcane production at Khon Kaen Field Crops Research Center, Field and Energy Crops Research Institute, Department of Agriculture, Government of Thailand. My previous works are related on improving sugarcane yield in the sugarcane planting area in Thailand. Until now my research interests are improvement of sugarcane yield in the Northeast of Thailand that focus on soil moisture changing in sugarcane planting areas and effect of environmental and climate change to sugarcane production. I need to use a new technology for my research. So, crop model is a tool that can help me to assess management strategies for improving sugarcane production in the Northeast of Thailand. That is the background for my research title “Optimized sugarcane modeling for sugarcane production in the Northeast of Thailand”.

About my life in Japan, it is very interested. I cannot speak, write, read and listen not only in Japanese but also my English was broken too. It was a challenged for me to stay here. But it is unfortunately, I can stay in Japan only 3 months because of scholarship condition. First, I think that it was very long time for me to stay in Japan but in contrast, it was unfortunately, while everything will going to perfectly I must go back to Thailand to conduct my research.

Thank you so much to Prof. Dr. SAKAI and Ken OKAMOTO for preparing laboratory room and the guidance for study and good facilitation during I stay in Japan. This study is the part of my life that not only to improve my knowledge but also more experience and connection between researchers are very important for me. Hope to see everyone again.

Come to see me at Khon Kaen whenever you have an opportunity to visit Thailand- you're always welcome!

【農水圏資源環境科学専攻】
水産資源環境科学連合講座

モハマド サカワット ホサイン
M D. Sakhawat Hossain (Bangladesh)

Title of Research: Studies on the nucleotide nutrition and development of
functional feeds for cultured marine species

Advisory Professor: Shunsuke Koshio (Kagoshima University)

First Vice-Advisory Professor: Manabu Ishikawa (Kagoshima University)

Second Vice-Advisory Professor: Yamamoto Atshushi (Kagoshima University)



Greetings. It's my pleasure to introduce myself; this is Hossain Md. Sakhawat from Bangladesh. In Bangladesh I worked in a public university named 'Sylhet Agricultural University' as Assistant professor in the department of Aquaculture. From the very beginning I had a sneaky ambition to do higher study in the field of fish nutrition in abroad. Japan is an excellent country for higher studies. As a country options for my higher study, Japan was my first priority. I was inspired from many of my teachers and seniors at my university level. Getting Japanese government Scholarship (Monbukagakusho- MEXT) was the gateway to fill up my dreams. As a Japanese government scholar I came in Japan in October 3, 2012. For pursuing my Ph.D degree. Now I am working under the supervision of my reverend Sensei world famous fish nutritionist Professor Dr. Shunsuke Koshio in the lab of aquatic animal nutrition, Faculty of Fisheries, Kagoshima University.

I am intended to conduct my research on Nucleotide nutrition entitled 'Studies on the nucleotide nutrition and development of functional feeds for cultured marine species'. Supply of good quality feeds and disease management are important limiting factors for aquaculture production in all over the world. Development of functional feeds will help us to overcome these limitations of aquaculture production and could make aquaculture venture profitable. I strongly believe the outcome of my research will play

a very positive role in the aquaculture sector of my country as well as the whole world aquaculture.

I am very happy to stay in Kagoshima as well as Japan. The weather of Kagoshima is very similar to my country. I am continuously learning many things from my Sensei's, labmates and the world most modest Japanese peoples of my surroundings. I am enjoying the nice environments of our laboratory, Kagoshima University campus as well as the beauties of Japan. I hope the next few years of my study period will be more joyful.

I would like to express deepest sense of gratitude, gratefulness, and profound regards to my mentor DR. SHUNSUKE KOSHIO, Professor, Faculty of Fisheries, Kagoshima University, for his continuous support and supervision. I also would like to thanks to Dr. Manabu Ishikawa and Dr. Saichiro Yokoyama for their sincere encouragement and support. I am greatly acknowledged to the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (Monbukagakusho) of Japan for providing me MEXT scholarship.

Best wishes to all.

◇新入生の素顔

平成26年4月入学（24名）

【生物生産科学専攻】

熱帯資源・植物生産科学連合講座

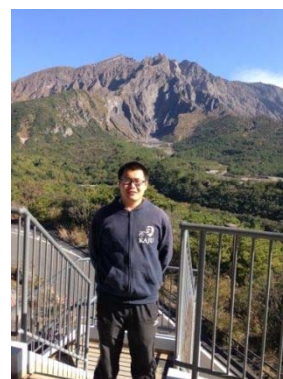
しまだ あつし
島田 温史（日本）

研究題目：パッションフルーツの環境応答に関する生理・生態学的研究

主指導教員：山本 雅史（鹿児島大学）

第一副指導教員：富永 茂人（鹿児島大学）

第二副指導教員：一色 司郎（佐賀大学）



鹿児島大学の果樹園芸学研究室に所属しています、島田温史と申します。鹿児島大学には修士課程から入学し、パッションフルーツの栽培生理に関する研究を行ってきました。学部時代は同じく熱帯果樹であるスターフルーツの結実に関する研究を行っていました。また、学部時代は小学生の時から行っている柔道部に所属していました。今現在は毎月数回大学の柔道部に参加し体を動かしています。

博士課程では土壌水分、光・温度、施肥量を制御し、これらの環境変化に対するパッションフルーツの反応を生理・生態学的に研究する予定です。これから三年間で高度な知識や技術を身につけると同時に、様々な経験を積み、人間的にも成長していきたいと思えます。

今後、共通セミナーなどで皆様とお会いできるのを楽しみにしています。

しもむら あや
下村 彩（日本）

研究題目：根への光照射による根粒形成の阻害メカニズム

主指導教員：鈴木 章弘（佐賀大学）

第一副指導教員：有馬 進（佐賀大学）

第二副指導教員：鬼頭 誠（琉球大学）



こんにちは、佐賀大学配属の下村彩です。学士、修士ともに佐賀大学で鈴木章弘教授のもと、マメ科のモデル植物であるミヤコグサと根粒菌の共生に関する研究を行ってきました。

マメ科植物は根粒菌と共生し、根に根粒という器官を形成します。植物と根粒菌は固定した窒素と光合成産物を交換することで共生関係を築いています。根粒形成は様々な環境因子により制御されますが、根に光が当たることで根粒形成が抑制されることが経験的に知られていました。そこで、私は学士・修士課程で、根への光照射と根粒形成に焦点を当て研究を行ってきました。その結果、根に光が当たることによる根粒形成の抑制は青色光が照射されることで引き起こされていることを明らかにしました。高等植物では青色光受容体として *Cryptochrome* 及び *Phototropin* が存在し、根粒菌にも同様に2種類の青色光受容体が存在することが知られています。その中でも、植物の *phot* 発現抑制株を除いて、植物の *cry* 発現抑制株及び根粒菌の *cry* 遺伝子破壊株・*phot* 遺伝子破壊株において、根に光を照射した場合で根粒の形成が見られました。特に、植物・根粒菌両方の光受容体を同時に抑制することで根粒形成は相加的に増加を示しました。光は植物の生育には必要不可欠であり、光における根粒形成への影響の理解を深めることは、植物の光ストレス応答の理解へとつなげることができると期待されます。

光に関する研究のため、日々様々な光に囲まれながら研究を行っています。引き続きこの光に囲まれながら研究できることをうれしく思い、さらなる知識を増やせるようしっかりと学んでいきたいと思えます。何もない佐賀県ですが、今年セミナーで皆さんにお会いできることを楽しみにしています。ぜひ3年間よろしく願いいたします。

まえさと かずひろ
前里 和洋 (日本)

研究題目：沖縄県宮古島の地下水保全に関する資源循環型総合研究

主指導教員：川満 芳信 (琉球大学)

第一副指導教員：上野 正実 (琉球大学)

第二副指導教員：坂上 潤一 (鹿児島大学)



沖縄県宮古島は典型的な低島で、生活用水を全て地下水に依存しており、地下水汚染は島民の生活および生命に直ちに影響を及ぼすことが容易に推測できる。宮古島は平坦な為農地開発が促進され、その結果、約57%が農耕地として活用され、特に水道水源流域における耕地率は65%と高い。そのため畑に施用される化学肥料由来の作物に吸収されなかった余分な硝酸態窒素が面的且つ直接的に地下水を汚染している。宮古島は琉球石灰岩を母岩とする暗赤色土の島尻マーヅと呼ばれる土壌群が多く分布している。その為、肥料として大量に施用されるリン酸が島尻マーヅに含まれるカルシウムと反応し、作物に利用されにくい難溶性リンとして土壌に固定されているのではないかと推察した。また、世界的に

リン鉱石資源の有限性が持続的な食料生産の見地から大きな問題になっており、人類の生命を維持するための食料生産は危機的状況にある。宮古島のような周囲を海に囲まれた島嶼環境では、島外から移入される大量の化学肥料のみに頼った施肥方法から、島内で有機物資源を循環させる目的で有機肥料を研究開発し、島の農耕地に活用した有機農業への転換は急務である。

そこで、本研究では土壌微生物の機能を活用し、島尻マージに含有される難溶性リン化合物を可溶化し、土壌中に存在する土壌蓄積リンを効率的に作物へ吸収させ、併せて肥料として施用したリン酸の難溶化を防ぐことで、リンの利用率を向上させ、収量増大を図ることを目的として、化学肥料の低投入型施肥技術(LISA: Low Input Sustainable Agriculture)の確立と地下水保全機能を明らかにする。そして、本研究では開発した有機肥料と化学肥料の低投入型施肥技術を組み合わせ、南西諸島では栽培歴のない日本蕎麦をサトウキビ収穫直後に輪作栽培することで地下水保全と食糧生産機能を検討する。

おわりに、私は沖縄県宮古島の農業高校で生徒達と日々、授業を通して研究活動に取り組んでおり、研究時間の制約はあるものの、琉球大学の川満先生や上野先生、鹿児島大学の坂上先生のご指導を頂き、なんとか学位論文を取り纏めたいと思います。

わたなべ けんた
渡邊 健太 (日本)

研究題目：サトウキビ糖度向上を目的としたカリウム
施肥方法に関する研究

主指導教員：川満 芳信 (琉球大学)

第一副指導教員：上野 正実 (琉球大学)

第二副指導教員：坂上 潤一 (鹿児島大学)

指導補助教員：平良 英三 (琉球大学)



はじめまして。琉球大学作物学研究室所属の渡邊と申します。沖縄の海にあこがれ、地元埼玉から琉球大学に入学して早7年…。毎日研究活動をしながらも飲んで遊んで楽しく過ごしています。今では良いところ、悪いところも含め沖縄が大好きです。沖縄とそこに住む人々が許してくれさえすればこの地に永住したいと考えています。そんな私の研究テーマは沖縄県ではとても重要な作物であるサトウキビについてです。学部生時代から数えて4年間、この研究をさせていただいています。具体的には、異なる2種類のカリウム肥料(KCl、K₂SO₄)を用いてサトウキビの糖度に与える影響を調査したところ、KCl施肥区のみ糖度に対して負の影響をおよぼしたことから、副成分として含まれる塩素が糖度の低下を引き起こす要因となっているのではないかという結果が得られています。博士課程ではこのメカニズムの解明と新たなカリウム施肥方法の提案を目的として研究を行っていく予定です。また、これまでの研究を生かせるよう将来はサトウキビに関連した職に就け

たらと考えています。最後になります、けして人付き合いが上手とはいえませんがみなさまと一緒に楽しく勉学に励んでいきたいです。どうぞよろしくお願いいたします。

【生物生産科学専攻】
動物資源生産科学連合講座

いこま
生駒エレナ（日本）

研究題目：動物遺伝資源としての「かごしま黒豚」
の評価に関する研究

主指導教員：岡本 新（鹿児島大学）
第一副指導教員：大久津昌治（鹿児島大学）
第二副指導教員：川本 康博（琉球大学）



4月より大学院連合農学研究科博士課程へ入学することになりました、生駒エレナと申します。

普段は鹿児島県農業開発総合センター畜産試験場で勤務をしており、養豚に係る研究を行っています。全国的にも有名な鹿児島県の財産とも言うべき「かごしま黒豚」を守るため、また振興するため、日々努力をしています。

鹿児島県は豚の飼養頭数が全国一位であり、養豚が盛んな県ですが、多くの県が生産性に優れた大型種の改良を進めるなか、肉質に優れた「パークシャー種」の改良を進め、「かごしま黒豚」の礎となる系統を造成している唯一の県になります。

現在、黒豚の育種改良を進め、エリート集団を造成していますが、いざ口蹄疫などの法定伝染病などが侵入した場合、周辺への伝染を防止するため殺処分されてしまうことも考えられるため、遺伝資源の保存が急務となっています。

そこで、遺伝資源として受精卵を採取して保存しておけば、いざというときに受精卵を移植し、黒豚を産ませ復活させたり、あらたに改良を進めたりすることが可能となります。しかし、受精卵を採取するには開腹手術を実施するか、と殺し子宮を取り出し採取する必要があり、現在のところ容易な技術ではありません。ここで、もっと容易に採取あるいは受精卵を作出できないかを考えて、研究をしていく必要があります。また将来的に受精卵を移植する場合にも、より確実に受精卵から子豚を作出できるよう、研究していく必要があります。

大学院では、日頃実施している研究を論理的に構築し、論文にまとめることを実施できたらと考えています。これまで、いろいろな場面で自分の力のなさや未熟な部分を感じ日々を過ごしていましたが、少しでもレベルアップし、「かごしま黒豚」の保存に貢献できれば幸いです。

ウイン ミ トウエ
Win Mi Htwe (Myanmar)

Title of Research: Studies on phytoremediation by tropical grasses and removal process by animal

Advisory Professor: Dr. Yasuhiro Kawamoto (University of the Ryukyus)

First Vice-Advisory Professor: Dr. Yoshimi Imura (University of the Ryukyus)

Second Vice-Advisory Professor: Dr. Shin Okamoto (Kagoshima University)



Dear everyone; let me introduce by myself. I am Win Mi Htwe from Myanmar. My country is situated in the South East Regions and well known for having many ancient pagoda, precious ruby and jade.

I finished my high school at No. 1 Basic Education High School in Myeik, the southern part of Myanmar. After that I entered for B.V.Sc degree at the University of Veterinary Science and got graduation in 2006. I am serving as a government staff under the Ministry of Livestock, Fisheries and Rural Development from 2007 to until now. Within this period, I had the changes of working place. At first, I worked as a Deputy Research Officer at Veterinary Assay Laboratory, Yangon and then transferred to Lewe, Nay Pyi Taw as a Deputy Township Veterinary Officer at the Livestock Breeding and Veterinary Department. At that time, I got opportunity for further studies because my Ministry selected me to study in Japan presented itself courtesy of the MEXT scholarship through applications at the Embassy of Japan in Myanmar.

By 2011 October, I enrolled at the University of the Ryukyus in the Subtropical Pasture Laboratory as a research student. I then continued for the Master course in Agriculture and did research on the assessment of heavy metals uptake by some tropical pasture plants. I went on to finish the course in March, 2014 and then enrolled at the United Graduate School of Agriculture, Kagoshima University for doctoral course in Science of Bioresource Production. I will continue on exploring the effect of animal by feeding heavy metals contaminated forage. I hope to gain as much knowledge and expertise as possible and it will be beneficial for my native country. Although Okinawa is just too beautiful and the weather looks similar to my country, I have to try for the temptation to stay here. In short that's me there, wishing you all the best and I think the next three years will be a balance of fun and hard working for me.

【生物生産科学専攻】
地域・国際資源経済学連合講座

ハン 帆 (中国)

研究題目：「農産物の BtoC インターネット販売における
産直仮想市場のモデル」

主指導教員：秋山 邦裕 (鹿児島大学)

第一副指導教員：李 哉泫 (鹿児島大学)

第二副指導教員：内藤 重之 (琉球大学)



中国からの留学生ハンハンです。今年は鹿児島大学の修士課程を修了し、連合農学研究科に進むことになりました。入学式の際に少し複雑な感情が湧き上がってきました。不安がありますが、次の段階へ進み、新しいことに挑戦するのがわくわくして、もっと頑張りたいと思います。

日本に来てから4年間が経ち、最初は言葉が通じなかったり、誤解されたりした経験がありました。段々日本の生活に慣れてきて、いろいろな活動に参加できてとても満喫していました。4年間振り返ってみて、悔いはありません。「日本語スピーチ大会」で自分が言いたかったことを日本の方の前で、ゆっくり話しました。「菜の花」マラソンに参加し、雨風の中、完走できて「これから、どんな困難があっても、乗り越えることができる」という自信ができました。おはら祭りで世界各国からの留学生と一緒に踊ることができて、とても楽しくて忘れられない思い出でした。また、今年は国際交流会館のチューターになりまして、新しい留学生にも良い思い出を作ってもらえるように手伝っていきたく思います。

去年、大学院2年生として、修士論文を完成することを目指して頑張る毎日を送っていました。正直に留学生として、日本国内で調査したり、発表したりすることが非常に難しかったと思います。しかも、調査の時、地元の農家さんからのいろいろな話を聞きながらとても勉強になり、親切で何も隠さずに教えてくれて心から感謝しました。年末の頃、プレゼントも農家さんからもらって、こんな人情味溢れる国に来てよかったと思いました。

今年も引き続き、農産物のインターネット販売について深く研究し、農家の仕事に対する積極性を向上させ、地域活性化に貢献できるように頑張りたいと思います。

マ レイナ
馬 麗娜 (中国)

研 究 題 目：「中国華北地方における資源循環型
農業の成立条件に関する研究」

主 指 導 教 員：豊 智行 (鹿児島大学)

第一副指導教員：秋山 邦裕 (鹿児島大学)

第二副指導教員：白武 義治 (佐賀大学)



中国から来た馬麗娜です。とにかく「前に」！日本へ来た後学んだ精神で、さまざまなことにチャレンジしてきました。

4年前に中国から来た最初は日本語を全く話せませんでしたが、「前へ、前へ」の精神で、恥をかく事承知で、わからないこと何でも先生、友達に質問し、皆さんの優しい笑顔を見て、答えをもらいました。私は勇気を持って「前に」行けました。そして、自宅で学んだことを必ず繰り返すようにしました。勉強のために、アルバイト・ボランティアをすることもありました。

今年3月に、鹿児島大学大学院から修士課程を修了し、「前に」博士課程に進みの決心を持っています。留学生として、勉強についての困難がたくさんありました。特に、論文を書くための調査が一番難しかったと思います。中国に三回の調査を行いました。先生のご指導の下で、細かく分析し、論文を順調に完成しました。

4月から博士課程に入り、次のステップをスムーズに進むために、毎日「前に！前に！」というスローガンを掲げて行進します。更に、今後の勉強計画を作りました。私の研究内容は中国華北地方の資源循環型農業の成立条件に関する研究ですが、中国しか研究しないことではなく、日本の循環型農業も研究したいです。まず鹿児島県と宮崎県の大規模酪農農家を中心として、調査・研究します。そちらの循環型農業の現状とシステムを参考します。そして中国華北地方の資源循環型農業に関する研究を加え、今の研究テーマにより論文を書きたいです。資源循環型農業はグローバルなので、私の研究することもグローバルになるように、もっと頑張りたいと思います。

【応用生命科学専攻】
先端応用生命科学連合講座

イシマエル ムタンダ
Ishmael Mutanda (Zimbabwe)

Title of research: Molecular characterization of isoprene emission
from tropical trees.

Advisory professor: Dr Hirosuke Oku (University of the Ryukyus)

First Vice-Advisory Professor: Dr Masakazu Fukuta (University of the
Ryukyus)

Second Vice-Advisory Professor: Dr Keiichi Watanabe (Saga University).



Hello everyone, my name is Ishmael Mutanda from Zimbabwe. My country is in southern Africa and is home to the famous Victoria Falls. We also boast lots of sunshine and savannah climate with lots of wild animals. I come from the southern province of Zimbabwe, close to the Zimbabwe – South Africa boarder.

Well, I did my high school at Hippo Valley high school (I mentioned we have lots of wild animals) in the Southern eastern lowveld of Zimbabwe and then enrolled for a BSc degree in Food Science and Technology at the University of Zimbabwe. I completed the course and graduated in 2008 before joining a beverage manufacturing company called Beehive Nectars (Pvt) Ltd. I worked as a production supervisor before going up the rank to be the acting production manager. Being as ambitious as I am, I then moved in 2009 and joined the Food Service industry in a company called Laiza`s Food Service where I worked as an operations assistant manager. It was whilst I was at Laiza`s Food Service that the opportunity to study in Japan presented itself courtesy of the MEXT scholarship through applications at the Embassy of Japan in Zimbabwe.

By 2011 April, I enrolled at the University of the Ryukyus in the laboratory of food chemistry as a research student. I then went for the Master course in Agriculture and I was researching on processing methods to utilize sugarcane during juice extraction and subsequent manufacturing of a very popular sugar product made in the south-western islands of Japan, *kokuto*. I went on to finish the course in March this year (2014) and then enrolled at the United Graduate School of Agriculture, Kagoshima University for doctoral course in molecular biology. I will be basically working on exploring molecular regulation mechanisms of isoprene emission by tropical trees. Isoprene is the most important biogenic volatile organic gas produced by terrestrial vegetation into the atmosphere and it affects atmospheric redox state,

contribute to lifespan of Methane, a greenhouse gas, and also cause smog. I hope to gain as much knowledge and expertise as possible and then go back to apply it in my native country. I am reluctant though, Okinawa is just too beautiful that I will have to fight the temptation to stay forever with my family. In short that's me there, wishing you all the best and I believe the next three years will be a balance of fun and hard working for me.

伍 樹 松 WU SHUSONG (中国)

Title of Research : Bioactive Properties and Molecular Mechanisms
of Blue Honeysuckle

Advisory Professor : De-Xing HOU (Kagoshima University)

First Vice-Advisory Professor : Akira OHTSUKA (Kagoshima
University)

Second Vice-Advisory Professor : Koji WADA (University of the
Ryukyus)



My name is Shusong Wu, 26 years old, born in Hunan province of The People Republic of China. I have got my Bachelor's Degree in agriculture and Master's Degree in science from Hunan Agricultural University. Two years ago, I have ever studied in Kagoshima University as an exchange student for one year, and gratefully, got the guidance from Prof. De-Xing HOU. The strict educational standards and harmonious atmosphere in Kagoshima University, especially the earnestness in academic study in Prof. HOU's laboratory left a deep impression to me. Therefore, I am eager to continue my Ph.D. study in Kagoshima University after I received my Master's Degree. With that hope, I submitted application to my government for sponsorship, and fortunately, I got it.

In my undergraduate period, I studied on animal disease and nutrition, and with that foundation, I pursued my master study in physiology. I have taken part in a number of research projects on animal nutrition in my undergraduate study, and the results were published in relative Chinese journals. After enrolled in graduate school, I was concerned with the anti-oxidative and anti-inflammatory effects of natural active ingredients in plant. Thus, in my master's study, I investigated the anti-oxidative and anti-inflammatory effects of blue honeysuckle, which is one of the anthocyanin-rich fruits. I measured the radical scavenging ability of blue honeysuckle extract first, and found the extract can eliminates free radicals in a dose-dependent manner. To further study the anti-oxidative and anti-inflammatory effects of blue honeysuckle extract in

vivo, I studied the effect of blue honeysuckle extract in an adjuvant induced rat arthritis model, since arthritis represents one of the most prevalent chronic health problems. My results indicated that blue honeysuckle extract inhibited adjuvant induced rat paw edema, increased the activity of antioxidant enzymes, reduced liver damage and attenuated the levels of inflammatory mediators such as cytokines and nitric oxide. To clarify the molecular mechanism, I further studied the effect of blue honeysuckle extract on protein kinase and inflammatory mediators in cell model. The interesting results attracted me to do deeper research.

In my doctoral study, I will continue to study the anti-oxidative and anti-inflammatory effects of blue honeysuckle extract in different models. Since blue honeysuckle extract can reduce liver damage in adjuvant induced rat, and nonalcoholic steatohepatitis (NASH) is a common disease that causes inflammation and accumulation of fat and fibrous tissue in the liver, the effect of blue honeysuckle on NASH will be studied. Meanwhile, I will identify the major functional components and metabolites of blue honeysuckle, and then clarify their molecular mechanisms of action. Since anthocyanins might be broken down into phenolic degradation products and then further metabolized after ingestion, the mechanisms of action and relative importance of the metabolites on health outcomes will be also focused in my research plan. My results will provide basic scientific evidence for understanding the functionality and benefits to health of blue honeysuckle and anthocyanins.

しらいし ようへい
白石 洋平 (日本)

研究題目 : 本格焼酎の香味形成の差異に及ぼすタイプ
別麴菌の醸造学的特性とその応用

主指導教員 : 高峯 和則 (鹿児島大学)

第一副指導員 : 玉置 尚徳 (鹿児島大学)

第二副指導員 : 外山 博英 (琉球大学)



この度、鹿児島大学連合農学研究科に入学致しました白石洋平です。私は会社に籍を置いた状態で大学でも研究を行う所謂『社会人学生』になります。今回の鹿児島大学大学院に入学するにあたり、会社はじめ多くの方々からの御支援を賜りました。会社・恩師含め御尽力してくださった方々、主指導教員である高峯先生や指導してくださる先生方、鹿児島大学との御縁に非常に感謝しています。

私は現在『種麴』というものの製造販売する会社で仕事をしています。種麴は清酒・焼酎・味噌・醤油などには欠かすことの出来ない『麴』を造る際のスターターとなるものです。

『和食』が世界無形文化遺産に登録されたことも追い風となり、今後益々日本の醸造は世界的に注目されると思います。そんな世界に誇る日本の醸造技術・文化に携わる仕事に従事していることは私の誇りでもあります。

今回大学で行う研究は麴・種麴製造で培ってきたノウハウと鹿児島大学の焼酎製造・研究のノウハウを活かして、麴菌を中心とした焼酎の香気成分に関する仕事をしていきたいと思っています。現在までに焼酎の香気成分は原料や酵母、蒸留方法などの研究は盛んに行われてきましたが、麴菌に着目して行われた研究というものはあまりありません。焼酎の香味形成と麴菌の関係性が明らかになることで、造り手側の種麴の選択肢も広がり、より新しいの形の商品設計や種麴開発にも繋がると考えています。また、左党達の蒞蓄に一役買えるような結果が出ることにも期待しています。

個人的には鹿児島の風土を感じながら、食文化に親しみ、その中で『飲みニケーション』や『ダレヤメ』も忘れずに、実りある人間関係、ネットワークも築いていけたらと思っています。様々な面で醸造業界の発展・繁栄に貢献できる仕事となるように精進致します。

やの きとし
矢野 敏史 (日本)

研究 題 目：ワサビ機能性成分の抗癌作用機序および抗癌剤との併用効果に関する研究

主 指 導 教 員：侯 徳興 (鹿児島大学)

第一副指導教員：イブラヒム ヒッサム ラドワン (鹿児島大学)

第二副指導教員：屋 宏典 (琉球大学)



鹿児島大学・食品分子機能学研究室所属の矢野敏史と申します。鹿児島大学に入学して早6年、いまさらながら月日が流れるのは早いものだと感じています。研究室に入ってから3年半がたち、研究室での学生生活も折り返し地点を過ぎました。この博士課程入学を良い機会に心機一転して研究に励んでいこうと考えています。

さて、研究内容ですが、私は食品の機能性成分による癌への細胞死誘導について研究しています。癌は現在のわが国における死因の第1位です。また、癌治療に用いられる抗癌剤は多くの問題を抱えており、その代表的なものに癌抑制遺伝子 p53 依存的アポトーシス誘導や NF- κ B 活性化による副作用や薬剤耐性の誘発があります。本研究では、癌予防と癌治療の2つの観点から、食品の機能性成分によるヒト癌細胞への細胞死作用機序を解析し、また、抗癌剤との併用による抗癌効果の増強・改善の検証を行っています。

そして、私が主にサンプルとして使っている食品はワサビです。ワサビは日本では古来、奈良時代より薬味として用いられており、今でも刺身や寿司には欠かせない薬味となって

います。ワサビ中の機能性成分として、6-MSITC (6-methylsulfinylhexyl isothiocyanate) がありますが、これは西洋ワサビ (多くのチューブワサビ) ではなく、日本の本ワサビにしか含まれていない貴重な成分です。本研究では、この 6-MSITC を実験のサンプルとして用いています。

博士課程では、論文を提出することはもちろん、スキルアップを含めて修士課程まで行ってきた実験をさらに進めていくつもりです。私たちの研究によって、6-MSITC の細胞死誘導機構を明らかにすることで、食品であるワサビによる癌予防の新しい知見を提供でき、また、6-MSITC と抗癌剤との併用効果を実証することは、食品中の機能性成分によって抗癌剤の効果を高め、副作用を軽減することができるというエビデンスを提供できると考えています。博士課程では、ひたすらに研究に励み、癌予防や抗癌治療の研究に大きく貢献したいと思っています。

3 年間どうぞよろしく願いいたします。

【農水圏資源環境科学専攻】
生物環境保全科学連合講座

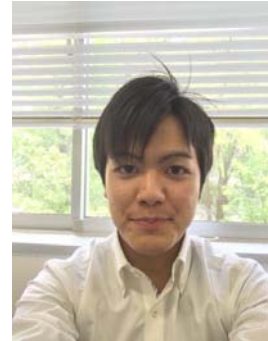
かとう みつほ
加藤 三歩 (日本)

研究題目：シロオビアゲハにおける擬態形質の進化生物学
主指導教員：辻 瑞樹 (琉球大学)
第一副指導教員：立田 晴記 (琉球大学)
第二副指導教員：野間口 眞太郎 (佐賀大学)



はじめまして。琉球大学所属の加藤三歩です。東南アジアから奄美大島以南に生息するシロオビアゲハという蝶の研究をしています。シロオビアゲハは毒蝶である近年沖縄に定着した熱帯性のベニモンアゲハ (モデル) に、翅の模様を似せることで擬態していることが知られています。モデルに擬態することで、捕食者がシロオビアゲハのことも毒蝶と勘違いをし、敵に襲われにくくなるのです。しかしシロオビアゲハの集団中にも擬態が下手な個体から上手な個体まで多様な個性が見られます。進化生物学の観点では、捕食者から擬態を見破られにくい、擬態の上手な個体のほうが下手な個体よりも生き残りやすいことが推察されます。そして、擬態上手な個体の形質が子孫に伝わると、その形質を持つ個体が集団中に増えていきます。このことから、シロオビアゲハの擬態精度は、モデル定着以降、年々向上している可能性が強く、擬態形質の特徴を毎年調査することで、以上の仮説を検証しています。

かわうち ともひろ
川内 智裕 (日本)



研究題目：植物内生窒素固定細菌による農耕地への窒素供給
システムに関する基礎的研究

主指導教員：境 雅夫 (鹿児島大学)

第一副指導教員：樗木 直也 (鹿児島大学)

第二副指導教員：染谷 孝 (佐賀大学)

今年度から連合農学研究科農水圏資源環境科学専攻生物環境保全科学連合講座に配属させていただきます、川内 智裕と申します。

私は鹿児島大学農学部 堺雅夫教授に師事し、今年度から年間勉強させていただくこととなります。私の研究テーマは植物内生窒素固定細菌による農耕地への窒素供給システムについて研究を行うこととなります。

すでにご存知の方も多いかと思いますが、窒素は、リンやカリウムとともに植物生産において欠くことのできない重要な肥料成分に数えられます。窒素を肥料として利用するためには、大気中の窒素 (N_2) を固定してアンモニアを合成する必要があり、アンモニアの世界需要は年間 1 億 6500 万トンにのぼっており、肥料としての利用がその 80% を占めています。世界的な食糧増産に伴う肥料需要の増加によって、アンモニアの需要も今後さらに高まることが予想されています。しかし、アンモニアの製造は、100 年前に開発されたハーバー・ボッシュ法が現在も工業的合成法として唯一の方法であり、大量の石油や天然ガスを消費してアンモニアを製造しています。その結果、窒素肥料の製造のために、世界で使用されるエネルギーの数%が消費されてしまっています。すなわち、窒素肥料は石油や天然ガスと等価であり、持続可能な食糧の安定供給のためには化石燃料を用いない窒素肥料の製造法が要求され、これが実現できれば、エネルギーの低炭素化に大きく貢献することが期待されています。私たちはこれまでの研究によって、セルロースをエネルギー源として窒素固定を行う複合微生物システムを発見しています。この複合微生物システムを応用することで、①有機性廃棄物である植物バイオマス (セルロース) を利用した効率的な窒素肥料の製造、②植物内生窒素固定細菌による作物への窒素固定能の付与技術に大きく貢献できると考えていることから、博士課程の研究ではこの複合微生物システムの解明および植物内生窒素固定菌の生態の解明を研究目的として研究を行っていきます。皆様、これからよろしくお願ひします。

さとう かずき
佐藤 一輝 (日本)



研究題目：モデル線虫を用いた昆虫病原性線虫の共生細菌が発揮する病原性の遺伝学的解析

主指導教員：吉賀 豊司 (佐賀大学)

第一副指導教員：早川 洋一 (佐賀大学)

第二副指導教員：坂巻 祥孝 (鹿児島大学)

線虫の一種である昆虫病原性線虫 (Entomopathogenic nematode;以下、EPN) は害虫駆除を目的とした生物農薬として世界中で利用されています。EPN は腸内に共生細菌を保持しており、昆虫の体内に侵入後、共生細菌を放出し、共生細菌が生産する複数の毒素によって昆虫を死に至らしめることが知られています。これまで毒素の作用機作を含め、昆虫を宿主とした共生細菌の病原性メカニズムの解析が進められてきましたが、未だに全容解明には至っていません。その理由として、体内での組織・細胞レベルでの病気の進行や宿主の防御応答を生きた状態でモニタリングできない、毒素の作用機作や病原性関連因子の分子遺伝学的解析が困難である等の研究手法上の限界があげられます。

そこで私は、細菌食性のモデル線虫 *Caenorhabditis elegans* を新たなモデル宿主として用いることで、こういった手法的な問題を解決しようと考えました。*C. elegans* は、体が透明で病徴を生きのまま観察でき、分子遺伝学的解析が可能であるなど病原性解析に適した性質を有しています。これまでも、ヒト感染症の病原性メカニズムや、これら病原性細菌に対する宿主側の防御応答の研究に大きく貢献してきました。このような背景から、私はEPNの共生細菌についても *C. elegans* を宿主として用いることで病原性メカニズム解明にむけた知見が得られると考え、研究を行っています。修士課程ではEPNの共生細菌 *Photorhabdus luminescens* TT01 が *C. elegans* に対して発揮する病原性の基本的性質 (病徴・宿主の防御応答) を明らかにしてきました。博士後期課程においては、さらに研究を進め、病原性因子の特定等を通して将来的には農業分野での応用に役立てたいと考えています。

セミナー等でお会いできるのを楽しみにしています、3年間よろしくお願ひします。

さとう きよし
佐藤 聖 (日本)



研究題目：農業環境における原生動物と細菌の相互作用に検する研究

種指導教員：染谷 孝 (佐賀大学)

第一副指導教員：上野 大介 (佐賀大学)

第二副指導教員：境 雅夫 (鹿児島大学)

佐賀大学土壌微生物学研究室に所属する佐藤聖です。学部の際は、熊本にある東海大学農学部にも所属しており、修士から佐賀大学に所属しています。これからは連合大学院の一員として研究に邁進していきたいと考えています。

私が小学生の頃、地球温暖化や砂漠化の話をよく聞くようになり、自然環境に興味を持つようになりました。当時の私は、“砂漠化を抑えるなら、木を植えればいいやん”と安易な考えを持っていましたが、年齢が上がるにつれ、それだけでは駄目だということに気づき、どうしたらいいのか考えるようになりました。そして、地球の形成過程で微生物が大きな役割を果たしていたことを知り、微生物に興味を持つようになりました。

修士では、水耕液中に常在する原生動物による水耕液に混入したヒト病原菌の捕食作用に関する研究を行いました。今後も、継続して研究を行う予定で、修士の際にはできなかった実験も行い、水耕液中の原生動物と細菌の動態を解明していきたいと考えています。原生動物と細菌の相互作用を解明することができれば、水耕液に限らず、様々な分野に応用ができるのではないかと考えています。

まだまだ未熟な私ですが、博士課程の3年間で研究者としても人間としても成長したいと考えています。お会いする機会は少ないかと思いますが、どうぞよろしくお願いします。

もりた としゆき
森田 智有 (日本)

研究題目：揮発性抗菌物質生産菌を用いた温州ミカンの保存性
向上技術の開発に関する研究

主指導教員：染谷 孝 (佐賀大学)

第一副指導教員：上野 大介 (佐賀大学)

第二副指導教員：境 雅夫 (鹿児島大学)



佐賀大学土壌微生物学研究室所属の森田智有です。智有と書いて「としゆき」と読みます。広島県出身で、佐賀に来て7年目になります。

学部ではセルロース分解菌のスクリーニングを、修士では植物の生育促進をうたう農業資材を用いた栽培試験をしていました。博士ではカビの発育を抑える細菌の研究をやることになり、節目ごとにテーマが大きく変わっています。実験方法など勉強し直すことが多いですが、新鮮な気持ちで取り組めることを楽しく、嬉しく思っています。

私の所属する研究室ではお風呂場などに発生する黒カビ (*Cladosporium* 属) を抑制する細菌についての研究を行ってきました。現在、揮発性物質を生産することで、離れた場所にいる *Cladosporium* 属の発育を抑制する細菌の分離に成功しています。この *Cladosporium* 属の中にはミカンの腐敗の要因となるものもいます。佐賀県は日本一のハウスミカン生産量を誇っていますが、やはり貯蔵・流通時において腐敗が発生するため、

廃棄による損失の増加や流通拡大を妨げる原因となっています。これまでの研究を応用し、農薬等の化学物質に頼らないクリーンで安全な、消費者に歓迎される腐敗防止技術を確立することが私の研究の目標です。また、カビによる腐敗はミカンだけでなくイチゴやタマネギ等の様々な作物を貯蔵する際にも発生するため、それらの作物への応用も視野に入れています。

3年間で有意義な交流ができれば、と思います。よろしくお願いいたします。

やさか りょうすけ
八坂 亮祐 (日本)

研究題目: カブモザイクウイルスの空間的・時間的進化
に関する研究

主指導教員: 大島 一里 (佐賀大学)

第一副指導教員: 草場 基章 (佐賀大学)

第二副指導教員: 岩井 久 (鹿児島大学)



はじめまして、農水圏資源環境科学専攻に進学した佐賀大学所属の八坂亮祐です。学部3年生から現在まで佐賀大学の植物ウイルス病制御学研究室で研究を続けています。ウイルスという名前の響きだけで選んだ研究も今となっては生活の中心となっていて、さらに博士課程に進学するとは4年前の私は想像もしていませんでした。今は不安もたくさんありますが、楽しく研究ができています。

私が所属している研究室は主に植物ウイルスの中でもその分子進化に関する研究を行っています。特に私はバイオインフォマティクスを用いて、ウイルスの病原性の獲得や起源、起源からの拡散についての研究を行っています。修士課程までは様々なウイルスを扱っていたのですが、アブラナ科植物を宿主とするカリフラワーモザイクウイルス (CaMV) についての研究を主に行っていました。博士課程では、CaMV と同様にアブラナ科植物に甚大な被害を与えているカブモザイクウイルス (TuMV) も合わせ、アブラナ科植物に感染するウイルスというまとまりで研究をしたいと考えています。TuMV はこれまで佐賀大学の研究室で多くの研究がされていて、より深い研究ができるぞと期待しているのと同時に、これまでの研究の上に立って研究するという責任も感じています。少しでも真理に近づけるように努力していきたいと思います。応用的な面では、これらの研究を発展させて、過去のウイルスの拡散ルートを解析した結果から、未来の拡散ルートの予測が出来るようになればと考えています。

研究においては、まだまだモノクロの狭い世界で右往左往している状況です。これからの3年間で様々な色が見えるようになって、自分にしか出せない色を持てたらなと思います。みなさま、よろしくお願いいたします。

【農水圏資源環境科学専攻】
地域資源環境工学連合講座

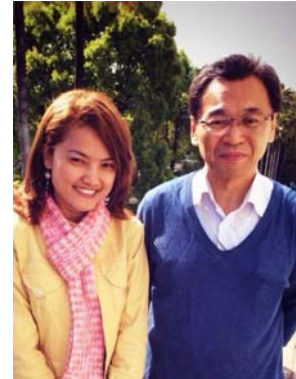
ピヤマート ジャンノック
Piyamart Jannok(Thailand)

Title of Research : Development of nondestructive quality evaluation techniques for agricultural products by near infrared(NIR) spectroscopy

Advisory Professor : Sumio KAWANO (Kagoshima University)

First Vice-Advisory Professor : Yoshinori KAMITANI (Kagoshima University)

Second Vice-Advisory Professor : Kazunori HIRONAKA (University of the Ryukyus)



My name is Piyamart Jannok. I am a lecturer of Rajamangala University of Technology Isan (RMUTI), Thailand. I am teaching Post-harvest and Food Technology at the Department of Post-Harvest Processing and Engineering in the Faculty of Engineering and Architecture. I had an opportunity as a visiting researcher for 6 months (16th September 2011 – 14th March 2012) at the Food and Biosystems Science (Food Safety) Laboratory, Department of Environment Sciences and Technology in the Faculty of

Agriculture, Kagoshima University, Japan. I conducted a research on Near Infrared (NIR) Spectroscopy. I was under supervision of one of the best professors and experts on NIR Spectroscopy in Asia, Professor Dr. Sumio Kawano. And I succeed one report of;

- Piyamart Jannok, Surasak Ratre, Kazuya Uchida and Sumio Kawano.(2012). “Development of a universal NIR calibration model for determining the Brix value of intact apple, pear and persimmon fruits”. The 3rd Asian Near-Infrared Symposium (ANS2012) at Bangkok, Thailand, 14-18 May, 2012.

Kagoshima is a wonderful city. Its landscape is beautiful. People are gentle, polite, nice and helpful. There are a lot of hot spring places, interesting museums and shopping centers. One of my favorite places is Sakurajima Volcano. I always miss the Volcano's ashes. The other place that I like is Hirakawa Zoo where I can find Koalas. I enjoyed walking and riding a bicycle around Kagoshima city. The weather was quite cold for me but I like it. In terms of work life, my research was done well because I had one of the best professors in this field and a good partner to guide and support me. There were

some Japanese teaching styles that I like and now apply in my teaching. The Japanese teachers teach in a short but intense period of time, which allows students to practice again and again on the topic they do not understand. In addition, in every lecture, teachers will pose questions to provoke students' analytical and creative thinking skills. The students are free to ask any questions and are comfortable to express their opinions.

After I back from Japan, I continue working in field of NIRS as follows;

- P. Jannok, K. Petcharaporn and S. Teerachaichayut. (2013). "Detection of Internal Mold Infection in Tomato by Transmittance Near Infrared Spectroscopy". The 2nd International Symposium on Discovery and Development of Innovative Strategies for Postharvest Disease Management at Kusadasi, Turkey. 28th April – 3rd May, 2013.

- Chaluntorn Vichasilp, Piyamart Jannok and Surasak Ratre. (2013). "Prediction of Brix value in apples by NIRS: Modeling and pretreatment of combined spectra obtained from different standard references" The 15th FOOD INNOVATION ASIA CONFERENCE 2013, BITEC Bangna, Bangkok, Thailand, 13th -14th June 2013.

- Piyamart Jannok, Isayapron Kanrungrueng, Orawan Thonngnak, Oattharod Channok, Panuwat Supprung and Sontisuk Teerachaichayut. (2013). "Detection of Specific Gravity for Hen Eggs using NIRS". The 4th Conference on Engineering and Technology 2013 at RMUTI, Thailand. 10th September, 2013.

Now I have a scholarship from my university, RMUTI, to study for Ph.D. program in the United Graduate School of Agricultural Sciences at Kagoshima University, Japan. And I have an eagerness to study Near Infrared (NIR) Spectroscopy under supervision of Prof. Dr. Sumio Kawano, The major chair of Regional Resource Environment Engineering, The course of Resource and Environmental Science of Agriculture, Forestry and Fisheries, Kagoshima University, Japan. Moreover, my university has a Nondestructive Research and Test Center of Agricultural product and Food Qualities that I can be useful person for this center after I graduated.

I am confident that the knowledge I will gain from the Ph.D. course at Kagoshima University will be beneficial for me, my students and Thailand as a whole.

Your Sincerely,

ふじやま そろ
藤山 宗 (日本)

研究題目 : 農業水利施設を対象とした水理・水利用
機能診断に関する研究
主指導教員 : 靱井 和朗 (鹿児島大学)
第一副指導教員 : 伊藤 祐二 (鹿児島大学)
第二副指導教員 : 酒井 一人 (琉球大学)



はじめまして。このたび、社会人入学し、地域資源環境工学連合講座（鹿児島大学）に配属となりました藤山と申します。私は、(株)三祐コンサルタンツという農業土木系のコンサルタント会社に勤務しています。コンサルタント会社では、「コンサルタントとは、コンサルティングを行うことを業としている個人もしくは法人のこと。（ウィキペディア参照）」とあるように、顧客が抱える問題に対して、多角的に、技術的に、解決策を提案することを日々行っています。具体的には、農業水利施設（ダム、頭首工、ポンプ場、用排水路等）の計画、設計、施工管理、そして、施工完了後の維持管理までに携わっています。

農林水産省では、長期供用を経て老朽化した農業水利施設に対し、機能診断を実施し効果的かつ経済的に補修、補強等を行う、ストックマネジメント事業が実施されています。現在の農業水利施設を対象とした機能診断では、構造機能（どれくらい構造物が損傷しているか？）に着眼したものが主体であり、今後、その他の機能である水理機能（どのように水が流れるか？）、水利用機能（どのように水を配るか？）までを見据えたものにするのが求められています。私は、このような社会的要求に対し、農業水利施設を対象とした、水理・水利用に関する機能診断の手法等の検討を行います。

私は、平成18年3月に、鹿児島大学大学院農学研究科（修士課程）を修了しました。8年ぶりに鹿児島大学の学生となり、3年後の学位取得を目指すこととなりますが、大学における研究と会社における通常業務を両立させることができるのか、正直なところ不安があります。しかし、私に与えられたこの機会は、多くの方々との関わりにより、巡ってきたものであるため、その方々への感謝の気持ちを忘れることなく、研究生生活を楽しみたいです。

どうぞ、宜しくお願い致します。

【農水圏資源環境科学専攻】
水産資源環境科学連合講座

アイネアレム ゴイトム ベルヘ
Aynealem Goitom Berhe (Eritrea)

Title of Research :Application of Fishing Gear Selectivity to Resource
Management of Data-limited Fisheries

Advisory Professor: Dr. Tatsuro MATSUOKA (Kagoshima University)

First Vice-Advisory Professor: Dr. Kazuhiko ANRAKU (Kagoshima
University)

Second Vice-Advisor Professor: Dr. Yoshotaka NAKANISHI (Kagoshima
University)



I feel honoured to introduce myself, my name is Aynealem Goitom Berhe from a new country located in the Northeast Horn of Africa bordering the unique sea called Red Sea. In 2001, I joined University of Asmara (UoA), the only university back then, in the Natural Science stream for my first Degree Studies. Four years later, I graduated from the department of Marine Biology and Fisheries (MBF), College of Marine Sciences. Afterwards I was selected to complete my national service as graduate assistant at the department. From 2007 -2014, I worked as assistant lecturer in the department of Applied Marine Science in College of Marine science and Technology (COMSAT) located at the strategic beautiful port of Massawa. I hope and Expect so many of you guys will visit this place to enjoy very beautiful sea side sunrise and sunset views, snorkelling, and diving in the attractive coral reefs and with colourful coral reef fishes. In 2011, I was awarded as JICA Scholarship: Long-term trainee for the Improvement of Higher Education in Eritrea and hence, In October,2011, I Joined Kagoshima University, Faculty of Fisheries, Department of Fisheries Engineering as a research student for six months under the supervision of Professor Tatsuro MATSUOKA . In April 2012, I started Master`s program and graduated in March, 2014.During my Master courses I studied so many key courses which opened my eyes widely in the research world in the area of fisheries resource monitoring and management of data-limited situation. During Master`s program, I conducted a research on Methodological studies in Data-limited Fisheries: Development of new methodology to calculate gillnet selectivity curve for the estimation of population length distribution. I am really thankful to my Advisory Professor: Dr. Tatsuro MATSUOKA, for accepting me again for pursuing PhD studies under his Supervision, to first Vice-Advisory Professor Dr. Kazuhiko ANRAKU and second Vice-Advisor Professor: Dr.Yoshotaka NAKANISHI.I am also very thankful for Dr. Takahisa Mituhashi for his critical

advices and all professors of Kagoshima University, Faculty of Fisheries for their lectures and practical field works. I am greatly thankful for Honjo International Scholarship Foundation, not only for their financial support to make my PhD educational dreams to come true but also for being such an exemplary caring family. Hope we all find ourselves in such kind of family. I would like to express my warmest thanks for the whole Japanese community for being very kind and especially Kagoshima citizens for being friendly for the past three years. As most of us agree with the proverb "home sweet home" I would like to extend my heartfelt thanks for Kagoshima`s citizens for making the surrounding environment around us, as home sweet home. Lastly, to the Kagoshima University Foreign Students Association (KUFSA) thank you very much and keep it up!!!

ジャナトウル ファーハナ
Zannatul Farhana (Bangladesh)

Title of Research: Fisheries biology of *Parapenaeus* species

(Penaecidae) in Kagoshima Bay, southern Japan

Advisory Professor: Jun Ohtomi (Kagoshima University)

First Vice-Advisory Professor: Yasuji Masuda (Kagoshima
University)

Second Vice-Advisory Professor: Ryuichiro Nishi (Kagoshima
University)



In 2011, 5th October, the day I arrived at Kagoshima airport, Japan with my dreams of higher education. That was the first time I left my family members, friends and home country and flied for a new country that I didn't know at all. I felt so pleased by getting warm reception by my supervisor, lab mates and international student section staffs. For first few days it was quite difficult to adjust as I didn't know the Japanese language to communicate with people. Now-a-days I can communicate with Japanese people better than before!

Kagoshima is one of the best places I visited as it is enriched with abundance of beauty. It is my real privilege to get in touch with some of the remarkable places here. Sakurajima is the best among the lot. I was there several times. When I go there, I feel like it's a new territory and entered in a different world blessed with peaceful scenery. Last, I went to Ibusuki. There is a place named Nagasakibana. It was so beautiful that I can't elaborate my feelings even.

My research focuses on fisheries biology of *Parapenaeus* species in Kagoshima Bay. *Parapenaeus fissuroides* and *P. lanceolatus* are two of the dominant species in the benthic community of Kagoshima Bay and getting commercially important now-a-days. So I am working on the present status of population biology of these species including spatiotemporal distribution, ovarian maturity stage, size at sexual maturity, spawning season, size composition, growth, longevity and comparative study between these two closely related species in Kagoshima Bay. In last 2.5 years I learned a lot from my supervisor Prof. Jun Ohtomi and lab mates. I will carry on my learning and hard working to complete the research. I am grateful to Japanese government and loving people of Japan for their cooperation in every step of my life.

つるなり よしひさ
鶴成 悦久 (日本)

研 究 題 目：浅海域を対象とした環境モニタリングに
関する研究

主 指 導 教 員：西 隆一郎 (鹿児島大学)

第一副指導教員：重廣 律男 (鹿児島大学)

第二副指導教員：山本 智子 (鹿児島大学)



この度、社会人で入学し鹿児島大学水産学部海岸環境工学研究室に所属する鶴成悦久と申します。現在、学校法人川島学園鹿児島工学院専門学校に建築学科の教員として勤務しております。

研究は干潟を含む浅海域を対象に、地形や底質環境に関するモニタリングや調査手法に関する研究を行っています。特に、2009年から前任校の専門学校にて、NPO法人や専門学生らと重富干潟(始良市)の地形や底質を中心に、環境モニタリング調査を継続的に実施してきました。これらの調査で膨大な情報を取得し、現在でも解析に苦勞しているところです。また、研究室では岩手県や福島県の復興支援に関する調査研究からアカウミガメの回遊調査等、様々な分野や領域を対象に研究を行っています。

これらの調査結果はGIS(地理情報システム)を用いて管理・分析しています。その情報は研究者や関係団体(自治体や研究機関)にも公開するとともに、環境保全に関する啓発の観点から、一般市民のほか、高等教育や環境教育に対する教材としても有用な情報です。そのため、誰もが簡単に、かつ、情報を共有するためのデータベースの構築が重要であるため、本研究ではGISを用いた水圏環境情報の構築と公開に関する研究も行っています。また、GISを活用した地域支援のためのNPOを設立しており、行政と協同によるシ

システム開発から行政手法の提案,そして普及推進に関する調査研究や活動を行っています。

博士課程では 30 代の集大成として,今まで行ってきた研究とともに,さらなる成果を積み上げ,頑張って学位取得を目指したいと思います。皆様,よろしくお願ひいたします。

わたなべ ゆうき
渡邊 裕基 (日本)

研究題目：紅藻アマノリ属藻類（ウシケノリ目）の生理生態学的研究

主指導教員：寺田 竜太（鹿児島大学）

第一副指導教員：野呂 忠秀（鹿児島大学）

第二副指導教員：本村 浩之（鹿児島大学）



はじめまして, 連合農学研究科の農水圏資源環境科学に進学しました, 渡邊裕基です。所属は鹿児島大学です。出身は愛知県の常滑（とこなめ）という場所です。中部国際空港があるところと言った方がわかりやすいでしょうか。大学入学と同時に鹿児島へ来たので, 今年で鹿児島 7 年目になります。

鹿児島大学の水産学部 4 年で研究室に配属された時から, 寺田竜太准教授のご指導のもと研究をしています。私の所属している水圏植物学研究室では, 海藻を中心に, 海草, 淡水藻, サンゴなどを扱っており, 卒業研究では褐藻類のワカメについて, 修士では褐藻ホンダワラ類と造礁サンゴについて研究してきました。

博士課程でのテーマは, 紅藻アマノリ属藻類（ウシケノリ目）の生理生態学的研究です。アマノリ属藻類というのはおにぎりなどに巻かれている海苔の仲間です。日本各地の沿岸で養殖されているため, 養殖している様子を見たことがある人も多いのではないのでしょうか。養殖されている海苔の多くはナラワスサビノリという品種ですが, 日本にはまだまだたくさんの種類のアマノリ類が生育しています。そのアマノリ類について養殖品種, 野生種問わず, 様々な種について知見を得られるよう研究していきたいと考えています。

最後になりましたが, 博士課程の 3 年間で他の分野の方との交流を通し, 成長していきたいと思っています。今後セミナーなどで皆さんと顔を合わせる機会があると思いますが, どうぞよろしくお願い致します。

◇学生の研究活動

2013年度在学生の学会等発表

生物生産科学専攻（熱帯資源・植物生産科学連合講座）

（発表論文）

学生氏名：池澤和広

- ・池澤和広*・福元伸一・遠城道雄・吉田理一郎・岩井純；ポット栽培における湛水処理がサトイモ‘大吉’（*Clocasia esculenta* Schott cv. ‘Daikichi’）の生育と収量に及ぼす影響 園芸学研究 第13巻(1)、35-40 2014年1月15日

学生氏名：岡崎聖一

- ・*岡崎聖一・高嶋香里・上野正実・川満芳信；RGB独立調光LED光源下の高密度栽培がリーフレタスの成長とエネルギー利用効率に与える影響 農業生産技術工学会誌

学生氏名：テク ジア ウルドリ

- ・Tengku Zia Ulqodry*, Fumiko Matsumoto, Yosuke Okimoto, Akihiro Nose, Shao-Hui Zheng；Study on Photosynthetic Responses and Chlorophyll Fluorescence in *Rhizophora mucronata* seedlings under Shade Regimes Acta Physiologiae Plantarum

（口頭発表・ポスター発表・講演）

学生氏名：大城正信

- ・*大城正信、M.A. ホサイン、赤嶺 光、仲村一郎 玉城政信、野瀬昭博；沖縄における食用アマランスの生育、収量および品質に及ぼす単肥・混合施肥の影響 日本作物学会 2014.3.29～2014.3.30 千葉市、千葉大学（西千葉キャンパス総合校舎）（口頭発表）

学生氏名：岡崎聖一

- ・*高嶋香里、木村龍典、大野智仁（株式会社キーストーンテクノロジー）、石田健治（株式会社アグリ王）、岡崎聖一（株式会社キーストーンテクノロジー、鹿児島大学大学院連合農学研究科）；光環境の違いがバジルの品質に及ぼす影響 日本生物環境工学会 2013年9月2日(月)～5日(木) 香川県香川大学（口頭発表）
- ・*岡崎 聖一；「日本から世界へ発信する植物工場」～サステイナブル・低環境負荷ナレッジ産業の新展開～ 沖縄型植物工場研究会 2013年9月27日 沖縄県・琉球大学内（口頭発表）

学生氏名：富永 淳

- ・富永 淳*, 稲福（寺本） さゆり, 藪田 伸, Jaiphong Thanankorn, 上野 正実, 川満 芳信；夏季乾燥地におけるヤトロファ（*Jatropha curcus*）光合成日変化の気孔および非気孔制御 第236回日本作

物学会 2013 鹿児島 (口頭発表)

- Jun Tominaga*, Sayuri-Inafuku, Thanankorn Jaiphong, Ueno Masami and Yoshinobu Kawamitsu ; Diurnal photosynthesis in *Jatropha* (*Jatropha curcas* L.) during winter in subtropics and semi-arid region 10th Biomass-Asia Workshop "Biomass Refinery to Community and Industrial Applications" 2013年8月5-6日 タイ, バンコク (ポスター発表)

学生氏名 : 河崎 俊一郎

- *河崎俊一郎、上原直子、上野正実、川満芳信 ; 熱帯地域における植物工場の研究開発 日本熱帯農業学会 2013年9月14・15日 日本、北海道、網走市 (口頭発表)
- *河崎俊一郎、上原直子、富永淳、上野正実、川満芳信 ; O₂、CO₂濃度同時制御チャンバーの開発に関する研究 日本生物環境工学会九州支部会 2013年11月23・24日 佐賀県、佐賀市 (口頭発表)

学生氏名 : ジェイボーン タンコン

- *Thanankorn Jaiphong, Yasunori Fukuzawa, Jun Tominaga, Shun-ichiro Kawasaki, Shin Yabuta, Yoshinobu Kawamitsu, Masami Ueno, Sombat Chinawong and Sirichai Sathuwijarn and Anuwat Kumpeangkeaw ; Production System and Possibility to Utilize *Jatropha* (*Jatropha curcas* L.) for Biomass Energy International conference : 10th Biomass Asia Workshop "Biomass Refinery to Community and Industrial Application" August 5-6, 2013 Bangkok, Thailand (ポスター発表)
- *Thanankorn Jaiphong, Yasunori Fukuzawa, Jun Tominaga, Shun-ichiro Kawasaki, Shin Yabuta, Yoshinobu Kawamitsu, Masami Ueno, Sombat Chinawong and Sirichai Sathuwijarn and Anuwat Kumpeangkeaw ; Production System and Possibility to Utilize *Jatropha* (*Jatropha curcas* L.) for Biomass Energy International conference: The 236th meeting of the Crop Science Society of Japan September 10-11, 2013 Kagoshima, Japan (口頭発表)

学生氏名 : 秀島 好知

- 秀島好知*・牧山繁生・森敬亮・浅川将暁・広田雄二・大塚紀夫・稲田稔 ; 麦わらの焼却が水田の雑草発生と水稻の生育収量に及ぼす影響 日本作物学会 (第236回講演会) 2013年 鹿児島県 (口頭発表)

生物生産科学専攻 (動物資源生産科学連合講座)

(発 表 論 文)

学生氏名 : 今井裕理子

- *今井裕理子・川本康博 ; ソルガム属 (*Sorghum* app.) 草種の短期放牧利用草地における放牧強度が草地の生産性に及ぼす影響 日本草地学会誌 2014 発行予定

- *今井裕理子・加藤翔・赤嶺光・川本康博 ; ソルガム属 (Sorghum spp.) 数品種における乾物収量、栄養価と青酸化合物 (HCNp) 含量の生育に伴う推移. 日本暖地畜産学会報 57 (1) 2014. 3

学生氏名：西村慶子

- *西村慶子、中原高士、大久津昌治、川本康博、中西良孝 ; カンショ焼酎粕ケーキを添加した発酵 TMR 中の粗飼料の違いが乳用牛の栄養代謝と乳生産に及ぼす影響 日本畜産学会報 84 号、341-348 2013 年 8 月

学生氏名：橋元 大介

- *橋元大介, 辻村和也, 深川 聡, 大串正明, 中西良孝 ; 食肉流通業者による黒毛和種牛肉の官能評価と理化学的特性との関係 日本暖地畜産学会報 第 57 巻 1 号 2014. 4
- *橋元大介, 岩元 禎, 川口雅彦, 中西良孝 ; 黒毛和種去勢牛の肥育後期における米ぬかまたは脂肪酸カルシウム添加飼料の給与が産肉性, 食肉の理化学特性ならびに官能特性に及ぼす影響 日本暖地畜産学会報 第 56 巻 2 号 2013. 9
- *橋元大介, 福田 修, 鍋岡奈津子, 中西良孝 ; 超音波エコー画像を用いたウシ枝肉脂肪交雑推定プログラムの開発 日本畜産学会報 第 85 巻 1 号 2014. 2

(口頭発表・ポスター発表・講演)

学生氏名：西村慶子

- 西村慶子、大久津昌治、川本康博、中西良孝 ; エンバク乾草またはサイレージ主体発酵 TMR の給与が搾乳牛の乳生産に及ぼす影響 日本暖地畜産学会 2013 鹿児島市 (口頭発表)

学生氏名：橋元 大介

- *橋元大介, 福田修, 鍋岡奈津子, 井上一輝, 中西良孝 ; 超音波画像に基づく肉質判定自動プログラムによる牛枝肉脂肪交雑の客観的推定に関する研究 肉用牛研究会鳥取大会 2013. 9. 19-20 鳥取市 (口頭発表)
- *橋元大介, 福田修, 中西良孝 ; インピーダンス測定による肥育牛の胸最長 筋内脂肪交雑推定の可能性 日本畜産学会第 117 回大会 2013. 9. 9-10 新潟市 (口頭発表)
- *橋元大介, 岩元 禎, 中西良孝 ; 黒毛和種去勢牛への米ぬか添加飼料の給与期間が肥育後期における産肉性と牛肉の脂肪酸組成に及ぼす影響 日本暖地畜産学会 2013. 10. 25-26 鹿児島市 (口頭発表)

学生氏名：サユウ タイケ

- Preliminary evaluation on digestibility of Brachiaria germplasm and its related traits Warm Regional Society of Animal Science Congress, Japan October (26-27) Kagoshima presenter (口頭発表)

学生氏名：リン リン チョウ

- Effect of ensiling process and additive effects of fermented juice of epiphytic lactic acid bacteria on the cyanide content of two varieties of cassava Warm Regionla Society of Animal Science congress, Japan 26-Oct-27 Kagoshima, Japan presentor (口頭発表)

学生氏名：溝口 由子

- *溝口由子・本田祥嵩・石川あい・竹本夏美・高山耕二・大島一郎・萬田正治・剥岩裕・中西良孝 ; ブドウ園におけるガチョウの除草利用 日本畜産学会 2014年3月27~29日 茨城県(口頭発表)

生物生産科学専攻 (地域・国際資源経済学連合講座)

(発 表 論 文)

学生氏名：エムエステーナスリナハル

- *Nahar MN, Inaoka T, Fujimura M, Watanabe C, Shimizu H, Tasmin S, Sultana N ; Arsenic contamination in groundwater and its effects on adolescent intelligence and social competence in Bangladesh with special reference to daily drinking/cooking water intake Enviornmental Health Preventive Medicine Volume 19, pp 151-158 20 november, 2013
- *Nahar MN, Inaoka T, Fujimura M ; A consecutive study on arsenic exposure and intelligence quotient (IQ) of children in Bangladesh Enviornmental Health Preventive Medicine 10.1007/s12199-013-0374-2 25 December, 2013

学生氏名：グエンチトウイ

- Nguyen Thi Thuy ; Effects of temporary migration on rural households in the Red River Delta of Vietnam Agricultural Marketing Journal of Japan 87 Mar-14
- Nguyen Thi Thuy ; Effects of temporary migration on agricultural production in the Red River Delta, Vietnam Food, Agricultural and Resource economics Journal of Japan 65 2014, April

学生氏名：サロメ・スタンオウワア

- TUPOU-TAUFASalome, KUGA Mizuho, SANO Masaaki ; Actual Situation of the Distribution Structure for Fresh Tuna at Production Wholesale Markets and its Prospects; Case Studies of Kagoshima, Katsu-ura and Aburatsu Wholesale Markets Journal of Regional Fisheries Volume 53, No. 1. 2 Jul-13
- TUPOU-TAUFASalome, SANO Masaaki, KUGA Mizuho ; Analysis of the Distribution Structure for Fresh Tuna from Pacific Island Countries to Japan; The case studies of Fiji, Tonga and Solomon Islands. Journal of Regional Fisheries Volume 54 No. 1/pages 25-53 Oct-13

- TUPOU-TAUFA Salome, KUGA Mizuho, SANOMasaaki ; Actual Situation of the Distribution Structure for Fresh Tuna at Production Wholesale Markets and its Prospects; Case Studies of Kagoshima, Katsu-ura and Aburatsu Wholesale Markets Journal of Regional Fisheries Volume 53, No.1.2/pages 75-107 Jul-13

学生氏名：イダ ウィディアスタティ

- Indah Widiastuti ; Small-scale Freshwater Aquaculture Practices in Indonesia: Farmers livelihood and impact on environment Aquaculture science 12-Jan-14

学生氏名：ジョキム ベウ キトレイ

- Jokim Kitolelei, Satoru Nishimura, Takashi Torii, Kei Kawai and Toru Kobari ; Multilayer Rules and Governance in Fiji Coastal Communities: A Case Study of Veivatuloa Village Evolutionary and Institutional Economic Review 27-Mar-13

(口頭発表・ポスター発表・講演)

学生氏名：ムナスティナスリナハル

- *Mst. Nasrin Nahar, Tsukasa Inaoka, Fujimura Miho ; Arsenic exposure and Intelligence quotient (IQ) of children in Bangladesh International Conference on Environment, Climate and Atmospheric Sciences 14-15 October 2013. Osaka, Japan (口頭発表)
- *Nahar MN, Inaoka T, Fujimura M, Watanabe C, Shimizu H, Tasmin S, Sultana N. ; Arsenic contamination in groundwater and its effects on adolescent intelligence and social competence in Bangladesh with special reference to daily drinking/cooking water intake 79th Seminar of the Japanese society of Health and Human ecology 15-16 November 2013 Saga University, Japan (口頭発表)

学生氏名：チャンシンハイ

- Current status of agricultural cooperatives in the Mekong Delta, Vietnam Agricultural Marketing Journal of Japan Jun-12 Hiroshima University, Japan Presentor (口頭発表)
- Agricultural cooperatives' contributions to farming practices in An Giang province, Mekong Delta, Vietnam The Japanese Journal of Rural Economics Mar-14 Tokyo Agricultural University, Tokyo, Japan presentor (口頭発表)
- Factors affect success of Agricultural cooperative in the Mekong Delta, Vietnam The Japanese Journal of Food, Agricultural and Resource Economics, Nov-12 Ryukyu University, Okinawa, Japan presentor (口頭発表)
- Development of Agricultural Cooperative in Vietnam: opportunities and challenges after the First Cooperative Law in 1996 The Agricultural Marketing Journal of Japan Jun-13 Niigata University, Japan presentor (口頭発表)

学生氏名：グエンチツイ

- Trend of temporary migration in Red River Delta of Vietnam Agricultural Economics Society of Japan 2013 March Tokyo university of agriculture Member (口頭発表)
- Effects of temporary migration on agricultural production in the Red River Delta, Vietnam Food, Agricultural and Resource economics Journal of Japan 2013 November Okinawa Member (口頭発表)

学生氏名：カモビ`スタノタウワ

- Analysis of the Distribution Channel for Fresh Tuna from the Pacific Island Countries to Japan: A Case Study of Fiji, Tonga and Solomon Islands Japan Regional Fisheries Society Conference October 27th, 2012 Kyoto, Japan presentation (口頭発表)
- ‘Actual Situation for the Distribution Structure of Fresh Tuna at Production Wholesale Markets in Japan: A Case Study of Kagoshima, Katsu-ura and Aburatsu Wholesale Markets’ Japan Regional Fisheries Society Conference Nov-11 Kagoshima city, Japan Presentation (口頭発表)

学生氏名：服部浩之

- 服部浩之*, 仲間勇栄、仲田栄二、Rocky Franky Roring ; An applied phytosociological research a catchment basin forest on the northern part of Okinawa main island Japan Society of Forest Planning (JSFP); Faculty of Agriculture, Kagoshima University; Research Institute for East Asia Environments, Kyushu University (RIEAE); Risk Analysis Research Center, Institute of Statistical Mathematics (ISM); FORMATH Research Group September 5 (Thu) - 7 (Sat), 2013 鹿児島 (ポスター発表)

学生氏名：王 興

- 王 興*, 白武義治 ; カシミヤの公正な取引とその流通システム改善の条件と今日的意義—中国内モンゴル興安盟を事例に— 食農資源経済学会 2013年9月14日～16日 大分県、別府大学 (口頭発表)
- 王 興*, 白武義治、杜富林 ; 伝統的な山羊牧畜業再生の今日的意義とその展開条件—中国内モンゴル興安盟を事例に— 2013 (青島) 東アジア農業協同組合の発展に関する国際フォーラム 2013年9月25日～28日 中国、山東省、青島市、青島農業大学 (口頭発表)
- 王 興*, 白武義治 ; 伝統的な山羊牧畜業とカシミヤ生産の今日的意義とその展開条件—中国内モンゴル自治区興安盟ホルチン右翼中旗ハルバダ村を事例に— 2013年度 日本農業経済学会 2013年3月29～30日 東京農業大学世田谷キャンパス (口頭発表)

学生氏名：ジヨキム ベウ キトレイ

- Jokim Kitolelei, Understanding Fisheries Rules in Fiji: A comparison of three case studies, Evolutionary and Institutional Economic Review Conference, March 15th, 2014

Kanazawa, Japan presentation. (口頭発表)

学生氏名：伊村 達児

- ・伊村 達児*、内藤重之、坂井教郎 ; 島嶼地域における農協と産地仲買人の集出荷行動とその役割
～沖永良部島における馬鈴薯を事例として～ 食農資源経済学会 第7回大会 2013.9.14-16
日本/大分 (口頭発表)

学生氏名：前田 千春

- ・*前田千春、仲間勇栄、Iin ICHWANDI、木島真志、陳碧霞 ; A study on Agroforestry in Private Forest and its Contribution to Farm Economy in Indonesia -A Case Study of Sukaresmi Village in Cianjur, West Java- IUFRO 3.08&6.08 Joint Conference; Future Directions of Small-scale and Community-based Forestry 2013年9月 福岡県 (口頭発表)

応用生命科学専攻 (生物機能化学連合講座)

(発 表 論 文)

学生氏名：P A B N PERUMPULI, Taisuke WATANABE, and Hirohide TOYAMA

- ・*P A B N PERUMPULI, Taisuke WATANABE, and Hirohide TOYAMA ; Identification and Characterization of Thermotolerant Acetic Acid Bacteria Strains Isolated from Coconut Water Vinegar in Sri Lanka Bioscience, Biotechnology and Biochemistry in press
- ・*P. A. B. N. PERUMPULI, Taisuke WATANABE and Hirohide TOYAMA ; Pellicle of thermotolerant Acetobacter pasteurianus strains: Characterization of the polysaccharides and of the induction patterns Journal of Bioscience and Bioengineering In press

学生氏名：Jayakody, L. N., Horie, K, Hayashi, N, Kitagaki, H.

- ・*Jayakody, L. N., Horie, K, Hayashi, N, Kitagaki, H. ; . Engineering redox cofactor utilization for detoxification of glycolaldehyde, a key inhibitor of bioethanol production, in yeast Saccharomyces cerevisiae. Applied Microbiology and Biotechnology 94: 273-283.
- ・Hiroshi K, Tan H, Jayakody, L. N. ; Analysis of the role of mitochondria of sake yeast during sake brewing and its applications in fermentation technologie AGri-Bioscience Monographs vol. 3, p1-12
- ・7. Shiroma S, Jayakody LN, Horie K, Okamoto K, Kitagaki H ; Enhancement of ethanol fermentation of Saccharomyces cerevisiae sake yeast strain by disrupting mitophagy function Applied and Environmental Microbiology 80(3):1002-1012 Feb-14
- ・*Jayakody, L. N., N. Hayashi, Kitagaki H. ; Molecular mechanisms for detoxification of major aldehyde inhibitors for production of bioethanol by Saccharomyces cerevisiae from

hot-compressed water-treated lignocellulose Material and process for energy: communicating current research and technology development, A. Mendez-Vilas (Ed.), pp: 302-311 Dec-13

- Jayakody, L. N., N. Hayashi, Kitagaki H. ; Breeding of bioethanol yeast by detoxification of glycolaldehyde, a novel fermentation inhibitor Stress Biology of Yeasts and Fungi: Application for Industrial Brewing and Fermentation Chapter 1 In press
- Jayakody, L. N., N. Hayashi, Kitagaki H. ; Biomass utilisation technologies to cope future energy demand in Asia. My Proposal for the Future of Asia: A Collection of Best Papers of the First Asia Future Conference In press

(口頭発表・ポスター発表・講演)

学生氏名 : プッティカ-コロツハ°ルムプリア-ラツチカ°

- Perumpuli P. A. B. N., Taisuke Watanabe, Hirohide Toyama ; Pellicle of thermotolerant *Acetobacter pasteurianus* strains: Characterization of polysaccharides and induction patterns. Japan Society of Bioscience, Biotechnology and Agrochemistry March 27-31, 2014 Tokyo, Japan (口頭発表)

学生氏名 : テルハワテ°イゲ°ダ°ラ ラヒル ニロシヤン ジ°ヤコテ°イ

- 13. Jayakody L. N., Horie K, Hayashi N, Kitagaki H. ; Discovery of novel pathways to develop inhibitor tolerant yeast *Saccharomyces cerevisiae* to hot-compressed water-treated cellulose hydrolysate 35th Symposium on Biotechnology for Fuels and Chemicals 27th April -1st of May Florida , USA (口頭発表)
- Jayakody L. N., Horie K, Hayashi N, Kitagaki H. ; Engineering yeast *Saccharomyces cerevisiae* strain to the combinational inhibitory effect of key inhibitors in hot-compressed water-treated cellulose hydrolysate: critical step to break the barrier for industrial cellulosic ethanol production. 10th Canadian Renewable Fuel Summit 2-4th December 2013 Canada, Montreal (口頭発表)
- Jayakody L. N., Horie K, Hayashi N, Kitagaki H. ; Novel insight into the molecular mechanism of tolerance of yeast *Saccharomyces cerevisiae* towards the major aldehyde inhibitors presents in hot-compressed water treated cellulose hydrolysate. Conference on yeast cell biology November 2013 Nov-13 Cold Harbour Laboratory , USA, Newyork (ポスター発表)
- Jayakody L. N., Horie K, Hayashi N, Kitagaki H. ; Mechanism of detoxification of glycolaldehyde, the key inhibitor of bioethanol production, by regulating the redox cofactor balance in yeast *Saccharomyces cerevisiae*. Annual meeting of Japan Society for Biotechnology September, 2013 Hiroshiam, Japan (ポスター発表)

• Jayakody L. N., Hayashi N, Kitagaki H. ; Engineering of a yeast strain tolerant to fermentation inhibitors derived from lignocellulose Japan Society for Biotechnology-Kyushu branch meeting Dec-13 Saga, Japan (口頭発表)

• Lahiru N. Jayakody, Nobuyuki Hayashi, Hiroshi Kitagaki ; Megavariate analysis of inhibitory effects of fermentation inhibitors derived from cellulose hydrolysates on yeast *Saccharomyces cerevisiae*. Annual meeting of Japan Society for Bioscience, Biotechnology, and Agrochemistry Mar-14 Meiji University, Tokyo (口頭発表)

学生氏名：廣重 亮一

• 廣重 亮一*、三井ホーム(株)：村上知徳、(株)コシイブレザービング：曾我部昭好、琉球大：金城一彦；木質系住宅における基礎周囲の防蟻に関する研究 日本木材学会 2014. 3. 13～2014. 3. 15 愛媛県、松山市 (ポスター発表)

学生氏名：時村 金愛

• サツマイモ新品種「こなみずき」澱粉の特性と食品への利用 日本応用糖質科学会平成25年度大会 特別シンポジウム「麴と文化」講演 (口頭発表) 2013年9月25～26日 鹿児島市

学生氏名：S. R. B. D. M. イデ^oイカ^oラテ^oイフ^oワニ^oナ^oイ

• *Wanninaika I.P., Shinjiro Tachibana, Hirohide Toyama ; Water-soluble adipogenesis inhibition activity produced by genus *Monascus* 2014 Annual Meeting of Japan Society of Bioscience, Biotechnology and Agrochemistry March 27-31, 2014 Tokyo, Japan (口頭発表)

• Wanninaika I.P., Shinjiro Tachibana, Hirohide Toyama ; Adipogenesis inhibition activity of *Monascus* fermented rice Special Seminar on Food Science and Technology February 27-28, 2014 Saga, Japan (口頭・ポスター発表)

応用生命科学専攻 (食品機能科学連合講座)

(発 表 論 文)

学生氏名：新垣美香

• 新垣美香*・高橋誠・城間清・ホサイン Md. アムザド・高良健作・和田浩二 ; 沖縄県産ネギ類 (*Allium* spp.) の生育特性および香り成分による客観的分類と機能性分析 日本食品保科学会誌 発行予定

• Mika Arakaki1, Makoto Takahashi, Md. Amzad Hossain and Koji Wada ; Changes in Sugar Content and Antioxidant Activity of *Allium* Vegetables by Salinity-stress Food Science and Technology Research 発行予定

学生氏名：ヨナサンキン

• Yonathan Asikin*, Makoto Takahashi, Takashi Mishima, Masami Mizu, Kensaku Takara, Koji

Wada ; Antioxidant activity of sugarcane molasses against 2,2'-azobis(2-amidinopropane) dihydrochloride-induced peroxy radicals Food Chemistry Vol. 141. No. 1. pp. 466~472
1-Nov-13

- Yonathan Asikin*, Asahiro Kamiya, Masami Mizu, Kensaku Takara, Hajime Tamaki, Koji Wada ;
Changes in the physicochemical characteristics, including flavour components and Maillard
reaction products, of non-centrifugal cane brown sugar during storage
Food Chemistry Vol. 149. pp. 170~177 15-Apr-14
- Yonathan Asikin, Hibiki Fukunaga, Yoshimasa Yamano, De-Xing Hou, Goki Maeda, Koji Wada ;
Effect of cultivation line and peeling on food composition, taste characteristic, aroma profile,
and antioxidant activity in Shiikuwasha (Citrus depressa Hayata) juice Journal of the
Science of Food and Agriculture In press

学生氏名 : 井ノ原 康太

- *Inohara K, Kimura I, Chunhong Y. ; Suppressive effect of ATP on autoxidation of tuna
oxymyoglobin to metmyoglobin. Fisheries Science 79 ; 503-511 2013年4月18日

学生氏名 : ペトروس キグアスチン チグチヨカ

- Asami Ikeda*, Hayato Ichino, Saori Kiguchiya, Petros Chigwechokha, Masaharu Komatsu, Kazuhiro
Shiozaki ; Evaluation and identification of potent angiotensin-I converting enzyme
inhibitory peptide derived from dwarf gulper shark (Centrophorus atromarginatus)
Journal of Food Processing and Preservation 18-Sep-13

(口頭発表・ポスター発表・講演)

学生氏名 : 王 鵬

- Peng Wang, Munehiro Tanaka ; Development of a simple method to determine aerobic
biodegradation heat of organic substrate The 67th Regular Session of Kyushu Branch of the
Japanese Society of Agricultural Machinery 2013/9/2 — 2013/9/3 Japan, Beppu (口頭発表)
- Peng Wang, Mika Ota, Kikue Yokoo, Yuichiro Wakiya, Munehiro Tanaka ; Analysis of the effect
of heat insulation on activated sludge reactor by a thermal balance model
The 72th Annual meeting of the Japanese Society of Agricultural Machinery 2013/9/10 - 2013/9/13
Japan, Obihiro (口頭発表)

学生氏名 : 舟橋亞希

- 舟橋亞希*, 上西由翁、板倉隆夫 ; ウナギ緑色蛍光タンパク質のウナギ属における分布
日本水産学会 2013年9月19日~2013年9月22日 津市 (口頭発表)

学生氏名：ヨナソアシキン

- Yonathan Asikin*, Makoto Takahashi, Takashi Mishima, Masatoshi Watai, Masami Mizu, Toshikazu Kawai, Kensaku Takara, Koji Wada ; Antioxidant activity of sugarcane molasses against the 2,2'-azobis(2-amidinopropane) dihydrochloride (AAPH) generated peroxy radicals
EuroFoodChem XVII 7-10 May 2013 Turkey, Istanbul (口頭発表)
- 和田浩二*, Yonathan Asikin, 新垣江利子, 玉城一, 高良健作, 神谷朝博, 中島寿典, 水雅美 ; 黒糖貯蔵における食品成分および香気成分の変化 60th Annual Meeting of the Japanese Society for Food Science and Technology 29~31 Aug 2013 Japan, Tokyo (口頭発表)
- Yonathan Asikin*, Yoshimasa Yamano, Kensaku Takara, Koji Wada ; Effect of cultivation line and peeling process on chemical composition, taste characteristic, volatile aroma components, and antioxidant activity in Shiikuwasha (Citrus depressa Hayata) juice
13th ASEAN Food Conference 9-11 Sept 2013 Singapore (口頭発表)

学生氏名：井ノ原 康太

- *井ノ原康太・袁春紅・木村郁夫 ; ATP のマグロミオグロビン蛍光に及ぼす作用
日本水産学会 2013年9月19日~9月22日 日本三重県 (口頭発表)
- *Kota Inohara, Chunghong Yuann, Ikuo Kimura ; Suppressive effect of ATP on autoxidation of tuna oxymyoglobin to metmyoglobin EAFTA2013 The first EAFTA Conference
25th/Nov/2013-26th/Nov/2013 北海道 (口頭発表)
- *井ノ原康太・木村郁夫 ; 魚類ミオグロビンメト化率測定法の検討 日本水産学会
2014年3月27日~3月31日 北海道 (口頭発表)

応用生命科学専攻 (先端応用生命科学連合講座)

(発 表 論 文)

学生氏名：ピョーヒョウカイザン

- *Phyu Phyu Khine Zar, Kozue Sakao, Fumio Hashimoto, Akiko Morishita, Makoto Fujii, Koji Wada and De-Xing Hou ; Antioxidant and anti-inflammatory activities of loquat (Eriobotrya japonica) tea Functional food in health and disease (FFHD) 3/447-461 14.10.2013
- *Phyu Phyu Khine Zar, Akiko Morishita, Fumio Hashimoto, Kozue Sakao, Makoto Fujii, Koji Wada and De-Xing Hou ; Anti-inflammatory effects and molecular mechanisms of loquat (Eriobotrya japonica) tea journal of functional food (JFF) 6/523-533 23.8.2013

学生氏名：ニルシ 勸ラ

- *Ruwani N. Nugara, Masashi Inafuku, Hironori Iwasaki, Hirosuke Oku ; Partially purified *Peucedanum japonicum* Thunb extracts exert anti-obesity effects invitro Nutrition 2013.05.20 In press
- *Ruwani N. Nugara, Masashi Inafuku, Kensaku Takara, Hironori Iwasaki, Hirosuke Oku ; Pteryxin: a coumarin in *Peucedanum japonicum* Thunb leaves exerts anti-obesity activity through modulation of adipogenic gene network Nutrition 2013.10.24 In press

学生氏名：フォービバーザパントリオ

- Phoebe Zapanta Trio*, Sixiang You, Xi He, Jianhua He, Kozue Sakao, De-Xing Hou ; Chemopreventive functions and molecular mechanisms of garlic organosulfur compounds Food & Function DOI: 10.1039/C3F060479A 29-Jan-14

(口頭発表・ポスター発表・講演)

学生氏名：釜田 佳季

- 釜田佳季*, 縄田勇介, 懸野崎知世, 杉元康志 ; ヒトリゾチーム変異体発現による凝集体の解析 第36回日本分子生物学会年会 2013年12月3~6日 神戸 (ポスター発表)

学生氏名：章 超

- 章 超*, 坂尾こず枝, 小野友愛, 高瀬良和, 岩井謙一, 侯徳興 ; サツマイモ焼酎の冬虫夏草スピリッツの抽出物によるHL-60細胞のアポトーシス誘導 農芸化学会2014東京大会 2014.3.27~2014.3.30 東京 (口頭発表)

学生氏名：高取 由佳

- *高取由佳, 清水圭一, 福山達也, 橋本文雄 ; トルコギキョウ *Eustoma grandiflorum* (Raf.) Shinn. 品種‘スピカロマン’の斑入りは, F3H遺伝子へのトランスポゾン挿入により引き起こされる 園芸学会 2014/3/29~3/30 茨城県つくば市 (ポスター発表)

学生氏名：日置 久美子

- 日置久美子*, 山元正博, 林國興, 屋宏典 ; レイヤーの生産性および卵質に対する麴給与の影響 日本畜産学会第117回大会 2013年9月9日~10日 新潟市 (口頭発表)

学生氏名：久永 絢美

- *久永絢美, 坂尾こず枝, 侯徳興 ; ケルセチンの官能基と抗炎症作用 第36回日本分子生物学会年会 2013.12.3 - 12.6 神戸 (ポスター発表)
- *久永絢美, 坂尾こず枝, 向井理恵, 寺尾純二, 侯徳興 ; プレニル基の導入によるケルセチンの抗炎症作用の増強 第18回日本フードファクター学会学術集会2013 YIA口頭発表(3分間) YIAポスター発表 2013.11.9 - 11.10 東京都

(発 表 論 文)

学生氏名：降幡 駿介

- *Shunsuke Furihata, Kojiro Tanaka, Masasuke Ryuda, Masanori Ochiai, Hitoshi Matsumoto, Gyorgy Csikos, Yoichi Hayakawa ; Immuno-evasive protein (IEP)-containing surface layer covering polydnavirus particles is essential for viral infection Journal of Invertebrate Pathology 115/26-32 2013.1

学生氏名：向井 裕美

- *Hiromi Mukai, Mantaro Hironaka, Sumio Tojo, Shintaro Nomakuchi ; Maternal Vibration: An Important Cue for Embryo Hatching in a Subsocial Shield Bug PLoS ONE 9 (1), e87932 31-Jan-14
- *Takahiro Hosokawa, Mantaro Hironaka, Koichi Inadomi, Hiromi Mukai, Naruo Nikoh, Takema Fukatsu ; Diverse Strategies for Vertical Symbiont Transmission among Subsocial Stinkbugs PLoS ONE 8 (5), e65081 31-May-13

学生氏名：神代 瞬

- M. Tokuda*, Y. Jikumaru, K. Matsukura, Y. Takebayashi, S. Kumashiro, M. Matsumura, Y. Kamiya Phytohormones Related to Host Plant Manipulation by a Gall-Inducing Leafhopper PLoS ONE 8(4): e62350. doi:10.1371/journal.pone.0062350 30-Apr-13
- 神代 瞬*・徳田 誠 ; ゴール形成機構解明のモデル実験系としてのイネ科作物とフタテンチビヨコバイ 昆虫と自然 48(13): 16-19 平成25年12月30日
- Shun Kumashiro*, Keiichiro Matsukura, Ryo Ogawa, Masaya Matsumura, Makoto Tokuda ; Occurrence of *Cicadulina bipunctata* (Hemiptera: Cicadellidae) in southwestern Shikoku, Japan and comparisons of gall-inducing ability between Kyushu and Shikoku populations Applied Entomology and Zoology in press

学生氏名：寺田 剛

- Terada T. ; Two new species of the genus *Stathmopoda* (Lepidoptera: Stathmopodidae) closely related to *S. opticaspis* from Japan Lepidoptera Science 64(4), 140-149 2013.12

(口頭発表・ポスター発表・講演)

学生氏名：濱田大輔

- *濱田大輔、曾根晃一、畑邦彦 ; 霧島えびの高原における高木性樹種実生に対するニホンジカと林床環境の影響 第61回日本生態学会大会 2014年 広島県 (ポスター発表)

学生氏名：向井裕美

- *Hiromi Mukai, Mantaro Hironaka, Sumio Tojo, Shintaro Nomakuchi ; Mother insects can regulate egg temperature: egg-rolling behaviour in a subsocial burrower bug 11th INTECOL Congress August 18-23, 2013 UK, London (ポスター発表)
- *山尾僚, 向井裕美, 矢原徹一 ; 植物における血縁個体間の協力的行動: オオバコは兄弟で他種競争者の生長を抑制する 第45回種生物学学会大会 2013年12月 大分県 (ポスター発表)
- *向井裕美, 弘中満太郎, 藤條純夫, 野間口眞太郎 ; フタバシツチカメムシの幼虫は積極的に胚を孵化させるか? 第58回日本応用動物昆虫学会大会 2014年3月26-28日 高知県 (口頭発表)
- *弘中満太郎, 向井裕美, 藤條純夫, 田中信太郎, 針山孝彦 ; 昆虫は光源の何に魅かされているのか: エッジやその他の視覚的属性への定位 第58回日本応用動物昆虫学会大会 2014年3月26-28日 高知県 (口頭発表)
- *長岡希隆, 向井裕美, 山尾僚, 野間口眞太郎 ; トビイロシワアリのワーカーは幼虫の運搬により温度環境を調節する 第58回日本応用動物昆虫学会大会 2014年3月26-28日 高知県 (ポスター発表)

学生氏名：大石圭太

- *大石圭太, 水田裕一, 畑邦彦, 曾根晃一 ; 間伐施業がアカネズミとヒメネズミの生息状況に及ぼす影響 第69回九州森林学会 2013年10月25-26日 宮崎市 (口頭発表)
- *大石圭太, 河邊弘太郎, 田浦悟, 畑邦彦, 曾根晃一 ; マイクロサテライトマーカーを用いたアカネズミとヒメネズミの遺伝空間パターンの解明 第61回日本生態学会大会 2014年3月14-18日 広島市 (ポスター発表)
- *大石圭太, 水田裕一, 畑邦彦, 曾根晃一 ; 間伐施業がアカネズミとヒメネズミの生息状況に及ぼす影響 第125回日本森林学会大会 2014年3月26-30日 大宮市 (ポスター発表)

学生氏名：小野山 佳佑

- 小野山佳佑*・中村正幸・岩井久 ; サンセベリアにおける *Colletotrichum sansevieria* および *C. gloeosporioides* の混合感染について 日本植物病理学会九州部会 2013年11月13日 熊本市 (口頭発表)

学生氏名：神代 瞬

- 神代瞬*・倉橋拓也・田中海佐子・紙谷聡志・徳田誠 ; オカモトフタテンヒメヨコバイの産雌性単為生殖に生殖操作細菌は関与しているのか? 第45回種生物学シンポジウム 2013年11月29日-12月1日 大分県 (ポスター発表)

・塩見宜久*・神代 瞬・ロ木文孝・白石祥子・井上広光・徳田 誠 ; ナシ葉片を用いたチュウゴクナシキジラミの飼育法の検討および温度が本種の発育に及ぼす影響 第 87 回九州病害虫研究会研究発表会 2014 年 2 月 6 日 熊本県 (口頭発表)

・倉橋拓也*・大原直通・神代瞬・紙谷 聡志 ; オカモトフタテンヒメヨコバイの単為生殖と性比操作細菌 Wolbachia の関係 平成 25 年度 日本昆虫学会九州支部・日本鱗翅学会九州支部合同大会 2013 年 11 月 30 日 長崎県 (口頭発表)

学生氏名：田中 弘毅

・田中弘毅*、徳田誠 ; 同所的なアリ散布植物 2 種の散布者構成比とその適応意義 種生物シンポジウム 2013 年 12 月 別府市 (ポスター発表)

・田中弘毅* ; アリ散布植物ホトケノザにおける個体密度と土壤養分に応じた散布形質の可塑性 進化学会 2013 年 8 月 つくば (口頭発表)

学生氏名：千秋 祐也

・千秋祐也, Nasril Nasir, Henny Herwina, Jumjunidang, 園田亜矢佳, 福元智博, 中村正幸, 岩井久 ; スマトラ島におけるバナナバンチートップウイルスの DNA-U3 の解析 日本植物病理学会九州部会 2013 年 11 月 13 日 熊本県熊本市 (口頭発表)

学生氏名：寺田 剛

・ニセマイコガの多様な食性と肉食性の進化 日本鱗翅学会第 60 回大会 2013. 11. 9-11. 10 日本/堺 (口頭発表)

・オビマイコガ *Stathmopoda opticaspis* に近縁な 2 未記載種 (鱗翅目, ニセマイコガ科) 日本昆虫学会第 73 回大会 2013. 9. 13-9. 16 日本/札幌 (口頭発表)

学生氏名：エルサイド`モハト`エルハバウイ`アブドルファタ

・*Elsaid M. Elnabawy, Katsuo Tsuda, Ushijima Yurie, Yositaka Sakamaki ; Studying the response of true spiders population to organic and chemical fertilizers in eggplant field and its roles in The association of plant protection of kyushu (2014) 2 月 6 日 Japan, kumamoto (口頭発表)

農水圏資源環境科学専攻 (地域資源環境工学連合講座)

(発 表 論 文)

学生氏名：アザィタ`ビンチ`アハト`ザウイ

・Azita Ahmad Zawawi*, Masami Shiba, Noor Janatun Naim Jemali ; Landform classification for site evaluation and forest planning: Integration between scientific approach and traditional concept Sains Malaysiana 43(3): 349- 358 Mar-14

(口頭発表・ポスター発表・講演)

学生氏名：田川堅太

- ・*田川堅太, 長裕幸, 柳澤晴彦, 北野雅治 ; トウモロコシ生育条件下における土壌水分・塩分の鉛直分布特性. 農業農村工学会 2013. 9. 3-2013. 9. 5 東京 (口頭発表)
- ・*高橋翔平, 田川堅太, 長裕幸, 北野雅治, 王維真 ; 乾燥地塩類集積土壌における耐塩性作物の栽培と土壌水分・塩分モニタリング 農業農村工学会 2013. 9. 3-2013. 9. 5 東京 (口頭発表)
- ・*永野一輝, 長裕幸, 児玉大輔, 田川堅太, 藤巻晴行 ; 大型多線式 TDR プローブを用いた面的土壌水分計測 農業農村工学会 2013. 9. 3-2013. 9. 5 東京 (口頭発表)
- ・*田川堅太, 高橋翔平, 永野一輝, 長裕幸, 北野雅治 ; ビート栽培カラムにおける土壌水分・塩分の鉛直分布特性 土壌物理学学会 2013. 10. 26-2013. 10. 27 福島 (ポスター発表)

学生氏名：アザィタ ビンチ アハマト ザウイ

- ・Simulating topographic potential for automated erosion detection: An evaluation of steep forest on Okinawa Island IUFRO Unit 3.06 International Conference. Forest Operations in Mountainous Conditions. Honne, Norway 2nd -5th June 2013 Norway, Honne Presenter (口頭発表)
- ・Estimation of complex crown patches using LiDAR data in Yambaru forest Okinawa Island. Annual Meeting on Okinawa Subtropical Forestry. 30th August 2013 Japan, Okinawa Presenter (口頭発表)
- ・Assessment of crown structure characteristics using LiDAR data in complex subtropical forest of Okinawa Island. Kyushu Branch of Forest Society (Annual Meeting) 26-28th October 2013 Japan, Miyazaki Presenter (口頭発表)
- ・Stand-based tree height estimation and crown delineation using LiDAR in subtropical Yambaru forest, Okinawa Japanese Forest Society Congress 125 26- 30 March 2014 Japan, Tokyo Presenter (口頭発表)

学生氏名：ル ジャットン ナム ビンティ ジャマ

- ・Noor NJN, Shiba M, Azita AZ ; Vertical structure assessment and spatial dissemination of subtropical broadleaved tree species in Okinawa Island The 69th Kyushu Forestry Society Meeting Oct, 2013 Miyazaki, Japan (口頭発表)
- ・Noor JNJ, Shiba M, Azita AZ ; Interpretation of forest canopy structure of okinawa subtropical broad-leaves forest translated from laser scanning data Okinawa Subtropical Forestry Annual Meeting 2013 Aug, 2013 Naha, Okinawa (口頭発表)

- Noor JNJ, Shiba M, Azita AZ ; Assessment of spatial and vertical structure of subtropical broadleaved trees in Yambaru areas 125th Annual Meeting of the Japanese Forest Society March, 2014 Saitama, Japan (ポスター発表)
- Noor JNJ, Shiba M, Azita AZ ; Spectral Classification of IKONOS Images for Forest Cover Characterization of Yanbaru Forest Area, Okinawa Japan
United Graduate School of Agricultural Science Seminar (Agriculture I) Nov, 2013
Kagoshima, Japan (ポスター発表)

学生氏名：ベ`伊`カ`ベ`リト` 柁 クリヂヤン

- Konishi Yotaro, Professor, Osaka University Isobe Katsunori, Associate Professor of Nihon University. ; Sustainable Expansion of Quinoa
International Year of Quinoa 2013 - Scientific Forum: The Potential of Quinoa in Japan
2013 United Nations University, Japan, Tokyo (口頭発表)
- Influence of Global Warming on Quinoa Production ? Field Trial of Quinoa Cultivation in Okinawa, Japan ? Agriculture I (General Seminar) 2nd year PhD students from Kagoshima University, Saga University and Ryukyu University 2013 Urban Port Hotel, Japan, Kagoshima (口頭発表)

学生氏名：内田 圭一

- *内田圭一、一井翔太郎、八木健太郎、紙谷喜則、河野澄夫 ; 芋焼酎製造における微生物混入後の挙動 - 衛生管理の必要性について - 日本防菌防黴学会 2013年9月10日
日本/大阪府 (口頭発表)

農水圏資源環境科学専攻 (水産資源環境科学連合講座)

(発 表 論 文)

学生氏名：伊藤 一輝

- *Mohd Yusoff Nurulnadia, Jiro Koyama, Seiichi Uno, Emiko Kokushi, Eugene Tan Bacolod, Kazuki Ito, Yasutaka Chuman ; Bioaccumulation of Dietary Endocrine Disrupting Chemicals (EDCs) by the Polychaete, *Perinereis nuntia* Environ Contam Toxicol 91:372?376 4-Aug-13

学生氏名：加茂 崇

- 加茂 崇*, 西 隆一郎, 鶴成悦久, 黒瀬公美子 ; 海岸湧出地下水の研究—鹿児島県松ヶ浦海岸潮間帯から湧出する地下水— 土木学会論文集B3(海洋開発) Vol. 69, No. 2, pp. I_539-I_544
2013年9月

- 加茂 崇*, 西 隆一郎, 鶴成悦久, 須田有輔, 早川康博, 大富 潤 ; 砂質性海浜に流入する淡水量の推定—鹿児島県吹上浜を例に— 土木学会論文集 B3 (海洋開発) Vol. 69, No. 2, pp. I_545-I_550
2013年9月

学生氏名 : シェラマエノノナト

- first author ; Isolation, identification and characterization of oil-degrading bacterial strains from Guimaras, Philippines for bioremediation application DNA polymorphism in press
- SHARON N. NUNAL*, SHEILA MAE S. SANTANDER-DE LEON, EUGENE BACOLOD, JIRO KOYAMA, SEIICHI UNO, TAKESHI YOSHIKAWA AND HIROTO MAEDA ; Bioremediation of heavy oil-polluted seawater by bacterial consortium immobilized in cocopeat and rice hull powder in press
- Sharon N. Nunal*, Sheila Mae Santander-de Leon, Miyo Nakano, Crispino Saclauso, Takeshi Yoshikawa & Hiroto Maeda ; Isolation, identification and characterization of oil-degrading bacterial strains from Guimaras, Philippines for bioremediation application DNA polymorphism in press

学生氏名 : ヌルルナディアヒンテイモハトエツフ

- *Nurulnadia, M. Y., Koyama, J., Uno, S., Kokushi, E., Bacolod, E. T., Ito, K., & Chuman, Y. ; Bioaccumulation of Dietary Endocrine Disrupting Chemicals (EDCs) by the Polychaete, *Perinereis nuntia* Bulletin of environmental contamination and toxicology Volume 91, Issue 4, pp 372-376
6-Mar-13
- *Nurulnadia, M. Y., Koyama, J., Uno, S., Kito, A., Kokushi, E., Bacolod, E. T., Ito, K. & Chuman, Y. ; Accumulation of endocrine disrupting chemicals (EDCs) in the polychaete *Paraprionospio* sp. from the Yodo River mouth, Osaka Bay, Japan Environmental monitoring and assessment Volume 186, Issue 3, pp 1453-1463 20-May-13

学生氏名 : ヤマサキ 雅俊

- *Masatoshi Yamasaki, Kyosuke Araki, Teruyuki Nakanishi, Chihaya Nakayasu, Yasutoshi Yoshiura, Takaji Iida, Atsushi Yamamoto ; Adaptive immune response to *Edwardsiella tarda* infection in *gimbuna crucian carp*, *Carassius auratus langsdorfii* Veterinary Immunology and Immunopathology Vol. 153 (1-2), pp. 83-90 2013. 5
- *Masatoshi Yamasaki, Kyosuke Araki, Teruyuki Nakanishi, Chihaya Nakayasu, Atsushi Yamamoto ; Role of CD4+ and CD8alpha+ T cells in protective immunity against *Edwardsiella tarda* infection of *gimbuna crucian carp*, *Carassius auratus langsdorfii* Fish and Shellfish Immunology Vol. 36(1), pp. 299-304 2014. 1. 14

(口頭発表・ポスター発表・講演)

学生氏名：松沼瑞樹

- 松沼瑞樹*・本村浩之； 日本におけるフサカサゴ科ミノカサゴ類似種群の分類学的研究
四国魚類研究会 2013年3月2-3日 松山市 (口頭発表)
- Mizuki Matsunuma* and Hiroyuki Motomura； An undescribed species of the lionfish genus *Pterois* from northeastern Australia (Scorpaenidae: Pteroinae)
9th Indo-Pacific Fish Conference 2013年6月23-27日 宜野湾市 (口頭発表)
- Mizuki Matsunuma* and Hiroyuki Motomura； Validity of the lionfishes (Scorpaenidae), *Pterois lunulata* Temminck and Schlegel, 1843 and *P. russelii* Bennett, 1831, with an undescribed species of *Pterois* from Australia
Symposium on Systematics and Diversity of Fishes
2013年7月6-7日 東京 (ポスター発表)

学生氏名：伊藤一輝

- *Kazuki Ito, Jiro KOYAMA, Seiichi UNO； Toxicity evaluation of microinjected PAHs for Java medaka (*Oryzias javanicus*) embryo
SETAC NORTH AMERICA 34th ANNUAL MEETING
17-21 November 2013 Nashville, TN, USA (ポスター発表)

学生氏名：マカリ

- Effect of replacing fishmeal with a plant protein on growth performance, feed utilization and oxidative condition of red sea bream using RAS
gakkai 26-March-2013 to 1-April-2013
Tokyo presenter (口頭発表)

学生氏名：スルビヤロンノト

- Enhanced bioremediation of heavy oil-contaminated sediment by combination of biostimulation and bioaugmentation strategies
Annual meeting of The Society for Antibacterial and Antifungal Agents September 9-12, 2013 Japan, Osaka presenter (ポスター発表)
- Enhanced bioremediation of heavy oil-contaminated sediment by combination of biostimulation and bioaugmentation strategies
Annual Meeting of the Japan Society for Microbial Ecology November 23-25, 2013 Japan, Kagoshima City presenter (ポスター発表)
- Enhanced bioremediation of heavy oil-contaminated sediment by combination of biostimulation and bioaugmentation strategies
Aquaculture America 2014 February 9-12, 2014
United States of America, Seattle presenter (口頭発表)

学生氏名：山崎雅俊

- *山崎雅俊, 荒木亨介, 中西照幸, 中易千早, 山本淳； ギンブナ Th1 様細胞の *Edwardsiella tarda* に対する感染防御における役割
日本魚病学会 2013年9月 三重 (日本) (口頭発表)

- *山崎雅俊, 荒木亨介, 中西照幸, 中易千早, 山本淳 ; ギンブナの *Edwardsiella tarda* ホルマリン不活化ワクチンおよび弱毒生ワクチンにより誘導される二次免疫応答の比較 日本魚病学会 2014年3月 函館(日本) (口頭発表)
- *山崎雅俊, 荒木亨介, 中西照幸, 中易千早, 山本淳 ; ギンブナのヘルパーT細胞および細胞障害性T細胞は *Edwardsiella tarda* 感染に対する防御免疫において重要な役割を果たす 日本増養殖学会 2013年10月 鹿児島(日本) (ポスター発表)
- *Yamasaki M, Araki K, Nakayasu C, Nakanishi T, Yamamoto A ; Comparative analysis of the adaptive immune response to live and inactivated *Edwardsiella tarda* in ginbuna crucian carp, *Carassius auratus langsdorfii* European Association of Fish Pathology September, 2013 Tampere (Republic Finland) (口頭発表)

学生氏名: ウィリアム シーラ シブカン

- *Shiela Villamor and Tomoko Yamamoto ; Reproductive Seasonality of *Cypraea annulus* (Mollusca: Gastropoda) in Temperate Area Malacological Society of Japan 20-21 April 2013 Toyohashi City, Aichi ken, Japan (ポスター発表)
- *Shiela Villamor and Tomoko Yamamoto ; Reproductive Seasonality of *Cypraea annulus* (Mollusca: Gastropoda) in Hanazesaki, Kagoshima Prefecture, Japan Seminar on Agriculture and Fishery Sciences 24-Oct-13 National Sun Yat-sen University, Kaoshiung, Taiwan (口頭発表)

学生氏名: 姜 京範

- *姜 京範・不破 茂・江幡恵吾・安樂和彦・バスケス A. ミゲル・(鹿大水) 金 碩鍾 (済州大学校) かご近傍の流速分布による魚の行動特性 - 明暗と側線の影響による行動の差 - 日本水産学会 2013年9月19日~2013年9月22日 日本, 三重県津市 (口頭発表)
- *姜 京範・田中凌亮・不破 茂・江幡恵吾・安樂和彦・バスケス A. ミゲル・(鹿大水) 金 碩鍾 (済州大学校) ; かご近傍の流速分布による魚の行動特性 - 単独と複数の場合の違い - 日本水産学会 2014年3月27日~3月31日 日本, 北海道函館市 (口頭発表)

学生氏名: 外山 義典

- Yoshinori SOTOYAMA*, Saichiro YOKOYAMA, Manabu ISHIKAWA, Shunsuke KOSHIO, Yuki SHIMIZU, Hiromi OKU, Hiroshi HASHIMOTO, Keishi MATSUDA, Tadashi ANDO, Hitoshi IMAIZUMI, Tadao JINBO AND Kenji MASUDA ; GROWTH PERFORMANCE AND BODY COMPOSITION OF JUVENILE YELLOWTAIL (*Seriola quinqueradiata*) REARED UNDER HIGH TEMPERATURE CONDITION AQUACULTURE ASIAN PACIFIC 2013 2013. 12. 11~2013. 12. 13 ベトナム ホーチン (ポスター発表)

学生氏名: 魏 弘毅

- Hongyi Wei*, Sakaguchi Shigeake, Yoshikawa Takeshi, Maeda Hiroto ; Biocontrol of pathogenic root rot fungus 第29回日本微生物生態学会大会 November 23-25, 2013 鹿児島市 (ポスター発表)

• Hongyi Wei*, Shigeaki Sakaguchi, Takeshi Yoshikawa, Hiroto Maeda ; Biological control of pathogenic root rot fungus 日本防菌防黴学会第40回年次大会 September 10-11, 2013 大阪市 (ポスター発表)

• Hongyi Wei* ; Biological control of pathogenic root rot fungus NSYSY-KU Seminar on Agriculture and Fishery Sciences 24-Oct-13 Kaohsiung, Taiwan (口頭発表)

学生氏名 : チェン フィン スイ

• Truong Huynh Nhu*, Ishikawa Manabu, Yokoyama Saichiro, Trieu Thanh Tuan, Koshio Shunsuke ; The effect of feeding regimes and heat-killed bacteria supplementation diets on growth performances and immune parameters of juvenile kuruma shrimp, *Marsupenaeus japonicus* Bate Asian-Pacific Aquaculture 2013 2013. 12. 10-2013. 12. 13 Ho Chi Minh City, Viet Nam presentation (口頭発表)

学生氏名 : マジヤカ ベンジャミン トット

• Prof. M. Thiel, Prof. S. Fujieda, Invited members from 10 East Asia Countries, KIOST and OSEAN members. ; Distribution and movement patterns of micro debris within Kagoshima Bay AMETEC Marine Debris/Micro-debris Workshop 2013, June 11th - 21st Geoje, South Korea (口頭発表)

学生氏名 : マフムド アブドルハミッド オムラン ダウウド

• Mahmoud Dawood ; EFFECT OF DIETARY EXOGENOUS DIGESTIVE ENZYMES ON GROWTH PERFORMANCE, FEED UTILIZATION AND BODY COMPOSITION OF RABBITFISH *Siganus revulatus* Asian-Pacific Aquaculture 2013 December 10 - 13, 2013. Ho Chi Minh City, Vietnam. presentation (口頭発表)

学生氏名 : ワチャラポーン チュムチュエン

• *Chumchuen W., Matsuoka T. and Anraku K. ; Catch composition of tropical tuna associated with floating objects and free schools by purse seine in the Indian Ocean NSYSU-KU Seminar on Agriculture and Fishery Sciences 2013. 10. 24 China/Taiwan (口頭発表)

学生氏名 : モハマト サカワト ホシノ

• Md. Sakhawat Hossain*, Md. Abdul Kader, Tanwi Dey, Saichiro Yokoyama, Manabu Ishikawa and Shunsuke Koshio ; EFFECT OF REPLACING DIETARY FISHMEAL ON GROWTH DIGESTIBILITY AND ECONOMIC PERFORMANCES OF CLIMBING PERCH *Anabas testudineus* Asian-Pacific Aquaculture 2013 10 to 13 December, 2013 Vietnam (口頭発表)

◇研究室紹介

生物生産科学専攻
熱帯自然・植物生産科学連合講座
作物生態生理学研究室（佐賀大学農学部）
鈴木 章弘

私達の研究室には、有馬進教授と鈴木の2名のスタッフと博士研究員2名、連大生2名、修士課程5名、学部生14名（3年生以上）の25名が所属しています。また、整備されている機器類としては、クリーンベンチ、安全キャビネット、ドラフト、各種フリーザ、オートクレーブ、人工気象器、LED搭載インキュベータ、各種遠心機、サーマルサイクラー、リアルタイムPCR装置、マイクロアレイ解析装置、マイクロチップ電気泳動装置、ガスクロマトグラフィー、微分干渉顕微鏡、実体蛍光顕微鏡等があり、植物栽培用のスペースとして、室内に植物育成室、屋外にガラス温室（図1）と圃場があります。

研究は、作物の生産性の向上を最終目標として様々なテーマに取り組んでいますが、その中でも大きなウェイトを占めているのが「高等植物と微生物の共生に関する研究」です。マメ科植物と根粒菌による共生窒素固定（根粒菌は空気中の窒素を固定して窒素源として植物へ供給する）の研究では、①窒素固定活性増強に関与する遺伝子の同定、②根粒形成に影響を与える光条件の研究等をおこなっています。そして後者の研究では、根粒形成が光の量（光合成量に影響）だけでなく光の質（波長）によってもコントロールされていることを明らかにしました。また、高等植物と菌根菌の共生（菌根菌は陸上植物の約80%と共生して土壌からのリン酸、窒素、水分などの吸収を助ける）では、マメ科のダイズ、ミヤコグサとナス科のトマトを材料に用いて、上記②と同様に共生効率に影響を与える光条件に関する研究を展開しています。これらの研究はどちらかといえば基礎研究に近く、現状では作物生産へ行かせるところまで到達していませんが、最終目標だけは見失わないように、研究室一丸となって研究を推進していかなければならないと考えています。

最後になりましたが、佐賀大学へお越しの際は是非お立ち寄りください。

図1 ミヤコグサを栽培中のガラス温室



◇留学生の近況

Course of Specialization: Resource and Environmental Science of Agriculture, Forestry and Fisheries.

Major Chair: Fisheries Science on Resources and Environment.

Name: Mahmoud Abdelhamid Omran Dawood (Egyptian).



Title of Research: Effect of Various Feed Additives on the Performance of Aquatic Animals.

Advisory Professor: Shunsuke KOSHIO (Kagoshima University).

First Vice-Advisory Professor: Manabu ISHIKAWA (Kagoshima University).

Second Vice-Advisory Professor: Hiroto MAEDA (Kagoshima University).

Hello everybody. I am Mahmoud Dawood, from Egypt. I was born on 3rd June, 1984. I did both Bachelor and Master of Science in Animal production department, Faculty of Agriculture, Kafrelsheikh University in 2006 and 2010 respectively. I am currently working as an assistant lecturer in the department of Aquaculture, Faculty of Fisheries at Kafrelsheikh University in Egypt.

During the first year of my PhD study I got a lot of experiences regarding to Japanese life style. Now I am in the second year of my study which is mainly focusing on the field of aquatic animal nutrition, especially using some feed additives in fish diets by the title of "Effect of Various Feed Additives on the Performance of Aquatic Animals ". For me Japan is the best country in the field of Aquaculture for many reasons, firstly, Japan has a huge experience in fish culture, my field of study very popular in Japan, and Kagoshima University has a faculty of fisheries which related directly to my study. I would like to express my hard greetings to my Professors (Prof. Dr. Koshio, Prof. Dr. Ishikawa, and Dr. Yokoyama). They are popular scientists, very active, scholastic guidance and helpful. I have helpful colleagues in my laboratory trying to help me. I am planning to get more classes in Japanese language to communicate effectively with Japanese life.

◇修了生より

平良英三

平成 17 年 9 月 鹿児島大学大学院連合農学研究科 修了

平成 18 年 4 月 琉球大学大学農学部 助手

平成 19 年 4 月 琉球大学大学農学部 助教



皆様、はじめまして。2003 年度入学の平良と申します。私は鹿児島大学大学院連合農学科を平成 17 年に修了した後、琉球大学農学部の助手（現、助教）として採用して頂き、現在まで所属しています。博士課程では光学的計測手法を使った植物成分の分析とその情報活用に関する研究に取り組みました。化学分析の実験を行うことに不慣れなため、さまざまな定量分析は私にとっては大変でした。論文作成についても経験がほとんどないために非常に苦労したのを覚えています。現在、博士課程に所属している皆様も、いろいろなご苦労があると思いますが、無事に学位を取得できるよう頑張ってください。

博士課程の間は非常に辛いことが多いのは事実ですが、思い返せばたくさんの人に支えられた時期でもあり、感謝の気持ちでいっぱいなことも事実です。私はサトウキビをテーマの材料として研究を行いました。その間、大学関係者だけでなく農家や製糖関係者、友人達に支えられました。いろいろな人に叱咤激励され、夜も遅くまでお酒を飲みながら翌朝は実験していた日を懐かしく思います。とくに、南大東島に長期間滞在して製糖工場内で調査をした時にはいろいろな思い出があります。調査実施のために、実際のサトウキビ品質の査定に関わる作業（夾雑物の除去や計量作業等）を現場の方に教わりながら（お叱りをうけながら）、3 製糖期間にわたって作業を体験しました。また、夏場にサトウキビ品質を調査した時の収穫作業は忘れられません。暑さを避けるために早朝から実施する収穫作業も、2m ほどのサトウキビ畑の中では、朝 8 時半ごろからは息ができないほどの無風と暑さで倒れそうでした。夏の大東島の炎天下では作業後に洗濯した作業着やジーンズがほんの数時間でカラカラになるほどの暑さだったのを覚えています。研究に悩んでいても、日中は作業や実験、夜は夜の付き合いを繰り返し、無我夢中で毎日を過ごしていました。いろいろな悩みも一緒に体を動かして作業をしてくれた現場の方や後輩、友人から励まされたことで、頑張ることができたのだと思います。研究面でも、国内外の学会やシンポジウムに参加する機会を与えて頂き、多くの研究者や博士課程の学生と知り合えたことも今では大きな財産です。海外の研究者や留学生と交流する機会も多く、たくさんの刺激を得ることができました。このような経験を与えて頂いた指導教員の先生には本当に感謝しています。

博士課程在中の皆様も研究だけでなく、コミュニケーション、プライベートなことなど悩みはつきないかもしれませんが、自分の可能性を信じて、この時期を満喫して欲しいと思います。最後になりますが、皆様の研究の発展と飛躍を心からお祈り申し上げます。

◇学会賞等受賞



所属：鹿児島大学農学部

職名：教授

氏名：榎井和朗

学 会 賞 名：農業農村工学会学術賞

学会賞受賞研究題目：農業用水資源としての地下水および湖水における物質動態に関する一連の研究

受 賞 年 月 日：平成25年9月3日

[受賞内容]

本研究では、農業用水資源としての地下水および湖水における物質動態について、現地観測、実験および数値モデルに基づいた解析を展開し、清澄な水の確保と保全の観点から地域水資源管理に貢献することを目指したものです。地下水に関しては、ボーリング孔を設けた地下水流動実験装置を独自に構築し、地下水流速測定にレーザー光を適用、地下水流れに関する理論の妥当性を検証しました。また、地下水中での化学反応系溶質輸送や海水侵入の解析に関しては、地下で生じている現象を可視化するために、新しい物理モデルや数値モデルを提案しました。特に、地下ダムを模擬した遮水板を設置する実験では、多孔質媒体中への遮水板のスムーズな出し入れを工夫し、遮水板近傍の残留塩水が徐々に排除されるメカニズムを解明しました。密度変化を考慮した数値モデルによりこの排除過程を十分に再現することができ、実験と数値解析から考究した独創的な成果として国際的にも高く評価されました。

湖水に関しては、対象地域の貴重な農業用水資源である対象湖の熱・水収支を、観測に基づいて検討し、湖面蒸発量や湖底漏水量の定量化を試み、対象湖に固有の湖面・大気間の熱輸送特性を明らかにしました。本研究で対象とした温暖な気候条件下での解析はなく、国内外の湖水文学研究との比較からも有意義な成果といえます。以上は農業農村地域を巡る水に関わる研究であり、フィールドを対象とし、サイエンスとしての成果を常に意識して研究を遂行できたこと、および共同研究者ならびに関係機関に心から感謝いたします。





所属：Faculty of Agriculture, University of the Ryukyus

職名：Associate Professor

氏名：Mohammad Amzad Hossain

学会賞名：沖縄県研究奨励賞（自然科学）

学会賞受賞研究題目：亜熱帯島嶼における環境保全型作物生産技術およびウコン品種開発に関する研究

受賞年月日：平成26年1月23日

[受賞内容]：沖縄研究奨励賞は、沖縄協会の設立目的にある「沖縄の振興施策への積極的な協力」に関連し、これを推進する事業として、沖縄の地域振興に貢献する人材を発掘し、育成することを目指して、昭和54年7月に設置されました。奨励賞は、沖縄を対象とした将来性豊かな優れた研究（自然科学、人文科学又は社会科学）を行っている50歳以下の新進研究者3名以内に授賞対象としています。

自然環境を保全しつつ、効率的な農業生産体制を構築する為には、耕地生態系における植物の生育特性や物質生産のメカニズムを明らかにする事が必要だと考えます。私は沖縄島嶼におけるサトウキビ畑の強害雑草であるハイキビ (*Panicum repens*) を研究材料とし、その合理的な環境保全型除草技術を開発しました。また、園芸・工芸作物としてのウコン (*Curcuma* spp.) の栽培技術の開発や高収量性、高品質性のウコン品種（琉大ゴールド）を開発する事が出来ました。サトウキビ畑におけるハイキビの研究では、サトウキビの高密度植えは、除草剤を殆ど使用せずにハイキビの生育を抑制すると共に、サトウキビ収量を増加させる有効な作付け方法である事、更にハイキビは周年栽培可能な優れた牧草として利用可能な事、土壌流出防止にも有望な植物種である事がわかりました。加えて、ハイキビの積極的防除法も検討し、5種類の有効な除草剤の特定、それら除草剤の最適な組み合わせ、使用濃度、使用頻度を決定し、総合的除草法を確立するに至りました。ウコンの収量増加および有効成分の増加に係る栽培土壌、堆肥の種類、光条件、栽植条件、施肥条件及び収穫適期につき実証する事に努め、その中でウコンの生育や収量に及ぼす農業有機質資材の効果についても検討し、有機質資材は化学肥料の吸収効率を高め、化学肥料の使用量を減少させると同時に、ウコン根茎の収量を向上させる事を実証するに至りました。品種琉大ゴールドは在来品種に比べて草丈が短く、根茎が大きく数が少ない、栽培期間が45日も短く、収量も多い、薬効成分であるクルクミン含量が7~20倍高

い。これらの成果は、既述の食料生産の効率化を考慮した沖縄県をはじめ亜熱帯地域における環境保全型農業の構築に寄与するものと期待しています。今後の研究では、環境保全型農業システムの構築を前提に、ウコンや熱帯野菜などの主要品目との輪作、間作などによる農業生産上合理的な作付け体系の確立を更に追求して行きたいと思えます。また、ウコンの新たな有機栽培技術の開発、遺伝的多様性の解明、更なる品種改良に関する研究に邁進する所存であります。



受賞式の様子・写真左側がM. A. ホサイン

所属：佐賀大学

職名：准教授

氏名：北垣浩志

学会賞名：先端技術大賞・特別賞、日本農芸化学会トピックス賞

学会賞受賞研究題目：「ピルビン酸低減酵母の育種と低アルコール清酒製造への応用」他

受賞年月日：平成25年7月23日他

[受賞内容]

「独創性を拓く 先端技術大賞」は先端技術分野で活躍する若手研究者の独創性を育み、科学技術創出立国の実現の一助となることを目的として1987年にノーベル化学賞受賞者の故・福井謙一先生の協力を得て創設したもので、フジサンケイ ビジネスアイの主催、文部科学省や経済産業省、フジテレビジョン、産経新聞社、ニッポン放送の後援により運営しています。授賞式は東京都・元赤坂・明治記念館において、高円宮憲仁親王妃久子殿下御臨席の下行われました。



日本農芸化学会は1924年に設立され、会員数が約1万1000人である、農学系で日本最大の学会のひとつであり、食品や環境、発酵などの研究分野を網羅的にカバーしています。

日本農芸化学会トピックス賞は一般演題約2400題から社会的インパクト、農芸化学らしさ、科学的レベルなどの観点から、実行委員会が27題を選定するものです。

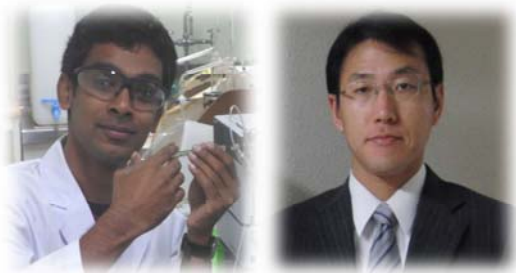
Course of specialization : Biological science and technology

Major chair : Bioscience and Biotechnology

Name : Lahiru Niroshan Jayakody (Sri Lanka)

Title of research : Engineering of yeast strains appropriate to production of bioethanol from hot-compressed-water-treated lignocelluloses

My ongoing Ph.D. research study, which has been performed under the supervision of Associate Professor Hiroshi



Kitagaki at Saga University, was awarded best three Technical papers of the 10th Canadian Renewable Fuel Summit (2013-December-4th, Montreal, Quebec, Canada) and best scientific presentation award in doctoral course, at the annual scientific meeting of the 20th -Kyushu branch of the Society for Biotechnology, Japan (2013 December 7th).

10th Canadian Renewable Fuel Summit (CRFS) on the theme of “Fuelling Growth and Innovation” was organized by Canadian Renewable Fuel Association (CRFA). CRFA (Founded 1984) works to promote and advance the use of renewable fuels for transportation. Our paper on “Engineering yeast *Saccharomyces cerevisiae* strain to the combinational inhibitory effect of key inhibitors in hot-compressed water-treated cellulose hydrolysate: critical step to break

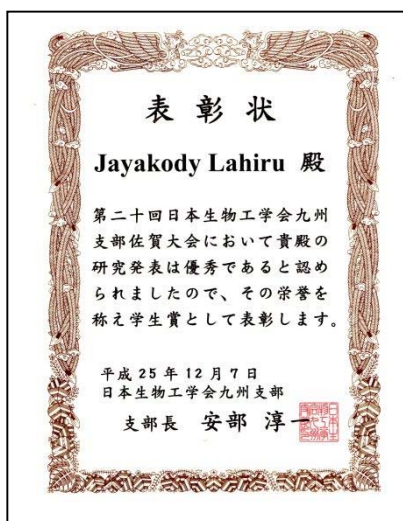


the barrier for industrial

cellulosic ethanol production” was among the top three technical papers out of more than 80 entries around the world in CRFS -2013 technical papers competition.

The organizing comity of 20th annual meeting of the Society of Biotechnology Japan (SBJ) –Kyushu branch recognized my presentation entitle of “Engineering of a yeast strain tolerant to fermentation inhibitor derived by lignocelluloses” as the best scientific presentation in Ph.D. division.

Up to date our research has claimed seven scientific awards in total. Which are reflected the scientific recognitions of invented novel approaches and knowledge in the area of second generation biofuel production.



所属：琉球大学農学部

職名：教授

氏名：田場 聡

学会賞名：日本雑草学会論文賞

学会賞受賞研究題目：植物寄生性線虫類に対するアワユキセンダングサ煮沸抽出液の抗線虫活性と抽出液の活性安定性

受賞年月日：2014年3月29日

[受賞内容]

「雑草研究」および「Weed Biology and Management」に掲載された原著論文を対象とし、雑草科学の発展、雑草の制御および応用利用技術への貢献において最も優れた論文に与えられる賞である。

本論文は、キク科雑草であるアワユキセンダングサが農作物栽培に被害をもたらす複数の重要な土壌有害線虫類（ネコブセンチュウ、ネグサレセンチュウおよびシストセンチュウなど）に対して殺虫や忌避活性を示すとともに、その活性が地域、土壌種、季節および生育ステージなどに左右されず高い安定性を持つことを示したものである。今後、実用利用の可能性が高く、雑草の応用利用技術に繋がるという理由から授与されたと考えられます。



平成25年度大学院連合農学研究科学位記授与式（前期）



杉元研究科長による祝辞

大学院連合農学研究科では、平成25年9月20日（金）、平成25年度鹿児島大学大学院連合農学研究科の学位記授与式（前期）が挙行されました。

今回学位を取得したのは課程博士7名（うち外国人留学生3名）です。当日は、杉元康志連合農学研究科長から出席した4名の一人一人に学位記が手渡され、「大学院で得た経験を糧に、世界に通用する研究者になることを期待しています」と祝辞が述べられました。

式には、長裕幸教授（佐賀大学農学研究科長の代理出席）、川本康博琉球大学農学研究科長、松岡達郎水産学研究科長、富永茂人農学研究科長をはじめ、指導教員や学位取得者のご家族も出席し、新しい博士の誕生を祝いました。

授与式終了後は、連合農学研究科棟玄関前で記念撮影が行われました。また、会場を移して祝賀会も行われ、出席者は和やかな雰囲気の中、将来の展望などについて歓談しました。



平成25年度 鹿児島大学大学院連合農学研究科前期学位記授与式 平成25年9月20日

平成25年度大学院連合農学研究科学位記授与式（後期）



前田学長から一人一人に学位記が手渡されました

平成26年3月17日（月）、平成25年度大学院連合農学研究科後期学位記授与式が挙行され、課程博士22名（うち外国人留学生13名）と論文博士1名の計23名に前田芳實学長から学位記が授与されました。

前田学長からは、「皆さまは、人類が抱える問題に真正面から取り組むことのできるリーダーであり、明日の社会の牽引者でもあります。ここで学んだことを活かして科学の進歩にはもちろんのこと、地域及び国際社会の豊かな発展に大いに貢献していただきたいと願っています」と告辞があり、続いて構成大学である佐賀大学の佛淵孝夫学長、琉球大学の大城肇学長からそれぞれ祝辞がありました。続いて、修了生を代表して鹿児島大学配属の山崎雅俊さんから「これから私たちは博士号を有する者として、慢心すること無く未知の事象に対して常に誠実で謙虚な姿勢で挑むことを心がけ、博士としての資格と責任を持って科学の発展とよりよい社会づくりに貢献していけるよう努める所存です」と謝辞がありました。

式には指導教員や学位取得者のご家族も出席し、新しい博士の誕生を喜びました。

【平成25年度の博士学位取得者 23名】

〈課程博士22名〉

- ・日本人9名
- ・外国人留学生13名（バングラデシュ2名、ウガンダ1名、ベトナム2名、トンガ1名、インドネシア2名、フィリピン2名、中国2名、スリランカ1名）

〈論文博士1名〉

- ・日本人1名



修了生を代表して謝辞を述べる山崎さん



全員で記念撮影

平成25年度大学院連合農学研究科10月入学コース入学式



杉元研究科長による入学許可

大学院連合農学研究科は、平成25年10月4日（金）、平成25年度鹿児島大学大学院連合農学研究科10月入学コース入学式を挙行了しました。今回の入学者は4名で、うち3名が外国人留学生。

杉元康志連合農学研究科長からの入学許可に続き、入学者を代表して鹿児島大学配属の樋口聡志さんが「21世紀を担う国際的な研究者を目指して高度な研究能力を培い、学識の修得に専念することを誓います」と入学者宣誓を行いました。

続いて、杉元研究科長から「皆さんの研究内容は異なりますが、目的は一つです。学位を取得しその後の将来に活かすことです。研鑽を重ねお互いに切磋琢磨しながら困難にめげずに学位論文を提出してください」と告辞がありました。

引き続き、構成大学を代表して、鹿児島大学大学院水産学研究科の松岡達郎研究科長から祝辞がありました。

【外国人留学生の国別内訳：3名】

ベトナム、タイ、バングラデシュ各1名

入学者宣誓を行う樋口さん



平成26年度大学院連合農学研究科入学式



前田学長の告辞

大学院連合農学研究科は、平成26年4月11日（金）に平成26年度入学式を挙行了しました。今年度は、社会人5名、6か国からの外国人留学生8名を含む計24名が入学しました。

前田芳實学長から24名の入学許可が行われた後、入学生を代表して鹿児島大学配属の矢野敏史さんが「21世紀を担う国際的な研究者を目指して、高度な研究能力を培い、学識の修得に専念することを誓います」と入学者宣誓を行いました。

前田学長からは、「大学で何を修得するか、様々に自らに問いかけ、目標を定め、高い志を持って日々の研鑽に励んでください。人類社会の持続的発展と素晴らしい地球のために皆さんの惜しみない努力と情熱が注がれることを心から祈念します」と告辞がありました。引き続き、構成大学の佛淵孝夫佐賀大学長、大城肇琉球大学長からそれぞれ祝辞が述べられました。

【外国人留学生の国内訳：8名】

ミャンマー1名、ジンバブエ1名、中国3名、タイ1名、エリトリア1名、バングラデシュ1名

宣誓を行う矢野さん



平成26年度入学式告辞（平成26年4月11日）

鮮やかな楠の若葉が春の光に輝き、まさに春爛漫の今日、御来賓及び関係者の方々にご出席を賜り、平成26年度の入学式を挙げていただけますことは、鹿児島大学大学院連合農学研究科にとりまして、大きな喜びであります。

本日、新たに本研究科にお迎えすることとなりました、24名の新入生の皆様に心から歓迎いたしますとともに、お祝いを申し上げます。

皆さんが入学し、研鑽する期間は、日本社会にとって、大変厳しい試練の時期であります。日本の経済不況が深刻化するなか、平成23年3月11日、東北地方太平洋沖の激しい地震と津波、その後の原発事故は、社会の最も基本である「生命の安全と生活の安定」を瞬く間に打ち砕きました。

鹿児島大学は、震災直後より、練習船かごしま丸により支援物資の輸送や、医療支援チームの派遣などをはじめ、被災地からの要請に対し、一刻の遅滞なく、大学の総力をあげて支援してまいりました。今後も、被災地が復興するまで、支援を継続いたす決意であります。

この日本の事態は、全国民の一人一人へ、人間の生と死、個人と社会、人にとっての豊かさや幸せ、あるべき社会、生き方を自問せよと鋭くせまっています。いま日本が直面している困難にあたって、皆さんも、この困難を直視し、今できることは何かを考え、実践しなければなりません。心豊かに安心して生活できる、持続発展可能な「希望ある成熟社会」を構築するために、次世代を担おうとする皆さんは、大変大きな期待と責任が課せられていることを自覚し、自己を真剣に見つめ、何のために大学に入学したのか、どのような人間になるべきか、そのために大学では何を修得するか、様々に自らに問いかけ、目標を定め、その実現のために力強い第一歩を踏み出していられることを期待しております。

本研究科は、設置されて27年目を迎え、佐賀大学、琉球大学、鹿児島大学が参画する農林水産学系博士課程の大学院で、西日本及び広くアジアを視野に入れた、熱帯・亜熱帯の特徴ある農業、林業、水産業と密接に関係した教育・研究が高く評価されています。

入学生24名の内訳は、生物生産科学専攻8名、応用生命科学専攻4名、農水圏資源環境科学専攻12名となっており、佐賀大学配属の学生が5名、琉球大学が5名、鹿児島大学が14名であります。入学生の中には社会人の方が5名おられ、仕事と研究を両立させながら研究に励むこととなります。また、新入生の中には6カ国から8名の熱い志を持った外国人留学生が来られておられます。

Congratulations! I would like to express my welcome to you.

ようこそいらっしゃいました。皆さんが本研究科で勉学・研究に研鑽を積まれるとともに、日本の文化・風土に触れ、国際的感覚を身につけられることを望みます。遠く祖国を離れ、言葉や生活習慣など、いろいろ慣れないこともあろうかと思いますが、指導教員をはじめ多くの人々と交流され、目的を成し遂げられることを祈っております。ここで、学ぶ楽しさ喜びを味わってください。

本研究科では、先端的生命科学を駆使した食料生産、生物資源の有効利用、農林水産学を取り巻く環境保全、食の安全・安心を基軸にした品種改良などの技術革新、国際化、地域貢献を目指して、それぞれの分野のリーダーとなる人材の養成を行っています。皆さんの研究テーマも、最先端の生命科学の研究から、農林水産業の基本となる研究、地域に密着した研究、生物資源の開発と有効利用に関する研究、持続可能な農業や資源再生などの環境保全に関する研究など、多岐にわたっています。この中から、世界に輝く研究が生まれてくると信じております。

これまでに本研究科より社会に送り出した810名の修了生は、日本だけでなく、世界各国で高い評価を受けて、農林水産学分野のみならず、さまざまな専門分野で活躍しています。皆さんも、研究面だけでなく、人間的にも成長し倫理観の高い研究者に成長していただきたいと思います。高い志をもって、日々の研鑽に励んでください。そして、3年後には、日本そして世界の新しいリーダーとして、ここを巣立っていかれることを心より期待します。人類社会の持続的発展とこの素晴らしい地球のために、皆さんの惜しみない努力と情熱が注がれることを、心から祈念して告辞といたします。

2014年4月11日

鹿児島大学長 前田 芳實

平成25年度全国連合農学研究科協議会

大学院連合農学研究科における教育及び運営等に関する諸問題を協議し、連合農学研究科の充実と発展を図ることを目的として、全国連合農学研究科協議会（以下「協議会」という。）が置かれている。

協議会は、構成大学全体会議と研究科長会議を包含し、構成大学全体会議は年1回、研究科長会議は年2回開催することとされ、さらに、研究科長会議は特に必要な場合は臨時に開催することができる」とされている。

開催時期は、基本的に6月に構成大学全体会議と研究科長会議を東京農工大学大学院連合農学研究科が幹事となり開催し、研究科長会議は10月又は11月に東京農工大学以外の5連大の持ち回りにより開催している。

なお、平成25年度の秋の同研究科長会議は、鹿児島大学の当番で実施されたところである。

全国連合農学研究科協議会規約

(昭和60年 5月28日制定)

(目的)

第1条 大学院連合農学研究科における教育及び運営等に関する諸問題を協議し、連合農学研究科の充実と発展を図ることを目的として、全国連合農学研究科協議会（以下「協議会」という。）を置く。

(組織)

第2条 協議会は、次の二種の会議を包含し、それぞれの会議は次の職にある者をもって組織する。

- 一 構成大学全体会議：各連合農学研究科の研究科長・専任教官及び各構成大学の農水産学部長（単科大学長を含む。）
- 二 研究科長会議：各連合農学研究科の研究科長及び専任教官

(委員以外の者の出席)

第3条 協議会が必要と認めたときは、議題により関係者の出席を求めることができる。

(会議の開催)

第4条 協議会の開催は、次のとおりとする。

- 一 構成大学全体会議は、国立大学農学系学部長会議の開催に合わせて、年1回開催する。
- 二 研究科長会議は、年2回開催する。ただし、特に必要がある場合は、臨時に開催することができる。

(庶務)

第5条 協議会の庶務は、東京農工大学大学院連合農学研究科が各構成大学の協力を得て処理する。

(雑則)

第6条 この規約に定めるもののほか、協議会の運営に関して必要な事項は、協議会が定める。

附 則

この要項は、昭和60年5月29日から実施する。

附 則（昭和63年7月1日）

この要項は、昭和63年7月1日から施行する。

附 則（平成3年6月7日）

この要項は、平成3年6月7日から施行する。

附 則（平成6年6月8日）

この規約は、平成6年6月9日から施行する。（連合農学研究科間連絡会議要項の改正。）

附 則（平成8年6月7日）

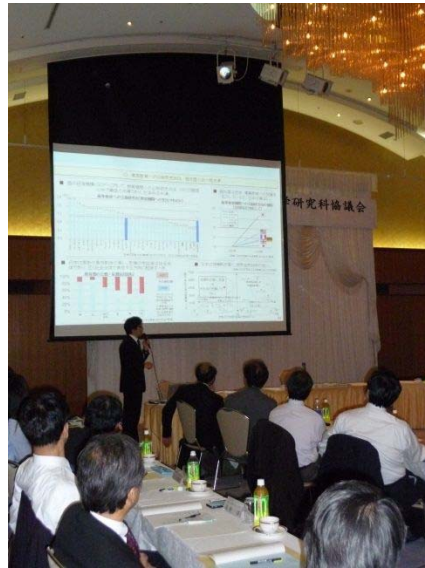
この規約は、平成8年6月8日から施行する。

附 則（平成11年6月4日）

この規約は、平成11年6月5日から施行する。



研究科長会議の様子（ウェルビュー鹿児島）



文科省高等教育局小谷課長補佐による説明

最近の秋の当番大学、開催日、実施場所は次のとおり

平成15年度	鹿児島大学	10.30（木）～31（金）	鹿児島東急イン
平成16年度	鳥取大学	10.28（木）～29（金）	ウェルシティ鳥取
平成17年度	岩手大学	10.27（木）～28（金）	ホテル安比グランド「花輪」
平成18年度	岐阜大学	11.16（木）～17（金）	ひだホテルプラザ
平成19年度	愛媛大学	11.1（木）～2（金）	メルパルク松山
平成20年度	鹿児島大学	10.30（木）～31（金）	ホテルレクストン鹿児島
平成21年度	鳥取大学	11.5（木）～6（金）	ホテルモナーク鳥取
平成22年度	岩手大学	11.4（木）～5（金）	いろり火の里「なの花ホール」（山形県）
平成23年度	岐阜大学	10.20（木）～21（金）	岐阜大学、ホテルグランヴェール岐山
平成24年度	愛媛大学	10.25（木）～26（金）	メルパルク松山
平成25年度	鹿児島大学	10.24（木）～25（金）	ウェルビュー鹿児島
平成26年度	鳥取大学	10.30（木）～31（金）	（予定）

連合一般ゼミナール「農学特別講義Ⅱ」

「農学特別講義Ⅱ」は、全国6つの連合農学研究科が合同で行う、集中講義形式授業であり、年2回（前期－日本語；後期－英語）開講される。SINET3による「多地点制御遠隔講義システム」を活用し、6連合農学研究科（18構成大学）が連携して、高い専門性、幅広い分野の講師を年度ごとに選定して開講している。

本特別講義は、前期連合一般ゼミナール、後期連合一般ゼミナールとして平成21年度から、全国6連合農学研究科連携のもと、選択科目として開講されたもので、全3日間で90分授業を12コマ用意している。

開催にあたっては、6連合農学研究科の持ち回りで、後期（英語）及び前期（日本語）を1サイクルとしている。本研究科においては、平成22年度後期（英語）及び平成23年度前期（日本語）を担当（企画立案・実施）したところである。なお、平成23年度後期（英語）及び平成24年度前期（日本語）は岩手大学が担当し、平成24年度後期（英語）及び平成25年度前期（日本語）は東京農工大学の担当、平成25年度後期（英語）及び平成26年度前期（日本語）は鳥取大学の担当、平成26年度後期（英語）及び平成27年度前期（日本語）は岐阜大学の担当となっている。

当該ゼミナールの講義名、修得コマ数及び付与単位に関しては、各連合農学研究科に委ねられているところで、本研究科においては、前期（日本語）に関しては、「農学特別講義Ⅱ（特別セミナー）」として開講し、後期（英語）に関しては、「農学特別講義Ⅱ（国際農学特別講義）」として開講している。また、単位に関しては、前期及び後期のそれぞれにおいて8コマ以上の修得で1単位としている。

平成25年度前期（日本語）は、6月19日（水）～21日（金）まで実施され、鹿児島連大から宗 伸明 佐賀大学農学部准教授と境 雅夫鹿児島大学農学部教授が講師を務め、また、平成25年度後期（英語）は、11月13日（水）～15日（金）まで実施され、鹿児島連大から、松岡達郎鹿児島大学水産学部教授と川満芳信琉球大学農学部教授が講師として参画している。前期日本語の講義はすべて日本語で、後期英語の講義はすべて英語で行われるもので、専門的知識を修得するとともに、他連大の学生と講義を共有することにより幅広い視野を持てるものと考えられる。

SINET3による「多地点制御遠隔講義」

全国6つの連合農学研究科を構成する全18
大学同時受講

(H25.11.15 「農学特別講義Ⅱ（英語）」の
講義；鹿児島大学大学院連合農学研究科
講義室)

左側のスクリーンは、講師を中心として、周りに18構成大学の講義室が映し出される。なお、常時7大学の講義室しか映し出せないため、交互に講義室が切り替わるようになっている。

右側のスクリーンは、講義資料が映し出される。



本特別講義の実施にあたっては、SINET 3を利用して18構成大学が同時受講するが、18構成大学にあつては、その事前作業が重要となる。当番大学主導の下、映像センターのサポートにより、講義の前日に各構成大学に映像及び音声が届いているかを確認し、不具合が生じていないか事前確認するものである。

以下は、事前確認用の画面であるが、最高16大学の講義室が映し出される。

なお、実際の講義に際しては、講師の映像を映し出す必要があることから、上記の画面のように最高7大学が映像センターのサポートにより交互に映し出されるようになっている。



全国18構成大学は、次のとおりである。

- (1) 岩手大学大学院連合農学研究科 (岩手大学、弘前大学、山形大学、帯広畜産大学)
- (2) 東京農工大学大学院連合農学研究科 (東京農工大学、茨城大学、宇都宮大学)
- (3) 岐阜大学大学院連合農学研究科 (岐阜大学、静岡大学)
- (4) 鳥取大学大学院連合農学研究科 (鳥取大学、島根大学、山口大学)
- (5) 愛媛大学大学院連合農学研究科 (愛媛大学、香川大学、高知大学)
- (6) 鹿児島大学大学院連合農学研究科 (鹿児島大学、佐賀大学、琉球大学)

中間発表会

本研究科概要には、本研究科のアドミッション・ポリシーを掲載するとともに、各専攻・連合講座毎に、学生が身に付ける学力、資質・能力や養成しようとする人材像等についての方針が記述されている。これらについては本研究科のホームページにも掲載し、広く学内外に周知している。学生の指導は、学生1名に対し、主指導教員1名と副指導教員2名の計3名の指導教員があたっているが、1年次の学生については「中間報告会」、2年次の学生については研究成果の「中間発表会」を行い、その達成状況を検証している。特に、2年次学生による中間発表会には、多地点遠隔講義システム(SINET3)により、各構成大学に配信され、学部生、修士学生及び教職員だれでも聴講することができるため、特に学生においては、他の学生の研究進捗状況を知る手段となり、自己研鑽の最適の要素となるものである。

中間報告会後の研究指導報告書には、1) 研究経過及び指導内容、2) 研究の進捗状況(学会誌への投稿状況及び3年以内に学位論文が提出できる可能性)、3) アドミッション・ポリシーについて(アドミッション・ポリシーに当該学生が沿っているか)の項目を設け、「中間発表会」終了報告書には、1) 研究の進捗状況(学会誌への投稿状況及び3年以内に学位論文が提出できる可能性)、2) 今後の指導方針の項目を追加し、研究教育指導達成状況をより具体的に把握できるようになっている。

平成25年度の中間発表会

平成23年10月入学者	H25年9月に実施
平成24年4月入学者	H26年3月～4月に実施



学生による中間発表会

連合農学研究科中間発表会時間割(平成23年10月入学者)

	平成25年9月27日(金)	平成25年9月30日(月)
10:30-11:10		インダ ウィディアストゥティ Indah Widiastuti 主 稲岡 司(佐) ①上野 大介(佐) ②小山 次朗(鹿水)
11:20-12:00		テルハワディゲダラ ラヒル ニロシャン ジャヤコディ Thelhawadigedara Lahiru Niroshan Jayakody 主 北垣 浩志(佐) ①林 信行(佐) ②玉置 尚徳(鹿農)
13:00-13:40	シンサト ヨシアキ 新里 良章 主 上野 正実(琉) ①鹿内 健志(琉) ②岩崎 浩一(鹿農)	テンク シア ウルクトリ Tengku Zia Ulqodry 主 野瀬 昭博(佐) ①鄭 紹輝(佐) ②川満 芳信(琉)
13:50-14:30	ハシモト ダイスケ 橋元 大介 主 中西 良孝(鹿農) ①高山 耕二(鹿農) ②尾野 喜孝(佐) 補 大島 一郎(鹿農)	ウォロ スリ スハルティ Woro Sri Suharti 主 野瀬 昭博(佐) ①鄭 紹輝(佐) ②川満 芳信(琉)

指導教員は、H25.6.1現在

発表20分・質疑応答20分とし、SINETで各構成大学に配信する
 発表場所(SINET設置教室)
 佐賀大学:農学部1号館南棟1階学生演習室
 鹿児島大学:連合農学研究科棟3階会議室
 琉球大学:農学部2階会議室
 学部学生・修士学生も聴講可とする
 知的財産管理の観点から、参加者には「研究発表会情報管理確認書(別紙様式)」に所属氏名を記載してもらう
 終了後、主指導教員は「中間発表会」報告書及び「特別演習(必修2単位)」の成績報告表を提出する

連合農学研究科中間発表会時間割(平成24年4月入学者)

	平成26年3月10日(月)	平成26年3月17日(月)	平成26年3月18日(火)	平成26年3月19日(水)
9:00-9:40	廣重 亮一 主 金城 一彦(琉) ① 井上 章二(琉) ② 西野 吉彦(鹿農)	高取 由佳 主 橋本 文雄(鹿農) ① 岡本 繁久(鹿農) ② 石丸 幹二(佐)		寺田 剛 主 坂巻 祥孝(鹿農) ① 津田 勝男(鹿農) ② 立田 晴記(琉)
9:50-10:30	西澤 優 主 モハド アムド 明仁(琉) ① 玉城 政信(琉) ② 鄭 紹輝(佐) 補 仲村 一郎(琉)	山城 隆明 主 侯 徳興(鹿農) ① 石橋 松二郎(鹿農) ② 小松 正治(鹿水)	アザィタ ビンチ アハド アウイ Azita Binti Ahmad Zawawi 主 芝 正己(琉) ① 井上 章二(琉) ② 曾根 晃一(鹿農)	吉田 朋弘 主 本村 浩之(鹿農) ① 寺田 竜太(鹿水) ② 立田 晴記(琉) 変更：3月31日(月)10:00-10:40
10:40-11:20	大場 裕太郎 主 野瀬 昭博(佐) ① 鄭 紹輝(佐) ② 川満 芳信(琉)	ショウ チョウ 章 超 主 侯 徳興(鹿農) ① 高峯 和則(鹿農) ② 和田 浩二(琉) 補 吉崎 由美子(鹿農)	ノール ジャナトゥ ナイム ビンティ ジャマリ Noor Janatun Naim Binti Jemali 主 芝 正己(琉) ① 井上 章二(琉) ② 曾根 晃一(鹿農)	
11:30-12:10	富永 淳 主 川満 芳信(琉) ① 上野 正実(琉) ② 野瀬 昭博(佐)	平良 直幸 主 屋 宏典(琉) ① 和田 浩二(琉) ② 侯 徳興(鹿農) 補 岩崎 公典(琉)	ベイズガ ベリト ホセ クリシチアン Veizaga Bellido Jose Cristhian 主 酒井 一人(琉) ① 中村 真也(鹿農) ② 柳井 和朗(鹿農)	
13:00-13:40	ウヰジ エコン ムディヤンセラゲ チヤミラ シヤカ ウヰジ エコン Wijekoon Mudiyanselage Chamila Janaka Wijekoon 主 井上 章二(琉) ① 金城 和俊(琉) ② 長 裕幸(佐)	日置 久美子 主 屋 宏典(琉) ① 和田 浩二(琉) ② 大塚 彰(鹿農)	カン キョウボン 姜 京範 主 不破 茂(鹿水) ① 江幡 忠吾(鹿水) ② シガキ フサコ ヒメスズ アサヒ(鹿水)	
13:50-14:30	ウヰリヤモル シーラ シアガバン Villamor Shiela Sibugan 主 野呂 忠秀(鹿水) ① 山本 智子(鹿水) ② 鈴木 廣志(鹿水)	平良 望 主 多和田 真吉(琉) ① 福田 雅一(琉) ② 神田 康三(佐)	外山 義典 俊介(鹿水) 主 越塩 俊介(鹿水) ① 石川 学(鹿水) ② 山本 淳(鹿水) 補 横山 佐一郎(鹿水)	
14:40-15:20	ジヨクム ベウ キトレイ Jokim Veu Kitolelei 主 佐野 雅昭(鹿水) ① 鳥居 享司(鹿水) ② 大富 潤(鹿水) 補 久賀 みず保(鹿水)	クワン ガウクワン ビン Nguyen Cao Quan Binh 主 多和田 真吉(琉) ① 本村 恵二(琉) ② 神田 康三(佐)	隠塚 俊満 次朗(鹿水) 主 小山 誠一(鹿水) ① 宇野 誠一(鹿水) ② 前田 広人(鹿水)	
15:30-16:10	フツ コウ 王 興 主 白武 義治(佐) ① 小林 恒夫(佐) ② 秋山 邦裕(鹿農)	フナム チー ベ トゥ Pham Thi Be Tu 主 多和田 真吉(琉) ① 本村 恵二(琉) ② 神田 康三(佐)	釜田 佳季 主 杉元 康志(鹿農) ① 向井 博之(カハライ) ② 渡邊 啓一(佐)	
16:20-17:00	マラワ カンカマラゲ ランダ アランガニ Malawara Kankanamalage Lasandha Irangani 主 白武 義治(佐) ① 小林 恒夫(佐) ② 田代 正一(鹿農)	ニユン チイ ホン ニン Nguyen Thi Hong Nhung 主 本村 恵二(琉) ① 安谷屋 信一(琉) ② 有馬 進(佐)	小野山 佳佑 主 岩井 久(鹿農) ① 中村 正幸(鹿農) ② 大島 一里(佐)	
17:10-17:50	神代 瞬 主 徳田 誠(佐) ① 早川 洋一(佐) ② 坂巻 祥孝(鹿農)	サライユト タイクワ Sarayut Thaikua 主 川本 康博(琉) ① 赤嶺 光(琉) ② 岡本 新(鹿農) 変更：3月19日(水)10:40-11:20	千秋 祐也 主 岩井 久(鹿農) ① 津田 勝男(鹿農) ② 大島 一里(佐)	
18:00-18:40	田中 弘毅 主 徳田 誠(佐) ① 野間口 眞太郎(佐) ② 辻 瑞樹(琉) 変更：3月6日(木)10:00-10:40	イン イン キョウ Yin Yin Kyawt 主 川本 康博(琉) ① 伊村 嘉美(琉) ② 中西 良孝(鹿農) 変更：3月19日(水)11:30-12:10		

指導教員は、H25.10.1現在

発表20分・質疑応答20分とし、SINETで各構成大学に配信する
 発表場所(SINET設置教室)
 佐賀大学:農学部1号館南棟1階学生演習室
 鹿児島大学:連合農学研究科棟3階会議室
 琉球大学:農学部2階会議室
 学部学生・修士学生も聴講可とする
 知的財産管理の観点から、参加者には「研究発表会情報管理確認書(別紙様式)」に所属氏名を記載してもらった後、主指導教員は「中間発表会」報告書及び「特別演習(必修2単位)」の成績報告表を提出する

TA研修会

本研究科では在学生在を修士課程及び学士課程の教育補助者（TA）あるいは研究補助者（RA）として採用し、教育研究指導者としてのトレーニングの機会を提供している。

平成 18 年度から TA の手引きを作成し、任務遂行のために必要な基本事項の周知を図ると共に TA 活動実施報告書の提出を義務づけ、さらに平成 19 年度からは教育者の資質を効果的に向上させるシステムの一環として、TA 活動の実態をより詳しく把握するためアンケート形式の TA 活動評価調査を開始した。TA を行った本人が提出する活動報告書ならびに TA による指導を受けた学生を対象とした活動評価調査の結果は、ファカルティ・ディベロップメント委員会で集計し、より質の高い TA の育成について継続的に検討している。

さらに、平成 20 年度から各構成大学で本研究科学生を対象とした TA 研修会を連大主催で行い、より質の高い TA の育成を図っている。

平成 19 年度から平成 24 年度のアンケート形式の TA 活動実施報告書によれば、TA を行ったことにより、将来学生を指導する際のトレーニングとして「とても役に立った」とする意見が圧倒的であり、「まあまあ役に立った」を含めると 9 割以上の学生が TA 制度について有意義であると感じている。

次表は、平成 18～23 年度の TA, RA の採用状況である。例年、ほぼコンスタントに採用されており、ここ最近の TA, RA の採用数は高い水準を維持している。また、TA 学生に TA 実施報告書や評価調査書を提出させ、さらには各構成大学で TA に関する研修を行い、資の高い教育補助者の育成を図っている。

平成 25 年度においては、6 月 28 日（金）に代議委員による TA 研修会を開催したところである。

TA と RA の構成大学別年度採用数

年度 職種 研究科	18		19		20		21		22		23		24	
	TA	RA	TA	RA	TA	RA	TA	RA	TA	RA	TA	RA	TA	RA
佐賀大学	33	4	27	4	23	3	24	4	27	3	32	3	28	4
琉球大学	13	4	20	7	23	5	25	7	17	3	13	6	18	4
鹿大農	24	5	25	5	21	4	17	3	18	3	16	3	12	8
鹿大水	5	5	6	3	6	5	7	8	6	7	11	5	11	6
宮崎大学	22	4	8	0	6	0	2	0	1		0			
合計	97	22	86	20	79	17	75	22	69	16	72	17	69	22



代議委員による TA 研修会

H25.6.28

英語論文作成指導セミナーを開催

連合農学研究科では、平成26年1月15日（水）及び23日（木）の両日、13:00～17:00の間、英文論文作成指導セミナーを開催した。

本セミナーは、学生の英語力向上を目指しているもので、平成23年度から開催され、今回が3回目となる。また、本セミナーは、遠隔講義システム（SINET3）を利用して実施され、佐賀大学及び琉球大学にも同時配信して行われ、両日とも8名の参加学生であった。

なお、今回は同セミナーの前に、水産学部板倉隆夫教授による「理系英語の基礎（英語の見える化ではじめてわかる英語）」と題した講演が実施された。これは、英語が読めない、訳せない、理解できないといったことを解消する目的で、基礎が重要であることを認識してもらうために行ったもので、学生にとっては、英語論文を作成するうえでも貴重な講話となった。

当日は、杉元連合農学研究科長の挨拶で開始され、前述の板倉教授による講話に引き続き、英文論文作成指導セミナーが、広島大学医歯薬学総合研究科河本 健講師を招き、日本語で行われた。学生は各自パソコンを持参し、指導を受けるもので、学生においては、学術論文、学位論文の提出が課されていることから、熱心に聞き入り、また、講師からマンツーマンのきめ細かな助言等を受け、非常に有意義なものとなった。

挨拶を行う杉元研究科長



板倉教授による「理系英語の基礎」講話



河本 健講師による英文論文作成指導セミナー



大学院連合農学研究科 ハラスメント防止のための講演会を開催

本学においては、本学職員に対するハラスメント防止のための意識啓発をさらに推進するため、今年度において、幹部職員を対象とした研修や教育職員を対象としたアカデミックハラスメント防止のための講演会（各学部教授会等を利用し、全学で6回）が開催されました。この中には、連大を構成する本学農学部及び水産学部での講演会も含まれておりますが、連大教授会は、本学農学部、水産学部の教員の他、佐賀大学農学部及び琉球大学農学部の教員が加わることから、年2回（9月及び2月）しか開催されないことから、本学での講演会の対象外とされたところです。

そこで連大では、佐賀大学及び琉球大学の教員も含めた連大教員に対しても当然のことながらハラスメント防止のための意識啓発を推進する必要があることから、連大主催の下、平成26年2月14日（金）の連大教授会の開催前に、本学保健管理センター所長の伊地知信二教授を講師に招いて、ハラスメント防止のための講演会を開催しました。

伊地知教授から、相談事例からみたハラスメントの実態と題して資料に基づき、実際の相談内容や対策・解決法などについて報告がありました。

当日は、鹿児島大学農学部、水産学部、佐賀大学農学部及び琉球大学農学部の教員約110名の参加があり、充実した講演会となりました。

本学保健管理センター所長の伊地知信二教授による講演



《参考 これまでの連大のハラスメント防止関係措置》

- ・ 鹿児島大学大学院連合農学研究科ハラスメント防止規程を制定
- ・ ハラスメント相談員名簿を連合農学研究科ホームページ及び学生専用のホームページに掲載し、教職員、学生に周知徹底
- ・ 学生何でも相談窓口に関する細則を制定し、相談窓口を設置し、連合農学研究科ホームページ及び学生専用のホームページに掲載し、教職員、学生に周知徹底
- ・ (予定) 新入生向けにハラスメント関係のパンフレットを配布する。なお、連大生には留学生が多いことから英文でのパンフも作成する。

大学院連合農学研究科 男女共同参画推進セミナーを開催

本学第2期中期計画である「男女共同参画事業を推進するために、組織体制の整備や行動計画の策定等を行う。」の一環として、連合農学研究科では平成25年度年度計画におきまして、「男女共同参画事業を推進するために「男女共同参画セミナー」を開催する。」を掲げておりました。

この年度計画を達成するため、連合農学研究科主催の下、平成26年2月14日（金）の連大教授会の開催前に、連大代議委員（本学男女共同参画推進センター副センター長）の岩井 久農学部教授を講師に招いて、男女共同参画推進セミナーを開催しました。

岩井教授から、パワーポイントにより鹿児島大学農学部における男女共同参画推進の取組や男女共同参画推進に係る意識啓発の必要性、今後の課題などの報告がありました。

当日は、鹿児島大学農学部、水産学部、佐賀大学農学部及び琉球大学農学部の教員約110名の参加があり、充実したセミナーとなりました。

連大代議委員（本学男女共同参画推進センター副センター長）の岩井 久農学部教授による講演



鹿児島大学水産学部

板倉 隆夫

門脇 秀策

平成25年度の農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）は、鹿児島大学水産学部が担当校となり、2013年11月6日から8日の3日間、鹿児島市のアーバンポートホテルで開催された。学生参加者は66名であった。本セミナーでは、研究科構成大学の学生が一堂に会して学外講師6名による講義を受講するとともに、専攻セミナーとポスターセッション（情報交換セミナー）では各自の研究に関する情報交換と討論がなされた。ここに、学生に対するアンケートの調査結果も含めて報告する。

● 専攻セミナー（1日目、開講式の後）

全学生が4班に分かれ、1年生が各自の研究内容を発表して意見交換を行った。4班に分けた上でも分野は様々で、司会を担当した学生も運営に戸惑う場面が見られた。言葉の壁も大きい。学生間の交流は情報交換セミナーと交流会で十分ではないかという声もあった。

● 交流会（1日目夕方）

多くの参加者があり、盛況であった。もっと時間が欲しかったという声もあった。事前にホテル側と交渉した結果、料理も飲み物（持ち込みで費用を節約）も十分であった。

● 情報交換セミナー（ポスターセッション、2日目午後）

コアタイムを2班に分ける一昨年からの方法ならびにポスター賞を継承した。学生の評価は、意義がある75%、少しは意義がある22%と非常に高かった。今回は茶菓とソフトドリンクを提供し、好評であった。

● セミナー（A～F、2日目、3日目）

講義内容の評価については、学生自身の専門分野との関係があって一概に言えないが、使用された言語に関する学生の評価を、今後のために以下にまとめる。括弧内の数字は、（ほぼ理解できた、半分程度理解できた、理解できなかった）のそれぞれの回答数を示す。数字は、日本人学生と留学生の回答を合わせたものである。

セミナーA：(23, 25, 3名) 講義（日本語），スライド(英語)

講演が日本語であったので、日本人学生には理解しやすかった。留学生は、スライドが英語であったので助かったという声と、やはり理解し辛かったという声があった。

セミナーB：(28, 15, 8名) 講義(英語)，スライド（英語＋日本語）

スライドに日本語が挿入されていたが、それで理解できた学生と、それでも理解できなかった学生がいた。分析的な内容であったためか、理解できた学生とできなかった学生に分かれた。

セミナーC：(24, 24, 3名) 講義(英語)，スライド（英語）

スライドに日本語の補足が欲しかったという声があった。

セミナーD：(15, 29, 7名) 講義（日本語），スライド(英語)

留学生からは、スライドが英語であったのが助けになったが、講義が日本語であったので理解できなかったという声があった。

セミナーE：(26, 22, 3名) 講義（英語＋日本語），スライド(英語＋日本語)

講義もスライドも英語＋日本語であり、話し方も含めて理解しやすかったという声が多かった。

セミナーF：(13, 28, 10名) 講義（英語），スライド(英語)

スライドに英語の補足が欲しかったという声があった。

以上、今回は、英語あるいは日本語に偏る講義がほとんどであった。講師を依頼する時に、学生は日本

人と留学生がほぼ半々で、両方の言語に堪能な学生があまりいないことを伝え、講義は英語＋日本語（まず英語で、次に日本語で補足が望ましいと考えられる）、スライドは英語でも良いが難しい専門用語については日本語で補足するようお願いすべきであろう。また、内容については、学生が様々な分野（さらに基礎から応用まで）に属していることも伝えておく必要がある。

● その他

今回は、鹿児島市の中心街に近いホテルを、会場として初めて利用したが、アンケートでは、良いという回答が80%と、概ね好評であった。日程に余裕があれば、近くの水族館の見学ツアーを企画することも可能であったかもしれない。

最後に、本セミナーにおいて、ご挨拶下さった杉元研究科長と松岡水産学部長、講師の依頼と講義の前の講師紹介などにご協力下さった代議委員の先生方にお礼申し上げます。事務の皆様にも大変お世話になりました。水産学部総務係の石川さん、永田さん、学生係の川畑さんは、何度も会場のホテルに足を運び、入念な打ち合わせをして下さいました。セミナー当日は、連大の事務の方々からサポーターをいただき、たいへん心強く感じました。皆様に心より感謝申し上げます。

26年度に佐賀大学農学部で開催される本セミナーがさらによいものになることを期待し、25年度の報告を終える。



一般セミナー開講式（杉元連合農学研究科長挨拶）



当番校を代表して松岡水産学部長挨拶



専攻セミナー



専攻セミナー



講義風景



講義風景



講義風景



講義風景



ポスターセッション



ポスターセッション



ポスターセッション



水産学部配属の留学生による謝辞



優秀ポスター賞授賞式



優秀ポスター賞授賞式



水産学部板倉教授（代議委員）によるアンケート調査



次回当番校の佐賀大学野間口教授（代議委員）の挨拶

平成25年度 鹿児島大学大学院連合農学研究科・農学特別講義 I (一般セミナー) 日程表

時 日付	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	
11/6(水)												
						13:30	14:15	15:00	17:00			19:00
						受 付	開 講 式 ・ 写 真 撮 影	専攻セミナー	交 流 会			
11/7(木)												
	9:00	10:30	10:40	12:10	13:10	14:40	14:50	16:20	16:30	18:30		
受 付	セミナーA 「ナノ病原体の 植物寄生戦略」 難波 成任 東京大学大学院 農学生命科学研究科 教授	休 憩	セミナーB 「パプアニューギニア高地社 会における「持続的発展」 について」 梅崎 昌裕 東京大学大学院 医学系研究科 准教授	昼 食	セミナーC 「水田農業の環境動態 -モニタリングとモデリング の応用」 渡邊 裕純 東京農工大学大学院 農学研究科 教授	休 憩	セミナーD 「家畜の遺伝的改良におけ るゲノム情報の有効性」 鈴木 啓一 東北大学大学院 農学研究科 教授	休 憩	情報交換セミナー (ポスターセッション)			
11/8(金)												
	9:00	10:30	10:40	12:10	12:40							
受 付	セミナーE 「魚類筋肉形成の分子 メカニズム」 越智 陽城 山形大学医学部 助教	休 憩	セミナーF 「バイオナノカプセルが拓く新し いDDS (薬物送達技術)、 ワクチン、診断薬の世界」 黒田 俊一 名古屋大学 大学院生命農学研究科 教授	閉 講 式								

Program for the 2013 Agriculture I (General Seminar) of the United Graduate School of Agricultural Sciences, Kagoshima University

時 日付	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	
11/6 (Wed.)												
						13:30	14:15	15:00	17:00		19:00	
						Registration	Group Photo & Opening Ceremony	Presentation of Research Reports		Reception		
11/7 (Thu.)												
	9:00	10:30	10:40	12:10	13:10	14:40	14:50	16:20	16:30	18:30		
	Registration	セミナーA 「Plant parasitic strategies of nano-pathogens」 Shigetou Namba (The University of Tokyo)	Break	セミナーB 「“Sustainable Development” in Papua New Guinea Highlands Society」 Masahiro umezaki (The University of Tokyo)	Lunch	セミナーC 「Fate and transport of rice pesticide in the environments -applications of monitoring and modeling」 Hirozumi Watanabe (Tokyou University of Agriculture and Technology)	Break	セミナーD 「The effectiveness of the genome information in the genetic improvement of the livestock animal」 Keiichi Suzuki (TOHOKU UNIVERSITY)	Break	Poster Sessions		
11/8 (Fri.)												
	9:00	10:30	10:40	12:10	12:40							
	Registration	セミナーE 「Molecular mechanisms of fish muscle development」 Haruki Ochi (YAMAGATA UNIVERSITY)	Break	セミナーF 「Development of Novel Drug Delivery System Carriers, Vaccines, and Diagnostics by Utilizing Bio-nanocapsules」 Shun'ichi Kuroda (NAGOYA UNIVERSITY)	Closing Ceremony							

鹿児島大学大学院連合農学研究科

農学特別講義 I (一般セミナー)に関するアンケート

本年度の農学特別講義□ (一般セミナー) の参加学生は 66 名であり、アンケートを提出したものは 51 名で回収率は 77.3%でした。以下に集計結果及び回答のあった意見を全て掲載します。

1. セミナーの理解度について About understanding the seminars.

セミナーA

回答者		51 名
ほぼ理解出来た	almost all	23 名(45%)
半分程理解出来た	about half	25 名(49%)
理解出来なかった	Didn't	3 名(6%)

(意見)

- As the lecture was in Japanese had difficulties following subject specific terms. However the lecture notes were in English and it helped a lot

- The title was interesting but lecturer had presented in Japanese. I cannot understand.

- It was delivered in Japanese language and thus I did not understand them all.

- Very interesting. Lot of interesting information were obtained.

- 日本語の講演だったことと、スライドも平易な英語でまとめられていたことで、理解しやすかったです。

- The topic presented was too specific and very different from my study background.

- 日本語での講義であり、講義内容も興味をひかれるものであったため、理解することができた。

- 研究に関する内容も話し方も、とても参考になり、良い講義だった。

- Excelent

- 内容がとても興味深かった。

- As it was new field little bit defficult to understand.

- テングス病の原因たんぱく「TENGU」の話が面白かった。ポインセチアの事例は初めて聞かせていただいて、非常に興味を持った。

- Interesting topic.

- Able to learn parasitic of nano-pathogens

- language barrier

- It was very interesting and useful to me

- 日本語での講義で非常にわかりやすかった。また、研究の意義、目的および成果の利用価値について具体性があり、理解しやすかった。

- 資料内容、説明のテンポなど、非常にわかりやすい説明だった。観葉植物などの感染など身近な内容もあり興味深く聴講できた。

- 面白い講義でした。意見も特には無いです。

- interesting

セミナーB

回答者		51 名
ほぼ理解出来た	almost all	28 名(55%)
半分程理解出来た	about half	15 名(29%)
理解出来なかった	Didn't	8 名(16%)

(意見)

- Message was delivered very well. Very interesting lecture.

- Very good topic and excellent lecture delivery.
- Very impressive lecture, loved it the most.
- 講演・スライド共に英語でしたが、スライドの要所には日本語が挿入されており、十分理解することができました。
- Very interesting topic and a global issue.
- The topic was light and easy to understand
- 講義資料には日本語で書かれている部分があったが、講義が英語で行われたため理解することができなかった。
- Excelent
- 内容が難しかったためあまり理解できなかった。
- It was very nice presentation and understood well because the lecture was delivered from English and relate my research field.
- サツマイモ耕作とブタ飼養の推移と現状は分かったが、生態学的・社会文化的障害との関連性については、あまり理解ができなかった。
- My personal favorite. Even though I am a fisheries major, I am interested in anthropological studies.
- This research is related to agriculture practices in my country. It was very interesting.
- interesting and easy to understand
- it was good because i learned by this lecture the real implementary of sustainable development
- 研究成果については理解できた。しかし、その利用価値、実際等まで講義して頂ければ分かりやすかった。
- 特にありません。
- 私の性格上、何かを分析及び解析したで終わる研究は向かないなあと感じました。
- interesting

セミナーC

回答者		51名
ほぼ理解出来た	almost all	24名(47%)
半分程理解出来た	about half	24名(47%)
理解出来なかった	Didn't	3名(6%)

(意見)

- The research area was close to my own research.
- The research was related to my research and lecturer was explained in English and very clear.
- Time demanding lecture topic and very good delivery.
- スライドに日本語のフォローが欲しかったです。
- Interesting topic and a global issue.
- 講義は英語で行われたが、聞きやすい英語で講義内容も興味深くある程度理解することができた。
- Excelent
- 内容が難しかったためあまり理解できなかった。
- It was very important lecture. I got much information through attending this lecture.
- 図1に示された概念図については、わかりやすくよく理解できた。
- I gained more understanding on the rice production practices in Asian countries particularly Japan.
- Learn new informations about rice pesticide and its use and impacts on paddy field and environment.
- easy to understand and interesting
- I learned many new informations in this lecture but i think the time was limited so i think it need more time
- 研究の成果、利用方法が具体的であり、理解しやすかった。

- ・過去、シロアリ防除のための土壌薬剤散布の地下水等の汚染問題もあり、興味深く聴講できた。
- ・個人的には面白いと思ったが、分野の違いに苦しんだ。
- ・interesting

セミナーD

回答者		51名
ほぼ理解出来た	almost all	15名(29%)
半分程理解出来た	about half	29名(57%)
理解出来なかった	Didn't	7名(14%)

(意見)

- ・現在の家畜の遺伝的改良の内容がよく理解でき、興味深かったです。
- ・As the lecture was in Japanese had difficulties following subject specific terms. However the lecture notes were in English and helped a lot
- ・The lecture was about livestock and for breeder but the title was interesting so I can get some knowledge from this lecture.
- ・It was delivered in Japanese language and thus I did not understand them all.
- ・Too much of information at once, therefore a little difficult to grab everything at once.
- ・ゲノム関連のバックグラウンドがある人でないと研究の詳細まで理解することは難しいと思います。
- ・The topic presented was too specific and very different from my study background.
- ・畜産分野であり、日本語での講義で理解しやすかった。
- ・Excelent
- ・内容が難しかった。
- ・Although this lecture is very important i am not familiar this field. But i got known some knowledge.
- ・一時期、イネの育種においてもQTL解析が流行していたが、最近ではあまり聞かれなくなってきた。家畜と同様にSNP情報の利用などが期待される。
- ・Very informative lecture.
- ・An interesting seminar about genetic improvement of livestock.
- ・language barrier
- ・this lecture was interesting because we know the effectiveness of the genome information in the genetic improvement of the livestock animal
- ・唯一の畜産分野であり、自分の専門分野でもあったため、十分に理解できた。
- ・遺伝子については、全くといって差し支えないほど触れることのないテーマであるが、なんとか聞くことは出来た。
- ・以前勉強していたので何とかついていけた。面白い講義だった。
- ・interesting, but because of difference in major I could not understand much.

セミナーE

回答者		51名
ほぼ理解出来た	almost all	26名(51%)
半分程理解出来た	about half	22名(43%)
理解出来なかった	Didn't	3名(6%)

(意見)

- ・筋肉形成について基礎的な内容がだいぶ部分であったので、少し物足りなさを感じました。応用的な内容も含めていただければ興味深くなるのではと思いました。
- ・Very specific. Would have been much better if the lecture elaborated on the applications of the techniques/ outcome
- ・The lecture was not related to my research so it was difficult to understand.

- Very good presentation and new topic for me.
- 今回の講義の中で最も理解しやすかったです。日本語と英語を併用した話し方とスピード、スライド構成は非常に分かりやすく、自分もこのようなプレゼンができればと思いました。
- The topic presented was too specific, but the presenter used many interesting photos, very effective to improve our understanding.
- 英語と日本語を交えた講義および講義資料であったため、理解しやすかった。
- 講義内容はわかりやすかった。
- Excelent
- 説明がわかりやすく理解できました。
- We could understand well and was useful lecture.
- ゼブラフィッシュのモデル生物としての有用性がよく理解できた。Adaxial cell (遅筋由来細胞) の存在を初めて知ることができた。
- Excellent research.
- 非常に勉強になりました
- Informative lecture about molecular mechanisms of fish muscle development.
- easy to understand but complicated
- it was interesting
- 研究内容は理解できたが、その応用、利用価値まで講義して頂ければ分かりやすかった。
- 特にありません。
- 分子生物学の基本を学べた。私の研究分野に通じるものがあったので役立った。
- interesting, but because of difference in major I could not understand much.

セミナーF

回答者		51名
ほぼ理解出来た	almost all	13名(25%)
半分程理解出来た	about half	28名(55%)
理解出来なかった	Didn't	10名(20%)

(意見)

- 内容が膨大で、大部分が英語だったので理解が進まなかったです。
- Was very interesting
- The title was interesting. I can get some knowledge but not there are more contents in this lecture. Lecturer not have enough time to explain.
- Outstanding lecture presentation and most modern innovation of biological science.
- 大まかな内容は把握できましたが、研究の詳細までは押さえられませんでした。研究の具体例の紹介は日本語のスライドでフォローが欲しかったです。
- The topic presented was too specific and very different from my study background.
- The lecture was very interesting and informative.
- 講義内容が私の理解を超えていることに加え、講義が英語で行われたため理解することができなかつた。
- もう少し話す内容を絞っていただきたいと感じた。英語の上、内容がたくさん詰め込まれていて、ついていくのが大変に感じた。
- Very Excelent
- 内容が難しかった。
- i would like to Thank for getting valuable extra information about post doctoral scholarship.
- 非常に専門性が高く、内容的には理論ではなく、SFを見せられているようでした。しかし、本研究の内容がたいへん高度で有用なことは理解できました。
- Very impressive effort to conduct the researches presented.
- 時間が足りないのがもったいなく感じました

- Important lecture as it discusses about gene/drug delivery system using hepatitis B virus-derived bionanocapsules.
- complicated but interesting
- It is very useful but i suggest it need more time
- 研究内容は理解できましたが、講義の話す内容、ボリュームが多く、英語を理解するのに苦労した。
- 量的に絞っていただいた方がより解り易かったかと思う。
- 流石に3回目にもなると理解がスムーズだった。
- the lecture gave too professional knowledge in short-time, so it is difficult to understand.

2. セミナーの企画・運営等について About planning and management.

セミナー日程（時期）について

回答者	51名
良い Good	46名(90%)
悪い Bad	3名(6%)
その他 Others	2名(4%)

(意見)

- Transit hours between check-in (or leave luggage) at hotel need to be consider.
- 特に問題ありません。
- 研究の日程が立てにくいので、開催決定の連絡を早めに行ってほしい。
- 今回、学会の日程と近かったため大変だった。
- いいと思います。
- 特に問題ありません。
- 学会が近かったのもう少し離れているとよかった。
- The timing is enough for a student
- i managed to be on time daily
- It was very good i think that
- 今回は特に支障はありませんでした。社会人の場合は所属する会社などでそれぞれ事情が異なるため、今回程度の余裕を持って頂けると調整もし易いかと思います。
- タイミング次第。参加したい学会と予定が重ならなければ問題ないと思う。

セミナー日程（日数）について

回答者	51名
良い Good	44名(86%)
悪い Bad	2名(4%)
その他 Others	5名(10%)

(意見)

- 社会人なので、これ以上長いと厳しいです。1.5日（初日は午後のみ、2日目は全日）だとなおさら良いです。
- I hope there are more discussion sessions, so that we can share research experience with other friends.
- The number of days is just enough to handle the given topics
- 良いと思う。
- もっと長い時間他大学所属の学生と交流がしたかった。
- やや長いようにも感じましたが、九州新幹線のおかげで、交通はスムーズでした。
- もう少し、日程を長くして他の大学の方々と交流を深めたかったです。

- Number of days is enough for the seminar and not too long
- it need some more time to discuss more of studies we are conducting
- The number of days was good
- これも社会人特有の意見になるかと思いますが、初日の開始時間を1時間程度遅らせて頂けると、遠方からの移動にも余裕ができて助かります。
- 飛行機移動と講義が詰まっていたので少し疲れました。もう少し余裕をもったスケジュール調整を希望します。

セミナー会場について

回答者	51名
良い Good	41名(80%)
悪い Bad	6名(12%)
その他 Others	4名(8%)

(意見)

- 会場が少し狭く、スライドが見えにくかったです。
- Too compact. This environment was not good for this kind of long lectures. Location for last year lecture in Okinawa was very good.
- in 2012, seminar setting was in a big hall (+comfort) which can occupied more than expected student
- 基本的には良いと思うが、スクリーンが小さいと感じた。
- The seminar room was too small and with less ventilation. More like a High School environment.
- アクセスも良く、広さも適当だったと思います。
- The lecture room was smaller compared to last year in Okinawa.
- もう少し広いとありがたいが、セミナーを行う上では十分だと思う。
- 郡元キャンパス付近から行くとなると、大変だった。
- 屋根が低く感じました。
- Always severe smoking smell in the lobby. Seminar hall was not good for educational matters. m
- 大変良かった。
- 会場の目の前に、食料品店があったので、昼食の心配がなく、よかったと思います。
- Better if the projector screen was bigger.
- もう少し駅に近い方がありがたいと思いました。
- Nice place to conduct seminar
- logistics and facilities are convenient
- It was very nice
- 特に問題はありません。強いて言うと、もう少し画面が大きいと後方からでも見やすかったのではと思う。

3. 専攻・情報交換セミナーについて About the workshop

セミナーグループの分け方(専攻別)について

回答者	51名
良い Goodl	44名(86%)
改善すべきである。 Needs some improvements	7名(14%)

(意見)

- ・あまりにも分野がばらばらすぎると感じた。(3班)
- ・no Q & A session. at least to get suggestion from professors or other college
- ・ベストではないと思うのですが、かと言ってこれ以外に妥当な分け方があるとも思えません...
- ・担当学生に司会を務めてもらうことを事前に通達した方がよいと思います。
- ・I think it is better to separate as the course wise.
- ・よいと思います。
- ・特に問題ありません。
- ・Able to meet similar students conducting similar research
- ・related fields have common interests
- ・it was very important because it was related to the study with the group division(according to the courses)
- ・個人的には接点の無い内容が多いため、結果的に専攻別である必要を感じない。人数についてはもっと少人数の方が良いかもしれません。一度今回の半分程度で試してみるのも良いかと思えます。
- ・人数次第。

セミナープレゼンテーションについて

回答者	51名
意義がある It was very useful.	32名(63%)
少しは意義がある It was somewhat useful.	16名(31%)
その他 Others	3名(6%)

(意見)

・他の研究分野について、基本的な知識の欠如から、理解が及ばないケースもあったが、工夫されたプレゼンのおかげで理解できる点もあった。

・Have to be more organized and specific. Some people had worked hard to make the presentation about the research while some explained about favorite food etc with one slide about the title of the research. There is no point in spending time for these kind of activities

・2.3年生はする必要があるのでしょうか？ポスターがあるので必要ないと感じた。スライドもないのでしゃべることが限られてしまう。

・If presentation in English it is very useful.

・正直あまり存在意義が感じられませんでした。ポスターセッションと交流会で必要十分な気がします。

・今回は座長をやらせていただいたが、座長に連絡があっても良いのではないかと。準備をすればもう少し良いものになったかもしれない。

・I think there must be the format to same every one. If not, candidates are trying to show their colors in unexpected manner.

・大変勉強になりました。

・プレゼン用のPCは、演者が操作しやすいように、演者の横に置いてあるものでは・・・？

・Student discuss very briefly in 5minutes about their studies

・some conducted in japanese were hard to follow

・it is very important because it is like a practice to preparing my self and to understand some other plans to other participants

・広く刺激のある内容に触れることが出来、非常に良いものと思う。個人的には資料または講義のいずれかは日本語でお願いしたい。

・意義は無いと思う。結局5分程度で終わるので、その後に繋がるものが無い。

セミナーポスターセッションについて

回答者	51名
意義がある It was very useful.	38名(75%)
少しは意義がある It was somewhat useful.	11名(22%)
その他 Others	2名(4%)

(意見)

- ・全く違う研究分野でも、些細な共通点から議論を交わすことができた。
- ・ Was useful. However organizing is not satisfactory. There was a strange size specification for poster (90 x 180 cm) for those who followed the specification, the boards were also not enough in size. Most had not followed the specifications. these things hadn't been considered in poster evaluation.
- ・非常に良いと思います。
- ・ If poster prepare in English is very useful.
- ・ It is better to allow the researchers to present their poster for few (3-5) minutes in front of all audiences at a time.
- ・本セミナーのメインイベントだと思います。異分野の人の研究を知り、コメントを貰うことができる貴重な機会です。
- ・ All posters were not in the same format. eg; some are short. some are too long..etc.
- ・他の学生の研究を知ることが出来て大変勉強になりました。
- ・特に意見はありません。
- ・ I think should be specific criteria for judging. Judging the points should be 50% from students and 50% from sensei.
- ・もう少し、時間がほしいと感じました。
- ・ Poster presentation is very good activity
- ・ increases our knowledge and good opportunity to share experiences
- ・ i learned many things because some posters were very good and offered the data by simple methods
- ・内容についてはわからないものがほとんど。まとめ方などは参考になった。
- ・研究に役立つ情報が得られたので有意義だった。

セミナー交流会について

回答者	51名
意義がある It was very useful.	33名(65%)
少しは意義がある It was somewhat useful.	9名(18%)
その他 Others	9名(18%)

(意見)

- ・分野がかぶる人が少なく、人見知りなので少し気まずい...(笑)
- ・ Did not participate
- ・値段もちょうどいいんじゃないでしょうか。
- ・ I made lots of new friends.
- ・ did not attend

- Did not participate due to poor health condition.
- みんなで集まったからには行ったほうがよいと思います。
- I was not able to attend the reception party.
- 参加していないため、意見はないです。
- I think it is much better to change as discussion as trouble shooting strategy of the own research..etc
- 交流が出来てとてもよかったです。
- I was unable to attend it.
- 特に意見はありません。
- 他の大学の学生さんと交流ができたが、先生方とはなかなかお話しできなかったのがもったいないと感じました。
- Able to meet and talk to other students and teachers.
- very impressive, good time to get to know each other
- it is very important because we can speak and know many new participants from other universities
- 参加しませんでしたので、分かりません。
- 各個人の参画姿勢によるところなので、機会・場の提供という点で意義がある。
- 食事が去年よりも豪華だったので嬉しかった。

4. セミナーの在り方等についてどのようなことでも結構ですので、意見、感想等を記入して下さい。

(意見)

• ポスターセッションについて、あまり関係がなさそうな分野の方から質問があったり、自分とは無関係な分野の方に質問できたり、自由な感じが大変よかった。講師の方々のプレゼンも印象深く、自分の研究や発表に役立てられることがあると思う。

• 他の大学・学科や学年の方々とともに学ぶことができる貴重な機会をいただきました。講義内容は幅広い分野ですが、興味深く拝聴いたしました。ポスターセッションでの意見交換も参考になりました。講師の先生を始め、事務局の皆様へ改めて感謝申し上げます。

• In overall the seminar was good. It helped to widen the knowledge of advancing science. However some lectures were too specific in content. For a group of participants with a mixture of specializations generalized lectures could have been more useful. For example the history of that particular field, current situation, future, practical applications etc. It was very helpful that airfare, bus-fare and hotel reservations were provided by UGS for students from other universities. I was not happy about the specifications for the poster preparation. The size was strange and many had problems in designing posters to that size. For those who made to the specified size the space was not enough. Those who specify these should consult those who regularly make posters and decide on the size. What you specified was a maximum size, then it should be clearly stated in the specifications. Thank you

• 1.講義に関しては英語日本語で統一するのは難しいのですが、あまりにもばらばらだったと感じます。せめてスライドかしゃべる方かどちらかを英語、どちらかを日本語に統一するとかしてほしい。専門があまりにかけはなれている講義は英語でされてるとまったくついていけないところもある。また、講師の先生方の研究歴や専門の内容を聞くことが有意義であることは十分承知であるのだが、講義の半分を人材養成セミナーのような博士をとってからどのような道があるか、博士を持っていることのメリットデメリット、博士の就職などに向けたものにしてはどだろうか。このような話をもっと聞きたいという人も多いと思う。2.準備に関して。今回会場係を担当しましたが、「詳細は、当日説明いたします」とメールにあったのに、何一つ説明の無いままセミナーが始まった。また、メールにはPC操作程度と書いていたが、実際にはスライドやパソコン、スクリーンの準備、さらには当日の進行も担当しなければならず、まったく連絡されていないことばかりだった。特に進行をしなければいけないのであれば、留学生も多いので、進行するときに使えるような英語などを調べてしっかり準備しておきたかった。来年

会場係をする人には当日の仕事内容をあらかじめ伝えておき、スムーズに回るようにしてほしい。このような要望は昨年アンケートの回答にも書いてあったが、まったく改善されておらず、本当に目を通していいのか疑問に感じた。今後はこのようなことがないようにしっかり対応してほしい。

- Overall is OK. but I can not hear in Japanese so I think that preparing documents , especially the poster in English will be very useful.

- The United Graduate School of Agricultural Sciences, Kagoshima University provided us with Shinkansen train tickets and hotel fares. It was a great help for us. I am grateful to them for this reason.

- Lecture related to Forest/Forestry-engineering is really appreciated. Introduction of response-card was a good start! could be a model for research that using questionnaire method.

- Would have appreciated more if at least there was one lecture regarding directly fitting to my subject.

- 講演について： オーラルとスライド共に英語で講演される方が多かったのですが、その場合、スライドの要所を日本語でフォローしてもらえるとありがたいです。自分の専門と分野が大きく異なる内容であることがほとんどであるため、英語だけの理解はなかなか難しいです。専攻別プレゼンについて：現状ではあまり意義が感じられません。一年次の段階では具体的なデータもそれほど出てきませんし、それほど議論は深められません。研究紹介・議論は二年次のポスターセッションでできますし、学生同士の交流・親睦は交流会で深められます。

- I suggest that the progress report session could be extended for a small group discussion, so that we can change ideas and share research experiences; and not just limited to presentation of research progress. In general, most of the topics presented were important and interesting. However, due to different academic background, and lack of basic knowledge in the specific area made it quite difficult for me to understand some of the lectures. I personally think that it would be more beneficial if students could be grouped based on their related major.

- 今年度は旅費と宿泊費を支出していただいたので、社会人博士コースの人間としては経済的に大変助かりました。予算が厳しいかもしれませんが、可能であれば継続していただくと助かります。

- The seminar is a great help for students but there are some topics that was not very easy to understand because the speaker/s was/were discussing in Japanese. Though the slide print out help in understanding the lecture.

- 自分の周りに日本人の博士学生数が少なく、交流する機会も多くないため、このセミナーで他大学所属の日本人学生（もちろん留学生も）と交流・意見交換が出来て、大変刺激になりました。半年に一回程、同期の学生と集まる機会があればいいなと思いました。

- 専門分野の深い方が講義を下さってありがとうございました。また、機械があれば受講したいです。

- It was very good seminar and very used full for me. No comment for problems. Thank you very much for staff and organizer, you all did the great job. I fell happy since departed from Okinawa until came back with happy and safety.

- 普段の研究生活では出会わない人々や研究テーマ、考えに接することのできる貴重な講義であるように思う。また、世界的に活躍されている講師の先生方との出会いは、研究者という職業に対する憧れの気持ちを強くさせた。

- 留学生が多く英語での講義がメインなので勉強になる反面、日本人学生は少し理解が追い付かないかと思う。

- 今回のセミナーでは、同じ分野の他大学所属の方とも交流でき、また違う分野の方とも知り合いになれる機会となったので良かった。

- ポスター発表のとき四つのところしか回りませんでした。

- 開催地域（大学）ならではの施設等の見学があればよかったです。

- The most important part of this seminar was 6 lectures. If it is possible to held on SINET, I think it is much better for the private financed students as well as low income (below 100000 yen or with very small scholarship)students, even though university paid for Air ticket,bus ticket and accommodation. Poster session is also important but financial problems are most critical for the very low income students as i mentioned. This may be not for all but some can be frustrating their

daily routing with such money issues.

• It was really a good experience that we could listen to the lectures conducted in different fields by the well-know professors. Expect to get more chance and time to talk with the lecturers next time.

• 交流会の時間が少なかったのも、もっと時間をとって欲しい。

• 宿泊ホテルとセミナー会場がもう少し近い（あるいは同じ）方が、ポスターケースや荷物運搬の負担が軽減されるような気がしました。

• 今回は講義のほとんどが英語で少々やりづらかった。せめて、話す言語は英語でよいので、スライドに日本語を交えてほしかった。

• Otsukaresamadeshita! It was a very successful seminar. All the lecturers who presented their respective topics were excellent. Please keep up the good work.

• 6人の先生が講義された内容は、自分にとっては非常に難しく、十分な理解を得ることはできなかった。しかし、自分にとって未知なる世界をのぞくことができたのは、大きな刺激であり、また、大きなモチベーションとなった。

• It is very good. Thanks to seminar conduction, I have change to make friends, widen my knowledge, enjoy food and shochu it is very tasty. I love the seminar.

• あと一日ほど日程があれば、より他大学の方々と交流ができるのもったいないと感じました。

• This seminar was very useful and we had a chance to visit to Kagoshima.

• I had opportunity to meet other students with other field of works. That made me to share my knowlege with the others. I was also happy to visited Kagoshima for the second time.

• It was a wonderful and successful seminar and thank you for this good opportunity.

• It should continue with some improvements, it is a nice event where we meet with professors and students from various places and fields of specialization, share experiences, exchanging notes and building the network. It is all impressive.

• The Agriculture 1 (general seminar), it was very interesting and I learned many new information by the professors at the lectures.

• 様々な分野での講義であり、農業全体を踏まえた考えを身につけることができたと思います。

• 準備・運営とも非常にスムーズでした。スタッフの皆様お疲れさまでした。一方、専門外のテーマも多く多少なり自身の準備が出来ればと感じています。

• 様々な分野の研究の話を知ることができて有意義でした。

• The Agriculture I general seminar, hold annually, is not only a good opportunity for us to approach interesting lectures, useful experiences and science study results from professors, coming from top-ranking universities of Japan, but also a chance for us to meet, talk and exchange about issues of study, life, culture and customs,...ect in our countries. I express my deep gratitude to all teachers and officials of The United Graduate School of Agricultural Sciences, Kagoshima University in general, and Faculty of Fisheries, Kagoshima University in particular for the very enjoyable and thoughtful seminar.

佐賀大学農学部

石丸 幹二

稲岡 司

野間口眞太郎

平成25年8月1日（木）から2日（金）の二日間、佐賀大学農学部を会場に「人材養成学生支援セミナーI 2013」が開催された。講演内容は、SINETにより、構成3大学のそれぞれの会場に双方向配信された。参加学生は、連大学生12名（鹿大農2、鹿大水2、佐大3及び琉大5）、連大以外の学生8名（鹿大農3及び佐大5）で合計20名であった。その他、来佐いただいた代議員の先生や連大事務職員の方をはじめ、多くの教職員に参加していただいた。

セミナーの講演は1日目及び2日目とも各4演題あり、佐賀大学農学部の卒業生や教員を含めた8名の演者の貴重なお話であった。各講演の簡単な内容は以下の様であった。

講演1 下田 敏史 氏（農研堂取締役）による「大学における農業人材の育成」

株式会社農研堂は、佐賀大学農学部の卒業生が中心となって設立した大学発のベンチャー企業であり、アイスプラントの野菜化、栽培技術の開発と「バラフ」の商品名でのブランド化販売を行なっている。講演では、農研堂の取組みや経営課題への対応状況事例を紹介いただき、大学に期待される農業人材育成についての提言であった。ベンチャー企業の経営においては、卒業大学との人脈面やソフト面（技術研究）での密接な連携が不可欠であることを強調された。

講演2 原田 淳 氏（県立広島大学教授、キャリアセンター長）による「ストレスとストレスマネジメント」

現代社会は心理的、社会的ストレスに満ちている。企業や社会で活躍するためには、ストレスを上手にコントロールすることが重要である。講演では、心身相関的アプローチとして、呼吸法等の技法による自律神経のバランス調整法を紹介いただいた。大学院生としての研究生活、人間関係や就職活動等における様々なストレスの中で、感情や思考のコントロールによるリラクゼーションの重要性を示された。

講演3 川畑 弘 氏（広島大学若手研究人材養成センター、特任教授）による「ライフプランという視点から継続的なキャリア成長を考える」

大学院生は、卒業後のキャリアを考える場合、自身の専門分野や能力、スキルを第一としたプラン（就職）を考えがちである。講演では、博士課程を経てから社会人となる場合のキャリアプランとして、もっと長いスパンの人生後半のライフプランも考慮に入れたキャリア設計の必要性を教授いただいた。働くということ、高齢社会の課題、「お金」という視点からの設計戦略等、考えさせられる視点の多い内容であった。

講演4 河野 廉 氏（名古屋大学ビジネス人材育成センター、特任教授）による「自分が主役となるキャリアパスって!？」

キャリアを考える場合、仕事だけでなく生き方、社会環境に視点をおいて考える大切さを示された。社会的ニーズとして、中小企業が採用する農学博士の現状や大学研究者であるアカデミックポジションの環境などを理解すること、また長い人生全てがキャリアであることを自覚して、自分を知ることの重要性を認識できる内容であった。

講演5 水谷 悟 氏（キリンK.K基礎技術研究所長）による「企業における先端研究とは？～自らの経験から～」

水谷氏ご自身が企業の研究所で取組んできた最先端の研究開発について紹介していただいた。大学教員としての研究とは違った企業での技術開発のお話であったが、研究の楽しさや夢を感じることができる内容であり、大学院生にとっても非常に励みになる講演であった。大学教員にとっては、少しうらやましいところもある成功例であった。

講演6 鐘ヶ江 靖史 氏（元 文部科学省科学技術政策研究所）による「博士の就職活動と企業からの期待」

博士人材の就職活動の実態、企業が求める博士人材について紹介していただき、大学院生として考える「イノベーション」とは何かについて議論した。博士に求められる能力は、日々レベルアップしていることを鑑み、博士課程学生として研究生活をおくるうえでの覚悟（死ぬ気でやるくらい真剣な）や心構えの必要性を教えていただいた。

講演7 奥井 隆雄 氏（「博士の生き方」管理者）による「科学者・技術者と社会とのかかわりの歴史」

過去から現代にわたって、科学者・技術者が社会とどのようにかかわってきたか、その歴史的な流れを詳細に解説していただいた。将来に向けて、研究者として、また一般人として科学に携わる場合、社会とどのようなスタンスをとるべきかを考えるきっかけになる講演であった。

講演8 李 應喆 氏（佐賀大学農学部講師）による「日本における大学教育と留学生のストレス～自らの経験から～」

佐賀大学農学部教員であられる李氏からは、ご自身の経験をもとに、留学生の生活上のさまざまなストレスや問題について紹介いただいた。日本における留学制度やグローバル人材育成制度における現状分析と問題点、また教育の質保証のあり方等についてご提議いただいた。

上記8講演の中で語られた多くのsuggestionは、若い大学院生にとって、将来の研究生活プランを考える上で非常に有益であった。また、講演を拝聴した（既に高齢に達した？）教職員面々にとっても、より実体験として共感・納得することが多々あり、自身を見つめ直す意味でも勉強になる（考えさせられる）機会であった。

1日目の講演後には、杉元研究科長の司会のもと、当日出席されていた6名の講師の方とのディスカッションの時間も設けられ、各大学の出席学生との活発な討論が行なわれた。講師の方からは、学生に対する貴重なアドバイスをいただいた。

なお、連大事務職員の方からは、本稿で使用しているセミナーの様子の写真（佐賀大学で撮影）を拝借した。また、鹿大会場では、医学部の学生も聴講しており、特に民間企業の話（講演5）に興味をもっていたとの情報もいただいた。

平成26年度の「人材養成学生支援セミナー」は、鹿児島大学で開催される。本ニューズレターが発行されるときには既に終了していると思われるが、博士課程学生だけでなく、就職を考える修士課程や学部学生、また多くの教職員に参加していただきたい。



杉元連合農学研究科長による開会挨拶



佐賀大学渡邊農学部長による当番校挨拶



全体討論会



SINETを使った講義



SINETを使った講義

平成25年度 鹿児島大学大学院連合農学研究科「人材養成学生支援セミナー I 2013」日程表

		8:50 9:00	10:20 10:30	11:50	13:00	14:20 14:30	15:50 16:00	17:40		
1日目 8月1日(木)	開 講 挨 拶	講義1 「大学における農業人材の育成」 下田 敏史 農研堂 取締役	休 憩	講義2 「ストレスとストレスマネジメント」 原田 淳 県立広島大学 キャリアセンター長(教授)	昼 食	講義3 「ライフプランという視点から継続的なキャリア成長を考える」 川畑 弘 広島大学若手研究人材 養成センター 特任教授	休 憩	講義4 「自分が主役となるキャリアパスって!？」 河野 廉 名古屋大学ビジネス人材 育成センター 特任教授	休 憩	総合討論会 交流会
		9:00	10:20 10:30	11:50	13:00	14:20 14:30	15:50 16:00			
2日目 8月2日(金)		講義5 「企業における先端研究とは? ~自らの経験から~」 水谷 悟 キリン K.K 基盤技術研究所長	休 憩	講義6 「博士の就職活動と企業からの期待」 鐘江 靖史 元 文部科学省科学技術 政策研究所	昼 食	講義7 「科学者・技術者と社会とのかかわりの歴史」 奥井 隆雄 「博士の生き方」管理者	休 憩	講義8 「日本における大学教育と留学生のストレス~自らの経験から ~」 李 應喆 佐賀大学農学部講師	閉 講 挨 拶	

開催場所: 佐賀大学農学部1号館南棟1階学生演習室 / 各大学 SINET 設置教室(鹿児島大学連合農学研究科3階会議室 琉球大学: 農学部2階会議室)

人材養成学生支援セミナー I 2013

Human Resource Development Seminar 2013

講 義 概 要

Proceedings

平成 25 年 8 月 1 日(木)～2 日(金)

August 1(Thu.)～2(Fri.), 2013

鹿児島大学大学院連合農学研究科

The United Graduate School of Agricultural Sciences, Kagoshima University

目次 Contents

講義番号 Lecture No.	講義題目及び講師名 Lecture Title & Name of lecturer	日時 Date	頁 Page
1	「大学における農業人材の育成」 Fostering agricultural professionals at university 下田 敏史(農研堂 取締役) Toshifumi SHIMODA (Director Nokendo co., Ltd)	2013.8.1(Thu.) 9:00～10:20	P1
2	「ストレスとストレスマネジメント」 Stress and Stress Management 原田 淳(県立広島大学キャリアセンター長 (教授)) Jun HARADA (Career Center, Prefectural University of Hiroshima)	2013.8.1(Thu.) 10:30～11:50	P 4
3	「ライフプランという視点から継続的なキャリア成長を考える」 A Career Design Strategy of Postgraduate Young Researcher: The Life-Planning Point of View 川畑 弘(広島大学若手研究人材養成センター 特任教授) Hiroshi KAWABATA (Young Researchers Education Center, Hiroshima University)	2013.8.1(Thu.) 13:00～14:20	P7
4	「自分が主役となるキャリアパスって!？」 With the career path that oneself becomes the leading role? 河野 廉(名古屋大学ビジネス人材育成センター 特任教授) Yasushi KAWANO (Business Capacity Development Center Division of Human Resource Development Nagoya University)	2013.8.1(Thu.) 14:30～15:50	P 9
5	「企業における先端研究とは? ～自らの経験から～」 How should advanced research be conducted in a corporate lab?: A Personal Experience 水谷 悟(キリン K.K 基盤技術研究所長) Satoru MIZUTANI (Central Laboratories for Key Technologies, Kirin Co., Ltd.)	2013.8.2(Fri.) 9:00～10:20	P 11
6	「博士の就職活動と企業からの期待」 Jobseeking of doctoral graduates and expectations from companies 鐘ヶ江 靖史(元 文部科学省科学技術政策研究所) Yasushi KANEGAE (Formerresearcher at the National Institute of Science and Technology Policy)	2013.8.2(Fri.) 10:30～11:50	P 13
7	「科学者・技術者と社会とのかかわりの歴史」 The relation between scientists/engineers and society 奥井 隆雄(「博士の生き方」管理者) Takao OKUI (Website manager “The way of life of a doctor”)	2013.8.2(Fri.) 13:00～14:20	P 15
8	「日本における大学教育と留学生のストレス～自らの経験から～」 University Education and Stress Among International Students in Japan: As Viewed from My Personal Experience 李 應喆(佐賀大学農学部講師) Lee, Eung Cheol (Faculty of Agriculture, Saga University)	2013.8.2(Fri.) 14:30～15:50	P 18

大学における農業人材の育成

株式会社農研堂

取締役 下田 敏史

(講義概要)

日本においては高齢化や後継者不足により農家戸数の減少、就業人口の減少が続いているが、農業法人数は増加している。農業産出額に占める農業法人のシェアは約3割を占めており、日本農業における農業法人の役割が高まっている。また、農業法人の事業規模拡大や経営の多角化などの成長・発展に応じて、必要とされる技術力やマネジメントの高度化が進み、その担い手である従業員の能力の質的向上が求められ、人材育成は農業法人の経営課題となっている。

このような中、佐賀大学大学院農学研究科(修士課程)では、文部科学省の平成21年度「組織的な大学院教育改革推進プログラム」において採択された「高度な農業技術経営管理者の育成プログラム」が平成22年度から開始されている。農業技術経営管理学コース(農業版MOT教育プログラム)においては、高度な専門職業人の養成を目的とし、近年の農業法人や集落営農組織体の増加、平成21年の農地法の改正に伴う企業の農業への参入及びWTOやFTAなどの変化する地域的・国際的な農業・社会情勢に柔軟に対応でき、アジアの途上国を含む地域農業生産と農村の振興に向けてリーダーシップを発揮する農業のプロフェッショナルの育成を目指している。

一方これまでに、大学院等において農業の専門知識を習得した人材が、農業現場に携わった例は少ないが、佐賀大学農学部卒業生が中心となって平成19年に設立した株式会社農研堂は一つの事例といえる。佐賀大学農学部では1999年から開始した南アフリカ原産の植物アイスプラントの野菜化研究において栽培技術を開発した。農研堂では本野菜の生産販売を主として経営を開始し、栽培技術の開発を担当した卒業生がアイスプラントの生産を担当して、大学発のアイスプラントをバラフ(スワヒリ語で氷、結晶の意味)の商品名で販売してブランド化を図っている。近年では、加工品の開発にも力を入れており、食品製造業者との連携によってバラフ麺や菓子類が発売され、化粧品製造企業との連携によってバラフ配合化粧品の商品化も実現した。以上のように、大学で習得した知識や開発技術を活かした自立型農業経営モデルの確立を目指して取組みを進めているが、今後の事業規模拡大や経営の多角化などに向けて人材育成は重要な課題となっている。本講義では、農研堂のこれまでの取組みや人材育成等の経営課題への対応状況を一つの事例として紹介するとともに、大学に期待される農業人材育成について考察したい。

Fostering agricultural professionals at university

NokendoCo., Ltd.

Toshifumi Shimoda, Director

(Outline of the lecture)

In Japan, while the numbers of farm households and the proportion of the population engaged in farming have declined in recent years, the number of corporations in the agricultural sector has increased. Agricultural corporations now have about a 30% share of national agricultural output and an important role in agriculture. In addition, as these corporations have expanded, diversified, and grown, a high level of technological and management capability has come to be required; thus, the skills of employees have to be improved. Therefore, fostering of skilled and knowledgeable agricultural professionals has become an important issue in the management of agricultural corporations.

Against this backdrop, the Graduate School of Agriculture at Saga University started to offer a master's program for professional agricultural technology managers in FY 2010, which was adopted as a "Program for Enhancing Systematic Education in Graduate Schools" in FY 2009 by the Japanese Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT). The special program, named the "Agricultural Management of Technology (MOT) Training Course," aims to provide agricultural professionals with high-level knowledge and skills so that they can work flexibly in the field in the context of (1) the recent growth of agricultural corporations and organizations for community-based group farming; (2) the entry of more companies into agriculture with the revision of the Agricultural Land Law; and (3) the changing regional and international circumstances of agriculture and society, such as the increasing importance of the World Trade Organization (WTO) and the advent of free trade agreements (FTAs) affecting agriculture. Further, these professionals show leadership in fostering production in agricultural villages and rural areas, in not only Japan but also developing countries in Asia.

Currently, there are only a few people with graduate-level agricultural expertise engaged in the front lines of agriculture in Japan; one organization made up of such people is Nokendo, which was founded by graduates of the Faculty of Agriculture at Saga University, with some others, in 2007. In 1999, a laboratory at the faculty started research on the cultivation of the common ice plant, a plant native to South Africa, and established a cultivation technique for it. Nokendo started a business in the production and sales of the ice plant, is now branding it as a university-developed plant called "Barafu," which means "ice"

or “crystal” in Swahili. The Nokendo employee who had developed the cultivation technique as a graduate student has been and still is in charge of the cultivation of the plant. Recently, Nokendo has been putting effort into developing products using processed Barafu; noodles and cakes containing Barafu have been put on the market in cooperation with food manufacturers, and skincare preparations containing it have also been successfully commercialized in cooperation with a cosmetics company. As mentioned above, although Nokendo has continued efforts to establish an independent agricultural management model that makes full use of knowledge gained and technology developed at universities, fostering human resources to support business expansion and diversification is an important issue to be addressed. This lecture will introduce what Nokendo has done and is doing to foster agricultural professionals and how it intersects with the production of these agricultural professionals at universities.

ストレスとストレス・マネジメント

県立広島大学 キャリアセンター

原田 淳

(講義概要)

現代社会は心理的・社会的ストレスに満ちている。仕事の重圧、人間関係、過密で忙しい社会環境など要因はさまざまである。ストレスへの対処が適切でないと、心身の健康や対人関係に影響をおよぼし、個人や組織の生産性を低下させることになる。したがって、企業や社会で活躍するためには、ストレスを上手にコントロールすることが重要となる。本講義では、ストレスとストレスの影響について解説し、ストレスに対する認知のあり方、ストレスに対処するための具体的な技法を紹介する。

ストレスは人によって受け止め方が異なっており、当人にとって些細なストレスであれば睡眠を含む休養や運動・趣味による気分転換によって解消が可能である。一方、当人にとって過大なストレスである場合は肉体や精神に大きな影響をおよぼし、心身症や精神疾患の要因となることもある。心理的・社会的ストレスの場合は、原因となるものごとや状況を脳が認知することによって「いやだ」、「つらい」、「焦り」といった感情が生じ、さらに、その信号が視床下部に伝達されることによって自律神経に影響しストレス反応を引き起こす。認知することが発端となるので、思念が対象から解放されないと何度もストレス反応を繰り返すことになり、やがては心身が消耗し疲弊することになる。しかし、認知を変容させることができれば、ストレスを軽減することが可能となる。そこで、東洋思想が示唆するストレスに対する認知のあり方を解説する。

ストレスによって肉体や精神に不調をきたすのは、自律神経のバランスが乱れるためである。自律神経のバランスを整えるには、心身相関的アプローチが有効である。心身相関的アプローチとは、身体的な動きや感覚を意識化することで自分を客観視し、心理的な変化をもたらす手法である。簡単な例をあげれば、不安や焦りを感じているときに呼吸に意識を集中して、大きく息を吸ってゆっくり吐ききるといった動作を数回繰り返し、気分を落ち着かせるという方法がある。不安や焦りによって交感神経優位になっても、時間をかけてゆっくり息を吐くことによって自律神経のバランスを回復することができるのである。本講義では心身相関的アプローチの技法について紹介する。具体的な技法は、1)ブリージング・エクササイズ、2)シンプルテクニック、3)アイソメトリック運動、4)呼吸法、5)瞑想法である。これらの技法に取り組むことによって、身体や呼吸の状態を深く意識化することができ、やがて、感情や思考をコントロールすることが可能となる。技法を習得し継続することにより、リラクセーションを感じやすくなり、集中力の向上が期待できる。

Stress and Stress Management

Career Center, Prefectural University of Hiroshima

Jun Harada

(Outline of the lecture)

Today, we experience significant amount of psychological and social stress everywhere. There are various factors that cause stress, including pressure from work, human relationships, and an overcrowded or busy social environment. Handling stress inappropriately can negatively affect mental/physical health and interpersonal relationships, thereby reducing the productivity of the individual and/or organization. Therefore, it is important to handle stress appropriately in order to successfully work in a company or thrive in society. In this lecture, I will explain stress and its effects, introduce ways of recognizing it, and discuss specific coping techniques for handling stress.

How one perceives stress differs from one person to the next. If the perceived stress is small, one can relieve it by resting and/or by participating in recreational activities such as exercise and hobbies. On the other hand, if the stress is too much for an individual, it can strongly affect mental and physical health, which sometimes causes psychosomatic and/or mental disorders. When under psychological/social stress, an individual's cerebrum recognizes the situation that causes him or her to have such negative feelings as, "I do not like this," "This is so hard," and "I feel impatient." The signal sent from the cerebrum is then transferred to the hypothalamic region where it affects autonomic nerves, thereby causing a stress reaction. Recognition of a stressor is the initial stage of the process, and if the person does not stop thinking negatively about the stressor, he or she may experience stress reactions repeatedly, and will ultimately break down as a consequence. However, if an individual can recognize his or her stress, it can be reduced. I explain how to recognize stress in terms of an Eastern approach.

As autonomic nerves become unbalanced, stress causes a distorted mind and body. One way to effectively balance out autonomic nerves is through psychosomatic techniques. This approach produces a psychological change by being conscious of one's own movements and feelings. Take this example: When you are feeling anxious or impatient,

you can calm yourself down by being conscious of your breathing and by breathing in deeply and blowing out slowly a few times. Even when the sympathetic nerves are provoked by anxiety or impatience, the autonomic nerves can be balanced by taking time to breathe out slowly and deeply. In this lecture, I will introduce the techniques of psychosomatic approach. The specific techniques are (1) breathing exercises, (2) simple techniques, (3) isometric exercises, (4) breathing methods, and (5) meditation methods. You can be conscious of your body and your breathing by mastering these techniques, which control your own thoughts and feelings. Through learning and continuous use of these techniques, you will easily feel more relaxed and possibly improve your concentration.

ライフプランという視点から継続的なキャリア成長を考える

A Carrier Design Strategy of Postgraduate Young Researchers: Life Planning Point of View

広島大学若手研究人材養成センター

川畑 弘

(講義概要)

大学院生の多くは、学位取得後のキャリアを考える際に自身の専門分野や能力、スキルを第一に考えることが多い。働く上で、「自身が求められる」、「その求めに応じた対応ができる」、「やりがいを感じる」というのは非常に重要なことであるが、それは博士のポテンシャル(能力や魅力、可能性)を最大限引き出し、社会で生き活きと活躍することを考えた時には必要条件にすぎない。博士人材に限ったことではないが、社会人としての能力は20代半ばから30代前半にかけて大きく向上する(ことが期待されている)。しかしながら、社会価値や要求、評価、そして自身の「やりがい」はそれ以上に早く・大きく変化することがある。勿論、多くの博士人材は常勤職を得ることをゴールとしていると思われるが、社会の変化に応じて、自身のキャリアを成長させることが強く求められることに気づいていないこともある。

本講義では、キャリアプランからもう一回り広く、社会人としてのライフプランから個々人がキャリアを考えるきっかけを提供する。

1. 学位取得後の生活をイメージする

学位取得後、自分はどこで何をしているだろうか、ということをごくリアルに考えたことがあるか。自身のキャリアを設計・構築するためにどんな準備をしているか。どの様な準備をすればいいのか。

2. 博士の就職活動

- ・学部やマスターの就職活動と何が違うのか、なぜ違うのか
- ・就職活動をはじめるにあたって気をつけること、知っておくべきこと
- ・大学のキャリア支援部署を活用する際に気をつけること
- ・広島大学での博士人材へのキャリア支援

3. 博士のキャリア設計戦略

- ・就職活動で何を重視・優先するか
- ・博士の就職活動はなぜひとくりに議論できないのか
 - ・現在の家族の状況(実習)、未来の家族、等
- ・働くということを「お金」という視点から見てみる
 - ・どの様に生活を作っていくか(実習)

図表2 給与を何に使うか？（初任給の手取りを20万として、0.1万円単位でざっくりと考えてみる）

費目	内訳	金額
(住) 住居	場所や寮の有無、住宅補助の大きさ、等によって大きく異なる 実家から通える企業に就職する。会社の寮に住む 実家や会社の寮は絶対に嫌だ 勤務先は絶対に都市部でないと嫌だ	
(衣) 被服費	身だしなみに関係するもの (スーツや靴、カバン、化粧品・美容院・美容院、等)	
(食) 食費	自炊の頻度や勤務先・友人との付き合いによって異なる	
通信費	インターネット、携帯電話、等	
お小遣い・ 交際費	人間関係の広さ、今後どのくらい広げたいか、自身への投資、遠方の企業に勤める場合は年数回の帰省にかかる費用、等	
車・バイク	月々のガソリン代、駐車場代、 (保険料、税金、車検)の月割り額	
貯金		
家族への仕送り		
合計		20万円

ライフプランという視点から継続的なキャリア成長を考える
A Career Design Strategy of Postgraduate Young Researcher:
The Life-Planning Point of View

Young Researchers Education Center,
Hiroshima University
Hiroshi KAWABATA

(Outline of the lecture) Most postgraduate students place the highest importance on their own specialties, abilities, and skills when they plan their careers after obtaining a graduate degree. It is very important for them to feel like “I am needed,” “I can meet the demand,” and “Job satisfaction is worth pursuing” at work. However, such of feelings are prerequisites when you wish to make full use of the potential of your doctorate, such as ability, appeal, and possibility, to play an active role in society. People develop (or are expected to develop) their abilities greatly as a member of society in their late 20s and early 30s, regardless of whether they are pursuing doctoral degrees. However, sometimes the social value and demand, evaluation, and motivations of a person need to change more quickly and significantly than his or her abilities allow. Thus, although many doctoral graduates ultimately wish to be employed as full-timers, they sometimes do not respond to social changes by developing their own careers.

This lecture gives students clues to think about their careers in a wider perspective than career planning, that is, from the perspective of life planning as members of society.

1. Imagining your life after obtaining a degree
How much realistically have you ever thought about where you are and what you are doing after you obtain your doctoral degree? What preparations are you making to design and build your own career? What preparations are to be recommended?
2. Job hunting of doctoral graduates
 - What is the difference between the job hunting of doctoral graduates and that of undergraduate students and masters? Why do the differences arise?
 - What should be understood and kept in mind when starting job hunting?
 - What should be kept in mind to utilize the career support section of university?
 - Career support for doctoral graduates in Hiroshima University.
3. Career design strategy of doctoral graduates
 - What should be emphasized and prioritized in job seeking?
 - Why is it impossible to generalize the discussion on the job hunting of doctoral graduates?
(Training) Present situation of the family, future family, etc.
 - Thinking about working from the viewpoint of “money”
(Training) How to design your life

自分が主役となるキャリアパスって!?

名古屋大学 社会貢献人材育成本部

ビジネス人材育成センター

河野 廉

本講義は、大学院を修了後どの道に進もうか？あるいは、進みたい道があるけれど今何をすべきなのか？など、自らのキャリアについて考えて、ヒントを得るためのものです。

「キャリア」とは、人生を構成する一連の出来事全てです。学生・社会人・年金生活者などの人生全てがキャリアです。もちろん、仕事以外にもクラブ活動やボランティアなども含まれています。

キャリア＝仕事という考えではなく、どのような生き方をしたいのかを考えてほしいと思っています。

講義では、社会環境。特に会社とは何か？について。アカデミックポジションの概要について。そして、ちょっとした自己診断なども行いながら、進めていきたいと思います。

1. 社会的ニーズを知る

企業とは！

企業は目的を実現するための器

経済の基礎知識

2. アカデミックを知る

大学の研究者になることとは？

大学の環境について

3. 自分を知る

自分がなりたい自分になるために

自らの特性： 能力 = できること

価値観 = 大切にしたいこと

志向性 = やりたいこと

を発見・自覚する生活

4. と言っても、就職活動は、どうしよう！

With the career path that oneself becomes the leading role?

Business Capacity Development Center
Division of Human Resource Development
Nagoya University
Yasushi Kawano

This lecture aims to make students think about their own careers and gives them clues to realize their careers, responding to questions that students think about, such as “What career path should I take after I complete graduate school?” and “I have found the career that I wish to pursue, but what should I do now to make it happen?”

A career is a series of events that make up your life. It is everything in life regardless of your status, whether you are a student, a member of society, or a pensioner. Of course, your career can include things besides work, such as club activities and volunteer activities.

We sincerely wish students would think about the kind of life they want to pursue without adhering to the conventional idea that career means work.

This lecture discusses social environments with a focus on what a company is and provides an overview of academic positions, besides giving students a simple self-diagnosis.

1. Knowing social needs

What is a company?

A company is a vessel to help you materialize your objectives.

Basic knowledge of economy

2. Knowing academic aspects

What does it mean to become a university researcher?

About the university environment

3. Knowing yourself

Everyday life involves finding and realizing the following to become the person you want to become.

Your individuality:

Ability = what you can do

Value = what you have to cherish

Aspiration = what you want to achieve

4. I can understand well that the above is very important, but what should I do to become employed?

企業における先端研究とは？ ～自らの経験から～

キリン(株) 基盤技術研究所

水谷 悟

大学院工学研究科博士課程を卒業して現在私が所属している研究所に入社以来、コーポレート機能の研究所のミッションを果たす為に、私は最先端技術の研究開発を通じて企業研究の最前線をリードすることを目標に常に頑張ってきました。私自身がこれまでに取り組んできた研究内容を時代背景とともに紹介することで、現在大学院で学んでいらっしゃる皆さんの研究に対する考え方・取組み姿勢、また研究者としての将来像、就職先と職種・キャリアパスを考える上での参考にして頂ければと思います。そして研究の楽しさを少しでも感じて頂ければと思います。具体的には下記の3つの項目について時間の許す限り、紹介させて頂く予定をしております。

1. 動物細胞培養による医薬品製造を目的としたバイオリアクターの開発
2. 流体力学とビール醸造プロセスのコンピューターシミュレーション
3. バイオインフォマティクスに関する技術開発と創薬への応用

How should advanced research be conducted in a corporate lab?:

A Personal Experience

Central Laboratories for Key Technologies, Kirin Co., Ltd.

Satoru Mizutani

Since joining a corporate laboratory at Kirin Co., Ltd. after obtaining a doctorate in engineering, I have made continuous efforts to engage in the research and development of state-of-the-art technologies in order to stay at the forefront of corporate research, and to achieve the mission of the laboratory. In this lecture, I will introduce research I have conducted and its circumstances to you graduate students; I hope my knowledge will help you arrive at a sophisticated perception of and attitude toward research, form images of yourselves as future researchers, and obtain a sense of your future occupations and career paths. I will be glad if you come to feel some pleasure in conducting your research. I will talk about the following three topics in particular, as time permits.

1. Development of bioreactors to produce pharmaceuticals from animal cell cultures
2. Computer simulation of hydrodynamics and the beer brewing process
3. Development of bioinformatic technology and its application to drug discovery

博士の就職活動と企業からの期待

元 文部科学省科学技術政策研究所

鐘ヶ江 靖史

(講義概要)

本講義では、以下の3点について理解を深め、考えるきっかけを提供することを目的としています。

- ① 統計・調査データを踏まえた、博士人材の就職活動や就職の実態
- ② (研究開発職を中心に)企業での人材に対する評価や活用の視点、考え方
- ③ 今後企業が必要とする人材の能力・資質

講義ではデータや調査研究の紹介にとどまらず、時間が許す限り、講師や学生間でのディスカッションを行う予定です。

<事前準備>

講義概要③に関連して、以下の2点について改めて考えてみてください。

1. あなたが考える「イノベーション」とは何か
2. 博士課程はイノベーションに対してどのような影響するだろうか

Job seeking of doctoral graduates and expectations from companies

Former researcher at the National Institute of
Science and Technology Policy
Yasushi Kanegae

(Outline of the lecture)

This lecture aims to deepen students' understanding of the following three points and give them clues to think about.

1. The reality of job seeking and employment of doctoral graduates clarified by statistical and survey data
2. The viewpoint and mentality of the evaluation and utilization of human resources in a company (with a focus on careers in research and development)
3. The abilities and qualifications of human resources as required by a company

Aside from introducing data and research results, the lecturer will ask students to have discussions with him and other students as far as time permits.

(Advance preparations)

Students are asked to think about the following two points in association with number (3) in the outline.

1. What is innovation? What do you think of it?
2. How does the doctorate course affect such innovation?

科学者・技術者と社会とのかかわりの歴史

博士の生き方

奥井 隆雄

科学者が職業となるのは、19世紀のことである。それ以前は、自然の探究は一種の思想的立場から行われており、このような活動をする人々は自らのことを「自然哲学者」と称していた。

科学者・技術者が注目されるようになったのは、ヨーロッパにおいて主権国家が成立し、各国がその影響力を増すために、国力の増強に努める中での有用な生産手段としてであった。そして、科学技術が国家の経済発展や軍事力の強化に不可欠なものとなっていくことによって、科学者・技術者は権威あるものとして認められることになった。

米国においては、第2次世界大戦における原爆開発の成功、その後の米ソの冷戦構造の中での基礎科学の振興の過程で、科学者・技術者の権威は最高に高まった。このときになってはじめて、科学者は、あるべき姿としてではなく、実際に純粋に知的好奇心から研究を行うことができるようになった。

しかしながら、このような黄金期は長くは続かなかった。これは、1970年代からの米国経済の停滞によって基礎科学の成果が産業の発展に寄与するというリニアモデルへの疑義が生じたことが大きい。

また、1960年代から生じてきた自由主義陣営、社会主義陣営における政権担当者やそれを支える権威者たちに対する一般市民の不信の増大と反抗が生じた。科学者・技術者に対しては、研究による戦争協力に対する批判や、化学物質の拡散や公害企業による環境問題の追及が行われるようになった。このような現象により、国民の力は実質的に増大し、政治家、役人、企業家、科学者・技術者などの権威が相対的に弱まった。

さらに、先進国においては、生産力の増大により、生活に必要な物資は手に入るようになり、需要を如何にして創造していくのかということが課題となっている。このような中で「何を売るのか」という生産者が主導する世の中ではなく、「何を買うのか」という消費者が主導する世の中となっている。

現在、科学者が、純粋な知的好奇心からのみで研究を行うことは難しくなっているし、技術者が純粋に性能向上を追求するというのも難しくなっている。また、自然環境や社会環境への影響への考慮や生命倫理などの倫理的な問題による制約も現れてきている。

今後、世の中から孤立して生きていくことも、権威が世の中を主導することも難しくなると考えられる。そして、これからは、世の中とかかわりを持ち、多くの人で世の中を作り上げていくという感覚が必要となるのかもしれない。

本講義では、過去から現代にわたって、科学者・技術者が社会とどのようにかかわってきたのかの概説を示すことで、将来に向けて自らが職業人として、また一般人としてどのように社会とかかわっていくのがよいのかを考えるきっかけとなることを期待している。

The relation between scientists/engineers and society

The way of life of a doctor

Takao Okui

It was in the 19th century that being a scientist became a profession. Before that, research on nature was conducted using a kind of ideological approach, and people that engaged in these kinds of activities were called “natural philosophers.”

Scientists and engineers started to attract attention because sovereign nations formed in Europe, and these nations found science and technology useful as a means of production during efforts to increase their influence and strengthen national power. As science and technology became indispensable for fostering economic development and strengthening military force, scientists and engineers were recognized as authorities.

In the United States, the authority of scientists and engineers peaked with the successful development of an atomic bomb during World War II and the promotional process of basic science in the Cold War between the United States and the Soviet Union. This allowed scientists to conduct research purely for intellectual curiosity instead of pursuing what was expected of a scientist for the first time in history.

However, this golden age did not last long. This is largely because the stagnation of the U.S. economy starting in the 1970s posed questions about the linear model, which claimed that the results of basic science contributed to industrial development.

At the same time, in the 1960s the general public started increasing their distrust of and resistance against political leaders and authorities who supported them, in both the liberal and socialist camps. Scientists and engineers were criticized for their cooperation in the war through research and charged for their responsibility in the proliferation of chemical substances and environmental issues created by industrial polluters. These phenomena substantially strengthened the power of the people and relatively weakened the authority of politicians, bureaucrats, entrepreneurs, scientists, and engineers.

In addition, creating demand has become an issue because increased production supplied people in developed countries with their daily necessities. Because of these circumstances, the world has changed from a producer-oriented society that emphasizes “what to sell” to a consumer-oriented society that places much value on “what to buy.”

At present, it has become hard for scientists to conduct research purely for curiosity. Likewise, it has also become hard for engineers to pursue performance improvement alone. In addition, restrictions emerged that were created by concern for natural and social

environments and by ethical problems, including life ethics.

It will supposedly be hard for scientists and engineers to live independently of society and for authority to take initiative easily in the future. From here on, authorities may need the mindset to get involved with society and build a society in cooperation with many people.

I hope that this lecture will give students clues to think about how they are associated with society as professionals and as ordinary people by presenting an overview on how scientists and engineers have been associated with society from past to present.

「日本における大学教育と留学生のストレス～自らの経験から～」

佐賀大学農学部

李 應喆

国際交流の進展に伴い、過去 30 年間で、全世界の留学生数は大幅に増加し、1975 年の 80 万人から 2009 年の 367 万人へと 4 倍以上に増加し、様々な国の文化に対する認識が相互に深まりつつある。しかし、偏った情報や先入観によって他の文化を誤って理解してしまう場合も少なくない。そのような誤解が、一方で異文化に身を置いた者の精神衛生や健康に好ましくない影響を与えていることが指摘されている。異文化に接触する時、人間は多かれ少なかれ異なる体系の文化にさらされ、自らの文化的価値に強いインパクトを受け、精神的、身体的な動揺による不適応反応が生じ、さらに進むと心身に好ましくない影響を強く受けることもある。これは異文化（多文化）ストレスといわれ、自文化との差異によって生じるものであり、自文化と異文化の間に共通点が少ないほど、環境変化によるストレスも増加するとされている。

日本の大学等で学ぶ留学生は、平成 21 年 5 月 1 日現在 132,720 人で、平成 20 年に比べ 8,891 人（7.2%）増加した。これを出身地域別に見ると、地理的、文化的な背景から、アジア地域からの留学生が全体の約 9 割を占めている。また、日本語教育機関で学ぶ学生は、平成 21 年 7 月 1 日現在 42,651 人で、平成 20 年に比べ 7,714 人（22.1%）増加した。出身地域では、中国、韓国及び台湾からの学生が全体の約 8 割以上を占めている。

今後も留学生の増加が予想される中で、留学生の受け入れ体制や大学の教育、そして日本社会への適応が問われている。

一方で、近年、国際的な潮流として、大学及び高等教育の質保証制度は個別機関のマネジメントのあり方に、かつてない展開をもたらす新たなパラダイムを迎えている。2005年ユネスコおよびOECDによって「国境を越えて提供される高等教育の質保証に関するガイドライン」が策定された。日本においても、大学における高等教育システムの環境変化（ユニバーサル化による学習者の量的拡大・質的変容や、公的資源の削減と市場化による私的資源への依存の増大、説明責任の要請や事前・事後評価の充実など）は、かつてナショナルな次元において社会の「エリート」を養成する機能を担っていた高等教育機関に、構造的かつ機能的な変容を迫っている。

そのような中で、日本の政府は留学生30万人受け入れ計画を打ち出している。その内容を見ると、世界により開かれた国として、ヒト、モノ、カネ、情報の流れを拡大する「グロー

バル化戦略」を展開する一環として、2020年を目途に留学生受入れ30万人を目指すものである。その際、高度な人材の受入れとも連携させながら、国・地域・分野などに留意しつつ、優秀な留学生を戦略的に獲得し、アジアをはじめとした諸外国に対する知的な国際貢献を果たすことも重視されている。

しかし、留学生30万人受け入れ計画とグローバル戦略における留学生の支援について見ると、ハード的な側面に比べてソフト的な側面、つまり留学生の生活、精神的な健康、異文化に関する相互の理解、留学生の人間関係、就職などに関しては、十分とは言えないと思われる。

したがって、本稿では日本における留学制度及びグローバル人材育成などを踏まえて、留学生が留学生活に適応していく際に、どのような困難な問題があるのか、また、留学生生活がストレスと感じる状況などを、著者の長い留学経験と修士論文「留学生のストレスと健康に関する研究」で行った研究調査を基に、今後の日本の留学制度における高等教育の質保証のあり方について報告し、若干の考察を行いたい。

University Education and Stress Among International Students in Japan:
As Viewed from My Personal Experience

Faculty of Agriculture, Saga University
Lee, Eung Cheol

With the increase in international exchanges, the number of international students worldwide has significantly increased over the past 30 years: from 800,000 in 1975 to 3,670,000 in 2009. Mutual understanding of different cultures is improving in many countries; however, some people misunderstand other cultures owing to biased information and/or prejudice. Such misunderstandings can affect the mental and physical health of those who come from these misunderstood cultures. People are used to their cultures and are strongly influenced by their own cultural values. Therefore, exposure to a different culture can produce maladaptive responses such as mental and physical agitation. If the response gets worse, the person's mind and body can be negatively affected. This is called transcultural (multicultural) stress, which is caused by differences between another culture and one's own. It is said that the fewer the commonalities a person finds in another culture, the more the environmental stressors he or she experiences.

The number of international students who study in Japanese institutions such as universities was 132,720 on May 1, 2009, which was an increase of 8,891 (7.2%) from the year 2008. Looking at the numbers by locale, approximately 90% of these international students were from Asia, based on their geographical and cultural background. The number of students in Japanese-language institutions was 42,651 on July 21, 2009, which was an increase of 7,714 (22.1%) from the year 2008. Looking at things demographically, about 80% of these international students were from China, South Korea, or Taiwan.

Since the number of international students is expected to continue increasing, challenges for the future are developing appropriate policies for schools about accepting international students and improving such students' adaptation to Japanese society and the university education environment in Japan.

On the other hand, with the recent international trend, the quality provision system of university and high school education is experiencing a paradigm shift, which has led to unprecedented changes in the management of individual institutions. In 2005, the UNESCO and OECD formulated the "Guidelines for Quality Provision in Cross-border Higher

Education.” In Japan, the environmental change in the higher educational system (the quantitative expansion and qualitative change of learners by universalization, cutback on public resources and increase in dependency on private resources by commercialization, demands for accountability and improvement in prior/ex-post evaluation, etc.) has led to the structural and functional transformation of higher education institutions, which were once responsible for bringing up “elites” at the domestic level.

Under such circumstances, Japanese government has introduced “The 300,000 International Students Acceptance Plan” This is part of its “Globalization Strategy,” which is intended to facilitate the flow of people, goods, money, and information. As a country that is more open to international students, Japan is aiming to accept 300,000 international students by the year 2020. While obtaining proper human resources, they will focus on strategically attracting excellent international students, while paying particular attention to these students’ countries, regions, and disciplines. This plan will produce an intellectual and international contribution to foreign countries, including Asian ones.

However, the support for international students in The 300,000 International Students Acceptance Plan and the Globalization Strategy is not sufficient in the following “soft” aspects compared to the “hard” ones: the life and mental health of international students, mutual understanding of different (multiple) cultures, the human environment, and job placement of international students.

In this paper, I specify the problems and stressful situations international students face when they adapt to overseas study and life, in light of overseas study programs and global development of human resources in Japan. I also report and discuss the future of quality provision systems of higher education in overseas Japanese study programs based on my personal experience studying abroad for a long time and the research I conducted for my master thesis, titled “A Study about the Stress and Health of International Students.”

開講報告書

鹿児島大学連合農学研究科人材養成学生支援セミナーⅡ

洋上セミナー「海洋環境と生物資源」



平成 25 年 11 月 13 日

鹿児島大学水産学部 不破 茂

1. 洋上セミナーの開催趣旨および内容
2. 乗船学生及び指導教員
3. 活動記録
4. 特別講義
5. 船内講義
6. 洋上実習
7. 参加学生による本セミナーの評価
8. 総括
9. 謝辞

1. 洋上セミナーの開催趣旨および内容

鹿児島大学大学院連合農学研究科博士課程大学院生を対象に、鹿児島大学水産学部附属練習船かごしま丸（国際総トン数 1284 トン）を利用して、洋上セミナー「海洋環境と生物資源」を開講した。本セミナーでは、鹿児島大学大学院連合農学研究科の開講科目「人材養成学生支援セミナーⅡ」として実施されたもので、海洋環境並びに海洋生物資源に関する研究調査手法をフィールドで実践的に学習させるとともに、海洋生物資源の管理と利用について体系的な理解を形成することを目的としている。実習を行う東シナ海は韓国、北朝鮮、中国、台湾に囲まれた国際水域であり、海洋基本法でも重要視されている。この海域での実習は、国際性を実感するものであり、今年度は台湾の高雄港に寄港した。ここでは、中山大学において「陸圏・水圏科学セミナー；Seminar on Agriculture and Fishery Science」を開催するとともに、高雄海洋科技大学とも学术交流を行い、学生の国際交流を図った。本セミナーではこれらを通じて国際的な視点から水圏に関する総合的な理解を持つ人材養成の一翼を担うことを目指した。

2. 乗船学生及び指導教員

鹿児島大学大学院連合農学研究科（7名）

小城章裕（鹿児島大学所属・応用生命科学専攻1年・生物機能化学連合講座）

内田圭一（鹿児島大学所属・農水圏資源科学専攻1年・地域資源環境工学連合講座）

前田千春（琉球大学所属・生物生産科学専攻1年・地域国際資源経済学連合講座）

魏 弘毅（鹿児島大学所属・農水圏資源科学専攻1年・水産資源環境科学連合講座）

ワチャラポン・チュムチュウン（鹿児島大学所属・農水圏資源科学専攻1年・水産資源環境科学連合講座）

シーラ・ヴィラモア（鹿児島大学所属・農水圏資源科学専攻2年・水産資源環境科学連合講座）

加茂 崇（鹿児島大学所属・農水圏資源科学専攻3年・水産資源環境科学連合講座）

指導教員

不破 茂 鹿児島大学水産学部教授・講演及び実習指導

安楽和彦 鹿児島大学水産学部准教授・講演及び実習指導（往路）

三橋延央 鹿児島大学水産学部特任講師・講演及び実習指導

米山和良 鹿児島大学水産学部助教・講演及び実習指導（復路）

その他の乗船者

鹿児島大学水産学部3・4年生10名（漁乗船実習Ⅱ）、4年生9名（洋上特別実習）

鹿児島大学水産学研究科9名（大学院総合乗船実習）

3. 活動記録

2013年10月17～31日

10月17日 水産学部

16 : 00 ~ 17 : 30 特別講義「北海道における持続的なホタテガイ漁業」
北海道大学水産科学研究所 五嶋聖治教授

10月18日 谷山港出港

09 : 00 水産学部をスクールバスで出発

09 : 30 かごしま丸乗船 (連大生 7、修士学生 9、学部学生 10、教員 3)
船長挨拶、船内生活の諸注意、非常退船時の説明、自己紹介

11 : 00 谷山港出港

14 : 50 採泥 (鹿児島湾指宿沖 78m)

18 : 00 稚魚ネット、プランクトンネット、CTD (屋久島沖 453m)

10月19日 東シナ海

06 : 30 起床、ラジオ体操

08 : 30 セミナー準備

13 : 00 海洋観測 : 水中照度、プランクトンネット、CTD (硫黄島沖 540m)

18 : 30 イブニングセミナー

「烏賊餌木」不破教授

10月20日 東シナ海

06 : 30 起床、ラジオ体操

08 : 30 セミナー準備

13 : 00 海洋観測 : 水中照度、プランクトンネット、CTD (宮古島沖 905m)

18 : 30 イブニングセミナー

「マグロ延縄におけるウミガメ混獲防除」三橋講師

10月21日 東シナ海

06 : 30 起床、ラジオ体操

08 : 30 セミナー準備

13 : 00 セミナー準備

18 : 30 イブニングセミナー

「台湾および高雄事情」安楽准教授

10月22日 高雄港外

06 : 30 起床、ラジオ体操

09 : 30 高雄港外に錨泊

10 : 00 セミナー準備

13 : 00 セミナー準備

10月23日 高雄港

06 : 00 起床
06 : 30 入港 S/B
07 : 00 高雄港漁人埠頭 4 番に着岸
10 : 40 高雄海洋科技大学向け出発
11 : 20 高雄海洋科技大学到着
13 : 00 鹿児島大学・高雄海洋科技大学間学术交流協定締結式
締結式終了後、学生・大学院生は高雄海洋科技大学学生の引率で
市内見学
14 : 00 鹿児島大学・高雄海洋科技大学間学术交流発表会
18 : 00 高雄海洋科技大学主催の懇親会
21 : 30 帰船

10 月 24 日 高雄港

06 : 30 起床、ラジオ体操
09 : 00 かごしま丸公開
12 : 30 中山大学へ出発
13 : 00 Seminar of Agriculture and Fishery Science
18 : 00 中山大学主催の懇親会
21 : 30 帰船

10 月 25 日 高雄港

06 : 30 起床、体操
09 : 30 前鎮漁港、億順超低温冷蔵公司見学
12 : 30 現地解散、学生・大学院生は高雄海洋科技大学学生の引率で
市内見学
18 : 00 船内レセプション
21 : 30 帰船

10 月 26 日 高雄港

06 : 30 起床、体操
09 : 30 高雄市立歴史博物館見学
12 : 00 現地解散、学生は高雄海洋科技大学学生の引率で市内見学
21 : 30 帰船

10 月 27 日 台湾東方海上

06 : 30 起床、体操
09 : 50 出港 S/B
10 : 00 高雄港出港

13 : 00 ロープワーク

10月28日 与那国島南方海上

06 : 30 起床、体操

08 : 30 船内講義「トロール漁業」 不破教授

10 : 00 船内演習「トロール漁獲結果に基づく資源密度の推定」 米山助教

13 : 00 船内演習「トロール漁獲結果に基づく資源密度の推定」 米山助教

18 : 00 イブニングセミナー

「養殖マグロの生簀内での遊泳行動解析」 米山助教

10月29日 沖縄北西海上

06 : 30 起床、体操

08 : 30 プロフィール紹介

12 : 00 曳縄

13 : 00 海洋観測：水中照度、プランクトンネット、CTD（伊江島沖 1881m）

18 : 00 イブニングセミナー

「かごしま丸IV世について」 三橋講師

10月30日 奄美西方海上

06 : 30 起床、体操

08 : 30 船内清掃、操舵体験

12 : 00 曳縄

13 : 00 海洋観測：水中照度、プランクトンネット、CTD（悪石島沖 905m）

16 : 00 総括

18 : 00 イブニングセミナー

「かごしま丸IV世のまき曳き網」 不破教授

10月31日 谷山港入港

06 : 30 起床、ラジオ体操

08 : 00 谷山港入港

08 : 30 通関、入国手続き

10 : 30 船長挨拶

11 : 00 下船

11 : 30 スクールバスで水産学部到着、解散

4. 特別講義

10月17日 16 : 10-17 : 30、水産学部 21号講義室

五嶋聖治 北海道大学水産科学研究院 教授 「北海道における持続的なホタテガイ漁業」

我が国の漁業生産量第4位を占めるホタテガイについて、その手体である北海道オホーツク海沿岸でのホタテガイ漁業がいかんにして現在の隆盛に至ったかについて、生態系と生物生産の視点から講義が行われた。大学の研究を海洋の生産現場に有機的に連結させて結実した過程が丹念に説明された。この講演を通じて受講生は海洋からの食糧供給システムについて再認識すると共に、五嶋氏の現場に密着した研究姿勢に感銘を受けていた。

5. 船内講義

「トロール漁業」10月28日 8:30-9:45 不破教授

底立延縄漁業についての知識を持たない受講生に対して、同漁業に関する基礎的事項を紹介した。実操業の写真並びに、漁具や船の模型を使って漁具構造や操業方法の理解を促進した。甲板上での作業手順や安全への考慮事項を合わせて説明し、漁業になじみのない受講生への理解を促すと共に、続けて行う船内演習「トロール漁獲結果に基づく資源密度の推定」への橋渡しも兼ねた。

「トロール漁獲結果に基づく資源密度の推定」

10月28日 10:00-11:00、13:00-14:30 米山助教

かごしま丸でのトロールで漁獲されたヒラツメガニの資料に基づいて、資源密度を推定した。学生はパソコンを使用して、統計の基本から順を追って資源密度の推定演習を行った。

「イブニングセミナー」

往路と復路で乗船教員による話題提供として夕食後に約30分の講演を行った。いずれの講演でも質問時間が設けられ、受講生からは専門外の講演にもかかわらず活発な質問があり、講演者から丁寧な説明がなされた。

10月19日「烏賊餌木」不破教授

10月20日「マグロ延縄におけるウミガメの混獲防止」三橋講師

10月21日「台湾及び高雄事情」安楽准教授

10月28日「養殖マグロの生簀内での遊泳行動解析」米山助教

10月28日「かごしま丸IV世」三橋講師

10月28日「かごしま丸IV世のまき曳き網」不破教授

いずれも10分程度の質疑時間が設けられ、受講生からは専門外の講演にもかかわらず活発な質問が出て、講演者から丁寧な説明がなされた。

6. 洋上実習

1) 航跡ならびに観測点の位置

航海期間中の航跡図を図1.と図2.に示す。救命艇操練と採泥は鹿児島湾内で、稚魚ネットは屋久島沿岸で、プランクトンネット並びに、CTD 観測は屋久島沿岸および、黒潮流軸上の4点でそれぞれ実施した。

2) 救命艇操練（緊急時避難訓練）

救命艇操練は法令に基づく緊急時の避難訓練であり、首席一等航海士の指導によって実施した。受講生は救命胴衣を装着し、搭乗する救命艇や救命筏を確認すると共に船という

特殊な環境を認識した。

3) 採泥及びベントス調査実習

鹿児島湾指宿沖の水深 78m でスミス・マッキンタイヤー採泥器を用いて採泥し、泥は篩に取り出して流水をかけながら泥の中からベントスを採集して目視観察した。

4) 稚魚ネット及びプランクトンネットによる生物採集実習

稚魚ネットは当初の計画通り屋久島沖で日没後に水深 453m で表層の生物採集を行い生物相について学習した。同時に CTD 観測とプランクトンネット 0-50m の垂直引きにより生物採集を行い生物相について学習した。採集した生物は室内で顕微鏡観察し、プランクトンを専攻する受講生により種の解説を行った。採集された生物に受講生は高い関心を示した。なお、CTD 観測とプランクトンネットは場所を変えて 4 回実施した。

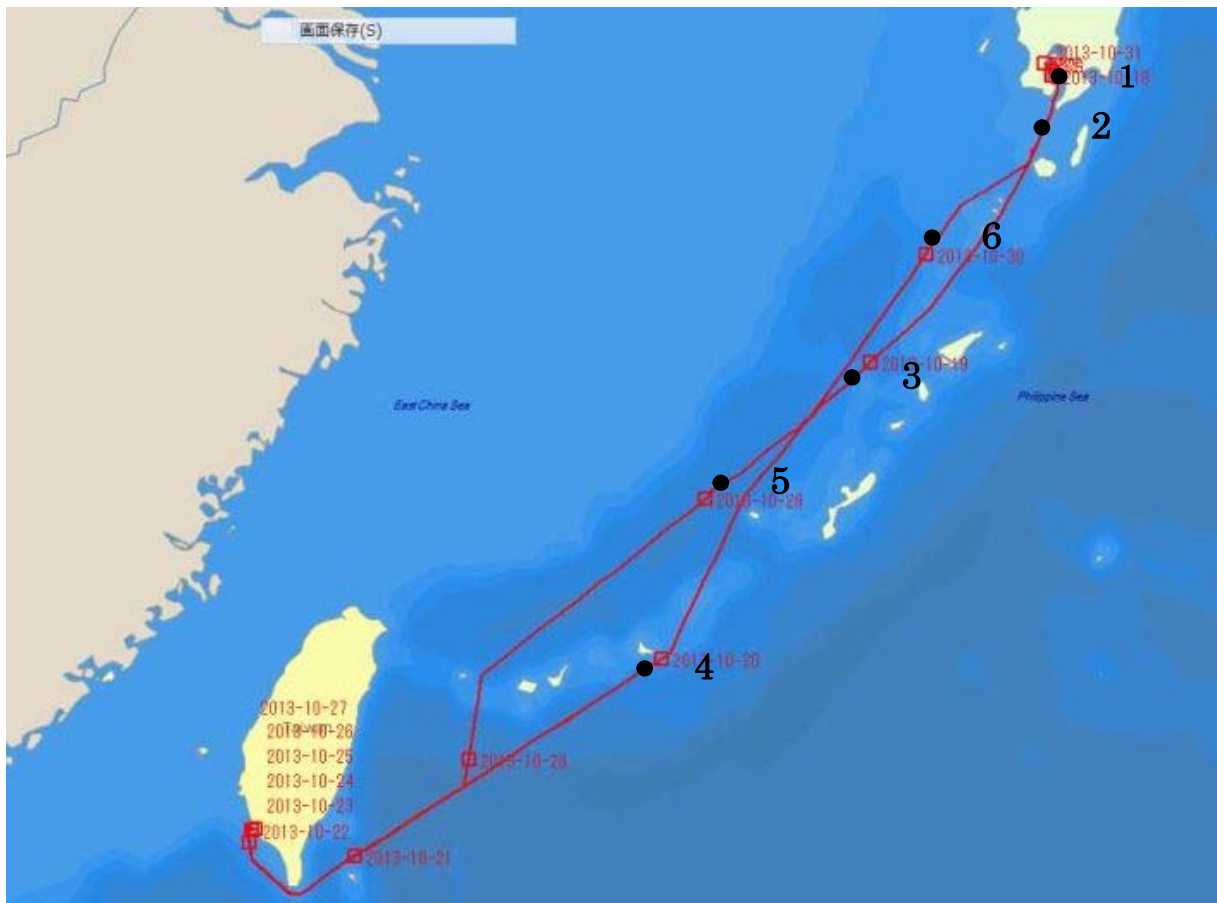


図 1. 本航海の航跡及び正午位置、数字は観測点を示す。

- 1 : 採泥、鹿児島湾指宿沖 78m
- 2 : 稚魚ネット、プランクトンネット、CTD (屋久島沖 453m)
- 3 : 水中照度、プランクトンネット、CTD (硫黄島沖 540m)
- 4 : 水中照度、プランクトンネット、CTD (宮古島沖 905m)
- 5 : 水中照度、プランクトンネット、CTD (伊江島沖 1881m)
- 6 : 水中照度、プランクトンネット、CTD (悪石島沖 905m)

5) CTDによる海洋観測実習

屋久島沖合(450m)と黒潮の流軸上に儲けた4点で、CTDを表層から最大1850mまで沈降させて、塩分濃度及び水温の鉛直変化を観測した。一等航海士からCTD観測機器の説明を受けた後に、観測を行った。CTDには採水器を装着して受講生が機器を操作して採水信号を発信した。水深ごとの水温や塩分の観測結果はモニター画面に表示され、塩分濃度及び水温の鉛直変化が視覚的に確認された。また、回収された採水器を開放してから深度の異なる海水を手にとって、深度による水温と塩分の違いを実体験した。塩分濃度及び水温の鉛直変化について受講生からは、水温躍層や水温分布と塩分分布が異なる理由などについて質問がなされた。

7. 参加学生による本セミナーの評価

1) アンケート結果

鹿児島大学水産学部が講義及び実習終了時に実施している学生による授業アンケートを利用して、本セミナーを評価した。設問はQ1.この科目を履修した動機、Q2.授業内容の満足度、Q3.満足した点 Q4.Q3での不満足者への質問<該当者なし>、Q5.授業内容の満足度への意見、Q6.授業に対する意見要望である。アンケートの集計結果を表1、2に、および受講生の自由記述を示す。

表1. 各質問事項に対する回答結果：受講者数連大生7名()は修士学生9名

Q1. この科目を履修した動機を選んでください(複数選択可)

この授業に興味を持ったので	6 (4)
教員、先輩、友人のすすめで	1 (7)
履修しやすい曜日や時間帯だったから	1 (2)
必須科目だから	2 (2)
単位取得のため	4 (1)

Q2. 授業の内容は全体的に満足できるものでしたか

はい	7 (9)
いいえ	0 (0)

Q3. (Q2.ではいと回答したものへ) 満足した点を以下から選んでください(複数選択可)

この授業は興味や関心を抱かせる内容だった	7 (5)
この授業によって学習意欲がかき立てられた	6 (5)
授業の内容が理解できた	4 (4)
教員の説明がわかりやすかった	6 (4)
学習について教員からのアドバイスやサポートがあった	4 (4)
その他	0 (3)

表 2-1. Q5. 授業の満足度についての意見を具体的に記述してください。

- ・台湾の学生と交流できたことにより、普段では経験できないさまざまなことを体験できて大変良かったです。
- ・初めての乗船実習でしたが、台湾の大学との交流だけでなく、船や海洋調査について、いろいろ貴重な経験を積むことができて大変満足しました。
- ・水産系の授業は全て初めての経験でとても新鮮で勉強になりました。また、実際に社会ですぐに役立つ技術など（縄結びなど）とても参考になりました。
- ・練習船に乗ったのは初めてだったので、全てが面白かった。
- ・外国でプレゼンできていい経験になった
- ・The onboard program gives a good experience and skill on seamanship.
- ・I am very much satisfied by the systematic learning system. The professors / lectures presentations were very impressive. The Kagoshima maru crew and staff are very friendly and approachable.
- ・Briefly the planed activities of this program had been achieved. Successfully, and I am fully satisfied with this successful proceedings.

参考（修士学生の授業の満足度についての意見）

- ・航海中の講義、操業ともに楽しく勉強になりました。また、台湾でのセミナー、学生との交流もよかったです。
- ・海外の大学生と交流できたこと、海外の文化について学べたことは良い収穫であった。
- ・サンプリング地点など船の方々が考慮してくださったおかげで良いサンプリングができました。ありがとうございました。
- ・日本の学生だけでなく、色々な国の学生たちと交流することができた。とてもいい刺激になった。
- ・台湾でのポスター発表を通じて他言語の方に物事を伝える事の難しさや工夫の必要性を理解することができました。
- ・The conference on sun yat-sen University was interesting and also the practical's conducted on our way were also played a role on developing our field experimental works.
- ・This trip was educational as well as enjoyable. Also, participation at the Taiwan seminar was an interesting experience as it allowed us to learn new topics from our Taiwanese counterparts. Sincere gratitude to all the coordinators involved in making this possible. Thank you
- ・I hope this program will continue every year to strength the bond between Kagoshima University and these Taiwan Universities thought sharing of fishery scientific researches and others. Finally, I would like to recommend social bonding among the students through sports. Thank you very much for this very important opportunities.

表 2-2. Q6. この授業についての意見、要望などを記述してください。

- ・琉球大学の学生が乗る機会をもっと作って欲しい。
- ・もう少し連大生に幅広く募集をすればいいと思います。(このセミナーを知らない連大生が多いと思います。)
- ・Despite of language barrier, the exchange of knowledge was effective. May be in the future, the Japanese students will be able to improve their English so that they will have confidence in communicating with foreign students. Even though I got seasick, life in Kagoshima maru for 13 days was very convenient having everything I need.

参考（修士学生の授業についての意見、要望）

- ・またこのような航海があると参加したいです。ありがとうございました。
- ・事前連絡がほとんどなく、混乱が多く生じた。
- ・台湾の学生と予想以上に交流ができました。そのため団体行動が多く個人行動が撮りにくかったのも、完全に鹿大の学生だけで行動できる日があったら良かったです。

評価結果から判断して、本セミナーは目的を達成して良好に実施されたと判断できる。受講生は積極的に本セミナーに参加し、練習船の設備や本セミナーの内容に満足し、新たな知識・経験・技術を得て、今後の研究に役立つものであると高く評価している。これは受講生が高いモチベーションを持って本プログラムを選択したことにほかならない。顕著な事例が、往路航海は台風のうねりを受けて船が大きく揺れて、多くの受講生は船酔いしていたがダウンすることなく、全ての作業や講義に参加していたことである。また、寄港地での Seminar of Agriculture and Fishery Science において講演し、台湾の研究者や学生たちとの交流を深めたことは有意義だったと評価していた。さらに、彼らの意欲を満たすのに十分な練習船が卓越した研究施設を有しており、船舶教員がそれらの機器の優れた運用技術を持って懇切丁寧な指導を行ったことも彼らの満足度を高めたと考えられる。評価結果では、全体的に満足度が高いことを伺わせるが、実習に関する乗船時（乗船前）の情報伝達や、実習で使用した機器の取り扱いに関しては、他の項目と比較して満足度が低い。これらの説明は日本語で行い、外国人留学生には必要に応じて英語で行ったが、乗船者のバックグラウンドは多岐にわたっており、専門分野が異なる彼らには十分に理解できなかったためと考えられる。今後はこれらに対して十分配慮する必要がある。

8. 総括

受講生が高い積極性と知的好奇心を持っていたことで、練習船スタッフの協力を得て、洋上セミナーをスムーズに実施できた。乗船中の受講生と乗船指導教員との日常会話を通じて、自分の研究室以外の教員や大学院生と知り合えたこと、お互いの研究内容についてよく知ることができたなど、練習船での集団生活ならではの効果が得られたことなどが、確認できた。

今年度航海では航路に接近した台風の影響を受けて、当初計画していたトロール操業が実施できなかった。しかし、乗船教員の指導によるセミナー発表の準備や、船内講義を行なって、養生セミナーで計画した実習内容を実施できた。

洋上セミナーに対する受講生のアンケート結果ならびに自由記述から、新たな知識や経験、技術を得て、今後の研究に役立つものであると、受講生からほぼ満足しているとの評価を得られた。これは昨年度までの反省点を今年度に反映させたことや、状況に応じて臨機応変に対応した結果でもある。一方では留学生に対して、事前配資料やかごしま丸の設備などの説明文書には適宜英文を付加した。一方では、初めて乗船してくる水産学部出身でない学生には情報不十分な点があったことも明らかになった。今年度の経験や記録を参考として、かごしま丸とも連絡を取りあって、これらの反省点は来年度の開講に向けて改善してゆきたい。かごしま丸は主として水産学部学生の乗船実習指導を担当しているが、修士課程ならび博士課程学生からも高い満足度を得られたことを確認した。これからも修士以上の学生の教育指導にかごしま丸を有効に活用してゆきたい。

今年度はこれまで最大となる連大生8名が履修登録し、中途退学により1名が辞退したものの7名の参加があった。今年度は鹿児島大学農学部から初めて2名の参加があり、琉球大学からも1名が参加した。台湾の高雄港に寄港して、中山大学と鹿児島大学連合農学研究科、鹿児島大学水産学部の共催で「Seminar on Agriculture and Fishery Science」を開催して学生に講演する機会を提供したことは、参加学生から高い評価を得ており、人材養成学生支援セミナーⅡの企画趣旨は達成されたといえる。次年度は各構成大学から更に多くの学生が参加することを期待している。

今年度は2月の代議委員会で開催要項を発表したこと及び、募集期間を約2ヶ月としたことは適当だった。この洋上セミナーに対する参加学生の評価は高く、来年度の参加を希望するものもいた。彼らの口コミ効果による参加者の増加を期待する。また、来年度は今年度とほぼ同時期に本セミナーを実施する計画であり、韓国の済州港に寄港して、済州大学と鹿児島大学連合農学研究科、鹿児島大学水産学部の共催で「陸圏・水圏科学セミナー」を開催する予定である。今年度の学生の参加動機には教員からの勧めというものもあり、各構成大学の教員へ本セミナーの意義を周知して受講者の増加を期待したい。

9. 謝辞

人材養成学生支援セミナーⅡの計画と実施に際してご協力頂きました、かごしま丸東 政能船長ならびに乗組員の方々に深く感謝します。また、本セミナーに対して特別の配慮を頂きました、鹿児島大学連合農学研究科研究科長 杉本康志教授並びに、諸手続きを実行していただきました鹿児島大学連合農学研究科研究科及び、鹿児島大学水産学部事務職員の方々へお礼を申し上げます。また、「Seminar on Agriculture and Fishery Science」を開催するにあたりご協力をいただいた、国立中山大学海洋科学学院院長 陳 宏遠教授、林 慧玲教授並びに学生交流でご尽力いただいた、国立高雄海洋科技大学 謝 凱雯副教授に感謝します。



年度	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21													
入学定員	22	22	22	22	22	22	23	23	23	23	23													
志願者数	44	55	55	67	67	67	39	50	30	40	40													
入学者数	構成大学	31 (2) (16)	37 (4) (23)	49 (7) (25)	37 (2) (19)	46 (4) (22)	62 (6) (20)	31 (3) (12)	36 (2) (19)	25 (3) (13)	30 (2) (16)	29 (5) (16)												
	他大学	12 (1) (10)	18 (3) (8)	14 (2) (7)	13 (5) (4)	18 (4) (12)	5 (1) (3)	7 (2) (5)	13 (3) (6)	3 (2)	10 (2) (6)	11 (10)												
	計	43 (3) (26)	55 (7) (31)	63 (9) (32)	50 (7) (23)	64 (8) (34)	67 (7) (23)	38 (5) (17)	49 (5) (25)	28 (3) (15)	40 (4) (22)	40 (5) (26)												
構成大学別学生数	佐賀大学(農)	13 (2) (9)	11 (1) (6)	11 (5)	7 (5)	10 (1) (5)	17 (1) (8)	10 (1) (5)	13 (1) (6)	7 (2)	10 (6)	12 (1) (8)												
	宮崎大学(農)	7 (1) (1)	12 (1) (8)	19 (3) (9)	10 (2) (3)	21 (4) (7)	15 (2) (5)	5 (1) (1)	8 (2) (3)															
	鹿児島大学(農)	7 (6)	13 (1) (8)	12 (2) (7)	17 (5) (7)	11 (1) (7)	13 (2) (4)	7 (1) (4)	13 (7)	11 (2) (6)	13 (2) (6)	5 (1) (3)												
	鹿児島大学(水)	8 (6)	11 (2) (7)	12 (7)	9 (5)	12 (1) (9)	8 (4)	5 (4)	4 (4)	4 (4)	7 (6)	12 (1) (9)												
	琉球大学(農)	8 (4)	8 (2) (2)	9 (4) (4)	7 (3)	10 (1) (6)	14 (2) (2)	10 (2) (3)	10 (3) (5)	6 (3)	10 (2) (4)	11 (2) (6)												
	連携大学院							1	1	0	0	0												
	計	43 (3) (26)	55 (7) (31)	63 (9) (32)	50 (7) (23)	64 (8) (34)	67 (7) (23)	38 (5) (17)	49 (6) (25)	28 (2) (15)	40 (4) (22)	40 (5) (26)												
国籍別入学者	日本	17	日本	24	日本	31	日本	27	日本	30	日本	44	日本	21	日本	24	日本	13	日本	18	日本	14		
	インド	1	インド	1	インド	1	インド	3	インド	1	インド	1	インド	2	インド	1	インド	4	インド	1	インド	1	インド	9
	インドネシア	8	インドネシア	7	インドネシア	4	カンボジア	1	インドネシア	3	インドネシア	2	タイ	2	タイ	1	スリランカ	1	インドネシア	1	スリランカ	2	スリランカ	2
	韓国	3	スリランカ	1	カンボジア	1	スリランカ	1	カンボジア	1	カンボジア	1	韓国	1	韓国	1	タイ	1	スリランカ	3	タイ	1	タイ	1
	中国	3	韓国	3	スリランカ	2	中国	7	スリランカ	1	スリランカ	2	中国	6	中国	6	韓国	1	タイ	2	韓国	1	韓国	1
	パナマ	1	中国	9	タイ	2	パングラデシュ	1	タイ	2	タイ	1	パキスタン	1	パングラデシュ	4	中国	1	中国	3	中国	2	中国	2
	パングラデシュ	4	パングラデシュ	6	中国	8	エジプト	2	韓国	3	中国	7	パングラデシュ	2	フィリピン	1	パングラデシュ	2	パキスタン	1	パナマ	2	パナマ	2
	フィリピン	2	フィリピン	1	パングラデシュ	2	ベトナム	2	中国	9	パキスタン	1	マレーシア	1	ベトナム	2	フィリピン	2	パングラデシュ	4	パングラデシュ	1	パングラデシュ	1
	マレーシア	1	マレーシア	1	フィリピン	1	マレーシア	2	パングラデシュ	1	パングラデシュ	1	エジプト	1	マレーシア	1	ベトナム	1	ブータン	1	フィリピン	1	フィリピン	1
	ミャンマー	1	コロンビア	1	ベトナム	3	ミャンマー	2	フィリピン	3	フィリピン	3	タンザニア	1	ミャンマー	2	ミャンマー	1	フィリピン	1	ベトナム	2	ベトナム	2
	イラン	1	エジプト	1	ミャンマー	3	ミャンマー	3	ミャンマー	3	ミャンマー	3	ミャンマー	1	ミャンマー	2	ミャンマー	1	フィリピン	1	ベトナム	2	ベトナム	2
	タンザニア	1			アメリカ	1	モリタニア	1	ミャンマー	2	トルコ	1			トルコ	1	オマーン	1	キューバ	1	キューバ	1	キューバ	1
				ブラジル	1				アルゼンチン	2	ヨルダン	1			ヨルダン	1	コートジボワール	1	キューバ	1	キューバ	1	キューバ	1
				ルーマニア	1				イメン	1	ガーナ	1			イメン	1	ナイジェリア	1	コートジボワール	1	ナイジェリア	1	ナイジェリア	1
			ヨルダン	1				トルコ	1	トルコ	1			トルコ	1	マダガスカル	1	ナイジェリア	1	ナイジェリア	1	ナイジェリア	1	
			イラン	1				ケニア	1	ケニア	1			ケニア	1	リビア	1	ナイジェリア	1	ナイジェリア	1	ナイジェリア	1	
								マラウイ	1	マラウイ	1			マラウイ	1			ナイジェリア	1	ナイジェリア	1	ナイジェリア	1	

年度	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32				
入学定員	23	23	23	23	23										
志願者数	45	38	36	29	26										
入学者数	構成大学	28 (3) (10)	26 (5) (10)	22 (3) (6)	16 (4) (5)	20 (4) (6)									
	他大学	15 (2) (2)	12 (2) (9)	13 (4) (8)	13 (3) (10)	4 (1) (2)									
	計	43 (5) (12)	38 (7) (19)	35 (7) (14)	29 (7) (15)	24 (5) (8)									
構成大学別学生数	佐賀大学(農)	14 (1) (8)	12 (7)	5 (2)	3 (2) (1)	5									
	鹿児島大学(農)	10 (2) (3)	8 (4) (3)	8 (3)	7 (3) (2)	10 (3) (4)									
	鹿児島大学(水)	11 (1) (7)	11 (7)	6 (1) (3)	9 (1) (7)	4 (1) (2)									
	琉球大学(農)	8 (1) (4)	7 (3) (2)	16 (3) (9)	10 (1) (5)	5 (1) (2)									
	連携大学院	0	0	0	0	0									
	計	43 (5) (22)	38 (7) (19)	35 (7) (14)	29 (7) (15)	24 (5) (8)									
国籍別入学者	日本	17	日本	19	日本	21	日本	14	日本	16					
	インドネシア	2	インドネシア	4	スリランカ	2	エジプト	2	エリトリア	1					
	セネガル	1	カンガ	1	タイ	1	スリランカ	2	ジンバブエ	1					
	タイ	1	スリランカ	2	フィジー	1	タイ	3	タイ	1					
	バングラデシュ	6	トンガ	1	フィリピン	1	タンザニア	1	バングラデシュ	1					
	フィリピン	2	バングラデシュ	2	ベトナム	3	バングラデシュ	2	ミャンマー	1					
	ベトナム	2	フィリピン	2	ボリビア	1	フィリピン	1	中国	3					
	ミャンマー	1	ベトナム	3	マレーシア	2	ベトナム	2							
	中国	2	マレーシア	1	ミャンマー	1	マラウイ	1							
			ミャンマー	2	韓国	1	中国	1							
		モリタニア	1	中国	1										

平成25年10月入学生及び指導教員名簿

専攻	連合講座	フリカナ 氏名 (国籍)(性別)	主指導教員	① 第1副指導教員 ② 第2副指導教員 補 指導助教員	備考
応用生命科学	生物機能化学	トアン ダン フィー コン Doan Dang Phi Cong (ベトナム)(男)	寺嶋 芳江(琉)	①外山 博英(琉) ②玉置 尚徳(鹿農)	私費
農水圏資源 環境科学	生物環境 保全科学	ヒグチ サトシ 樋口 聡志 (日本)(男)	津田 勝男(鹿農)	①坂卷 祥孝(鹿農) ②徳田 誠(佐)	
	地域資源 環境工学	プリーチャー ガーベツ Preecha Kapetch (タイ)(男)	酒井 一人(琉)	①中村 真也(琉) ②長 裕幸(佐)	私費
	水産資源 環境科学	モハマト サカワト ホシ MD. Sakhawat Hossain (バングラデシュ)(男)	越塩 俊介(鹿水)	①石川 学(鹿水) ②山本 淳(鹿水)	国費

平成26年4月入学生及び指導教員名簿(2-1)

専攻	連合講座	フリカナ 氏名 (国籍)(性別)	主指導教員	① 第1副指導教員 ② 第2副指導教員 補 指導助教員	備考
生物生産科学	熱帯資源・ 植物生産科学	シマダ アツシ 島田 温史 (日本)(男)	山本 雅史(鹿農)	①富永 茂人(鹿農) ②一色 司郎(佐)	
		シモムラ アヤ 下村 彩 (日本)(女)	鈴木 章弘(佐)	①有馬 進(佐) ②鬼頭 誠(琉)	
		マエサト カズヒロ 前里 和洋 (日本)(男)	川満 芳信(琉)	①上野 正実(琉) ②坂上 潤一(鹿農)	
		ワタナベ ケンタ 渡邊 健太 (日本)(男)	川満 芳信(琉)	①上野 正実(琉) ②坂上 潤一(鹿農) 補平良 英三(琉)	
	動物資源 生産科学	イコマ エレナ 生駒 エレナ (日本)(女)	岡本 新(鹿農)	①大久津 昌治(鹿農) ②川本 康博(琉)	
		ウイン ミトウエ Win Mi Htwe (ミャンマー)(女)	川本 康博(琉)	①伊村 嘉美(琉) ②岡本 新(鹿農)	国費
	地域・国際 資源経済学	ハン ハン 樊 帆 Fan Fan (中国)(男)	秋山 邦裕(鹿農)	①李 哉滋(鹿農) ②内藤 重之(琉)	私費
		マレイナ 馬 麗娜 Lina Ma (中国)(女)	豊 智行(鹿農)	①秋山 邦裕(鹿農) ②白武 義治(佐)	私費
応用生命科学	先端応用 生命科学	ムタンダ イシマエル Mutanda Ishmael (ジンバブエ)(男)	屋 宏典(琉)	①福田 雅一(琉) ②渡邊 啓一(佐)	国費
		ゴウ シュショウ 伍 樹松 Wu Shusong (中国)(男)	侯 徳興(鹿農)	①大塚 彰(鹿農) ②和田 浩二(琉)	私費
		シライシ ヨウヘイ 白石 洋平 (日本)(男)	高峯 和則(鹿農)	①玉置 尚徳(鹿農) ②外山 博英(琉)	
		ヤノ サトシ 矢野 敏史 (日本)(男)	侯 徳興(鹿農)	①イブラヒム ヒッサム ラトワン(鹿農) ②屋 宏典(琉) 補坂尾 こず枝(鹿農)	

平成26年4月入学生及び指導教員名簿(2-2)

専攻	連合講座	フリカ`ナ 氏 名 (国籍)(性別)	主指導教員	① 第1副指導教員 ② 第2副指導教員 補 指導助教員	備考
農水圏資源 環境科学	生物環境 保全科学	カウ ミヅ 加藤 三步 (日本)(男)	辻 瑞樹(琉)	①立田 晴記(琉) ②野間口 眞太郎(佐)	
		カウ トモヒロ 川内 智裕 (日本)(男)	境 雅夫(鹿農)	①樗木 直也(鹿農) ②染谷 孝(佐) 補池永 誠(鹿農)	
		サウ カズキ 佐藤 一輝 (日本)(男)	吉賀 豊司(佐)	①早川 洋一(佐) ②坂巻 祥孝(鹿農)	
		サウ キヨシ 佐藤 聖 (日本)(男)	染谷 孝(佐)	①上野 大介(佐) ②境 雅夫(鹿農)	
		モリタ トシユキ 森田 智有 (日本)(男)	染谷 孝(佐)	①上野 大介(佐) ②境 雅夫(鹿農)	
		ヤカ リョウスケ 八坂 亮祐 (日本)(男)	大島 一里(佐)	①草場 基章(佐) ②岩井 久(鹿農)	
	地域資源 環境工学	ジャンノック ピヤマート Jannok Piyamart (タイ)(女)	河野 澄夫(鹿農)	①紙谷 喜則(鹿農) ②弘中 和憲(琉)	私費
		フジヤマ ヲウ 藤山 宗 (日本)(男)	初井 和朗(鹿農)	①伊藤 祐二(鹿農) ②酒井 一人(琉)	
	水産資源 環境科学	アイネレム ゴイトム ベルヘ Aynealem Goitom Berhe (エリトリア)(男)	松岡 達郎(鹿水)	①安樂 和彦(鹿水) ②中西 良孝(鹿農)	私費
		ジヤナトル ファーナ Zannatul Farhana (ハ`ング`ラデ`シュ)(女)	大富 潤(鹿水)	①増田 育司(鹿水) ②西 隆一郎(鹿水)	国費
		ツルナリ ヨシサ 鶴成 悦久 (日本)(男)	西 隆一郎(鹿水)	①重廣 律男(鹿水) ②山本 智子(鹿水)	
		ワタナベ ユキ 渡邊 裕基 (日本)(男)	寺田 竜太(鹿水)	①野呂 忠秀(鹿水) ②本村 浩之(鹿農)	

平成25年度奨学金及び研究助成金受給状況

奨学金

名 称	申請者数	採用者数
私費外国人留学生学習奨励費	1名	1名
公益財団法人佐藤陽国際奨学財団	1名	0名
国内採用による国費外国人留学生	1名	0名
旭硝子奨学金	1名	0名
佐川留学生奨学会	1名	0名
米盛誠心育英会	1名	0名
公益財団法人アシュラン国際奨学金	1名	0名
鹿児島大学留学生後援会奨学金	1名	1名

日本学生支援機構奨学生

学 年	申請者数	採用者数
1年次(第一種)	6名	6名

平成25年度入学料及び授業料免除状況

入学料免除

	申請者数	全額免除者数	半額免除者数	不許可者数
4月入学	3名	0名	3名	0名
10月入学	1名	0名	0名	1名

授業料免除

	申請者数	全額免除者数	半額免除者数	不許可者数
前 期	30名	15名	13名	2名
後 期	23名	12名	11名	0名

学位記授与状況

I. 課程博士

H26.4.1現在

年度	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
専攻名											
生物生産科学	4 (3)	5 (4)	4 (4)	3 (2)	5 (5)	9 (7)	14 (8)	12 (9)	14 (9)	14 (8)	9 (7)
生物資源利用科学	3 (3)	1 (1)	2 (2)	4 (1)	4 (1)	8 (3)	10 (7)	13 (10)	7 (2)	7 (1)	9 (3)
生物環境保全科学	1 (1)	2 (2)	6 (3)	6 (5)	6 (4)	2 (2)	15 (11)	15 (10)	6 (5)	12 (9)	11 (6)
水産資源科学	4 (2)	6 (4)	7 (5)	7 (6)	9 (7)	10 (8)	7 (7)	7 (5)	5 (3)	10 (4)	9 (2)
計	12 (9)	14 (11)	19 (14)	20 (14)	24 (17)	29 (20)	46 (33)	47 (34)	32 (19)	43 (22)	38 (18)

年度	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
専攻名										
生物生産科学	10 (7)	16 (10)	19 (12)	9 (8)	20 (14)	12 (8)	13 (7)	16 (9)	9 (5)	6 (3)
生物資源利用科学	8 (6)	14 (5)	7 (5)	19 (9)	9 (3)	10 (3)	9 (3)	10 (2)	9 (2)	7 (2)
生物環境保全科学	8 (7)	6 (3)	5 (2)	7 (3)	6 (3)	9 (3)	6 (5)	10 (6)	9 (5)	8 (2)
水産資源科学	10 (6)	11 (5)	10 (7)	9 (4)	10 (6)	9 (7)	7 (3)	8 (7)	6 (4)	5 (4)
計	36 (26)	47 (23)	41 (26)	44 (24)	45 (26)	40 (21)	35 (18)	44 (24)	33 (16)	26 (11)

年度	23	24	25	26	27	28	29	30	31	合計
専攻名										
生物生産科学	8 (4)	2	3 (2)							236 (155)
生物資源利用科学	5 (3)	3 (1)								178 (77)
生物環境保全科学	2 (1)									158 (98)
水産資源科学	1 (1)	1 (1)								168 (108)
生物生産科学	6 (4)	8 (7)	10 (7)							24 (18)
応用生命科学	2 (2)	7 (6)	5 (3)							14 (9)
農水圏資源環境科学	8 (4)	13 (9)	11 (4)							32 (17)
計	32 (19)	34 (24)	29 (16)							810 (485)

平成21年度4月入学者より、4専攻から3専攻に改組。

【国別内訳】

国名	日本	インド	インドネシア	カンボジア	スリランカ	タイ	韓国	中国	台湾	ネパール	パキスタン	バングラ デシュ	ブータン	フィリピン	ベトナム	マレーシア
人数	325	8	72	4	13	28	29	114	2	4	4	70	1	32	15	11
国名	ミャンマー	アメリカ	アルゼンチン	グアテマラ	コスタリカ	コロンビア	ブラジル	ボリビア	メキシコ	ギリシャ	スペイン	ドイツ	トンガ	パプア ニューギニア	イエメン	トルコ
人数	13	1	1	2	1	2	3	1	1	1	2	1	1	1	1	2
国名	イラン	オマーン	ヨルダン	エジプト	カーナ	ケニア	コートジボ アール	ザンビア	セネガル	タンザニア	チュニジア	ウガンダ	ナイジェリア	マダガス カル	マラウイ	モリタニア
人数	2	1	2	8	5	5	1	1	3	6	2	1	3	1	1	1
国名	リビア															合計
人数	1															810

II. 論文博士

年度	人数	国名	年度	人数	国名	年度	人数	国名
3	2	日本	14	3	日本・タイ・フィリピン	25	1	日本
4	2	日本	15	19	日本・ベトナム・中国			
5	4	日本・マレーシア・韓国・中国	16	5	日本			
6	1	中国	17	9	日本			
7	7	日本・米国・インドネシア・タイ	18	17	日本・エジプト・スペイン			
8	2	日本・インドネシア	19	9	日本・アルジェリア・インドネシア・フィリピン			
9	2	日本	20	10	日本・アメリカ			
10	9	日本・フィリピン	21	12	日本・フィリピン・インドネシア			
11	3	日本	22	0				
12	5	日本	23	0				
13	8	日本	24	3	日本	合計	133	

平成25年度学位取得者名簿

課程博士

学位授与年月日	専攻 連合講座	フリガナ 氏名(性別)(国籍)	主指導教員
平成25年9月20日	農水圏資源環境科学 生物環境保全科学	ミヤクニ ヤス 宮国 泰史 (男)(日本)	辻 瑞樹(琉)
平成25年9月20日	農水圏資源環境科学 水産資源環境科学	マツマ シズキ 松沼 瑞樹 (男)(日本)	本村 浩之(鹿農)
平成25年9月20日	生物生産科学 動物資源生産科学	ホンダ アキキ 本多 昭幸 (男)(日本)	尾野 喜孝(佐)
平成25年9月20日	農水圏資源環境科学 水産資源環境科学	ハン ウヰェ 韓 雨哲 Yuzhe Han (男)(中国)	越塩 俊介(鹿水)
平成25年9月20日	生物生産科学 動物生産学	カミ カズヲ 成見 香瑞範 (男)(日本)	芦澤 幸二(宮)
平成25年9月20日	生物生産科学 農林資源・経営学	モハマト モンジュール ホク Md. Monjurul Hoque (男)(バングラデシュ)	白武 義治(佐)
平成25年9月20日	農水圏資源環境科学 生物環境保全科学	フイ トク スグエン Huy Duc Nguyen (男)(ベトナム)	大島 一里(佐)
平成26年3月17日	応用生命科学 先端応用生命科学	トクガ ムヘイ 徳永 雄平 (男)(日本)	杉元 康志(鹿農)
平成26年3月17日	生物生産科学 動物資源生産科学	イマイ コロ ・井 裕理子 (女)(日本)	川本 康博(琉)
平成26年3月17日	生物生産科学 動物資源生産科学	ニシムラ ケイコ 西村 慶子 (女)(日本)	中西 良孝(鹿農)
平成26年3月17日	生物生産科学 地域・国際資源経済学	ムスタイー ナスリン ナハル Mst. Nasrin Nahar (女)(バングラデシュ)	稲岡 司(佐)
平成26年3月17日	生物生産科学 地域・国際資源経済学	ジュネド ウッディン アハメド Junayed Uddin Ahmed (男)(バングラデシュ)	小林 恒夫(佐)
平成26年3月17日	生物生産科学 地域・国際資源経済学	ジョウエリア ナンボーズ Joweria Nambooze (女)(カンガ)	稲岡 司(佐)
平成26年3月17日	生物生産科学 地域・国際資源経済学	チャン ミン ハイ Tran Minh Hai (男)(ベトナム)	岩元 泉(鹿農)
平成26年3月17日	生物生産科学 地域・国際資源経済学	グエン チ トウイ Nguyen Thi Thuy (女)(ベトナム)	岩元 泉(鹿農)
平成26年3月17日	生物生産科学 地域・国際資源経済学	サロメ ヴィスタシオ トポウ タウファ Salome Vistasio Tupou-Taufa (女)(トonga)	佐野 雅昭(鹿水)
平成26年3月17日	応用生命科学 食品機能科学	ヨナサン アシキン Yonathan Asikin (男)(インドネシア)	和田 浩二(琉)
平成26年3月17日	農水圏資源環境科学 生物環境保全科学	フリハタ シュンカ 降幡 駿介 (男)(日本)	早川 洋一(佐)
平成26年3月17日	農水圏資源環境科学 生物環境保全科学	ムカイ ヒロミ 向井 裕美 (女)(日本)	野間口 眞太郎(佐)
平成26年3月17日	農水圏資源環境科学 生物環境保全科学	オクダ シオリ 奥田 しおり (女)(日本)	岩井 久(鹿農)
平成26年3月17日	農水圏資源環境科学 水産資源環境科学	カキ タシ 加茂 崇 (男)(日本)	西 隆一郎(鹿水)
平成26年3月17日	農水圏資源環境科学 水産資源環境科学	シャロン ノナト ナナル Sharon Nonato Nunal (女)(フィリピン)	前田 広人(鹿水)
平成26年3月17日	農水圏資源環境科学 水産資源環境科学	バコロド エウジエン タン Bacolod Eugene Tan (男)(フィリピン)	小山 次朗(鹿水)
平成26年3月17日	農水圏資源環境科学 水産資源環境科学	ヤマサキ マサトシ 山崎 雅俊 (男)(日本)	山本 淳(鹿水)

学位授与年月日	専攻 連合講座	フリガナ 氏名(性別)(国籍)	主指導教員
平成26年3月17日	応用生命科学 先端応用生命科学	エリヴィ リカ キンテン Elvy Like Ginting (女)(インドネシア)	渡邊 啓一(佐)
平成26年3月17日	生物生産科学 熱帯資源・植物生産科学	チョウ キン 趙 鑫 Xin Zhao (男)(中国)	有馬 進(佐)
平成26年3月17日	応用生命科学 食品機能科学	マツグ マキ 松隈 美紀 (女)(日本)	和田 浩二(琉)
平成26年3月17日	生物生産科学 農林資源・経営学	ランパティゲ インディカ ルワン プラサナ Rampathige Indika Ruwan Prasanna (男)(スリランカ)	白武 義治(佐)
平成26年3月17日	応用生命科学 食品機能科学	ワウ ペン 王 鵬 Wang Peng (女)(中国)	光富 勝(佐)

論文博士

学位授与年月日	フリガナ 氏名(性別)(国籍)	紹介教員
平成26年3月17日	チヂリ ヒロキ 千々和 浩幸 (男)(日本)	山本 雅史(鹿農)

平成25年度学位取得者（課程博）就職状況

職種別

職 種	人 数
大学教員	7 (24.1%)
研究所・団体等研究員	4 (13.8%)
民間企業研究員（職）	2 (6.9%)
その他（含む研究生等）	13 (44.8%)
自 営	0 (0.0%)
未定・不明（含む調査中）	3 (10.3%)
計	29 (100.0%)

就職先等

京都大学（日本学術振興会特別研究員），鹿児島大学総合研究博物館 研究支援推進員，長崎県農林技術開発センター，大連海洋大学（中国），株式会社ヤクルト，ハノイ農業大学（ベトナム），熊本大学発生医学研究所，琉球大学農学部協力研究員，宮崎県畜産試験場，佐賀大学農学研究科特定研究員，アンジャン大学経済学部（ベトナム），Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries（トンガ），琉球大学熱帯生物圏研究センター（ポスドク研究員），森林総合研究所（日本学術振興会特別研究員），国立環境研究所，株式会社アルファ水工コンサルタンツ，サンカルロス大学（フィリピン），サムラトゥランギ大学（インドネシア），中村学園大学短期大学部

研究科教員組織

平成26年 7月 1日現在

専攻名	連合講座	鹿児島大学農学部		鹿児島大学水産学部		佐賀大学		琉球大学		合計			
		教授	准教授・講師	教授	准教授・講師	教授	准教授・講師	教授	准教授・講師	教授	准教授・講師	計	
生物生産科学	熱帯資源・植物生産科学	a1 遠城 道雄 A2 坂上 潤一 A1 佐々木 修 A1 高水 茂人	b 一谷 勝之 b 久保 達也 b 角 明夫 b 朴 炳幸 b 山本 雅史			A2 穴井 豊昭 A1 有馬 達 A2 一色 司郎 A 駒井 史朗 A 鈴木 章弘 A 野 昭輝	B 上笠 喜八	A1 安谷 豊信一 A1 川崎 芳信 A1 本村 憲二	b1 赤嶺 光 b 畑野 健次 b1 藤野 健二				
	小計	4 (3)	5 (1)	0	0	6 (6)	1 (1)	3 (3)	3 (1)	13 (12)	9 (3)	22 (15)	
	動物資源生産科学	A1 岡本 新 A1 中西 良孝	b1 大久保 昌治 B 下綱 猛 b1 高山 耕二 B 三好 和隆			A 和田 康彦	b 山中 賢一	A 及川 卓郎 A1 川本 保博 A 佐野 文子 A 砂川 勝徳 A2 建本 秀樹 A1 玉城 政信	b1 伊村 嘉美 b 金野 俊洋				
	小計	2 (2)	4 (2)	0	0	1 (1)	1 (1)	6 (6)	2 (0)	9 (9)	7 (2)	16 (11)	
	地域・国際資源経済学	A1 秋山 邦裕 A 岩元 泉 A 遠藤 日雄 a2 田代 正一	B1 李 載法 b 坂井 教郎 b 坂田 邦宏 B 豊 誓行	a 佐久間 美明 A 佐野 雅昭	b1 鳥居 享司	A1 福岡 司 A1 小林 恒夫 A1 白武 義治	b 藤村 亮彦	A1 内藤 重之	b1 木島 真志				
小計	4 (3)	4 (2)	2 (1)	1 (0)	3 (3)	1 (0)	1 (1)	1 (0)	10 (8)	7 (2)	17 (10)		
計	10 (8)	13 (5)	2 (1)	1 (0)	10 (10)	3 (1)	10 (10)	6 (1)	32 (29)	23 (7)	55 (36)		
応用生命科学	生物機能化学	A1 北原 兼文 A1 玉置 尚徳	b 花城 勲 b 南 雄二			A2 神田 康三 A 小林 元太 A2 光富 勝	B 滝井 勇統 B1 北垣 浩志	A1 多和田 真吉 A1 吉嶋 芳江 A1 外山 博英	b1 橋 禧二郎 b1 福田 雅一				
	小計	2 (2)	2 (0)	0	0	3 (3)	2 (2)	3 (3)	2 (0)	8 (8)	6 (2)	14 (10)	
	食品機能科学	A1 安部 淳一 A1 〇take Yuko	b1 大塚 彰	A1 板倉 隆夫 A1 上西 由緒 A1 木村 郁夫	B1 小松 正治 d1 塩崎 一弘	A2 永尾 晃治 A 清 洋一郎 a1 林 信行		A1 高野 良 A1 和田 浩二	b1 高良 健作 b 玉城 一				
	小計	2 (2)	1 (0)	3 (3)	2 (1)	3 (2)	0 (0)	2 (2)	2 (0)	10 (9)	5 (1)	15 (10)	
	先端応用生命科学	A1 侯 徳興 A1 杉元 和則 A1 高峯 文雄 A1 橋本 文雄	B1 石橋 松二郎 b1 岡本 繁久			A1 石丸 幹二 A1 渡邊 啓一	b1 水野 幸生 B 宗 神明	A1 伊藤 達 A1 豊 宏典	b1 小西 昭子 b 平良 東紀				
小計	6 (6)	3 (1)	0	0	2 (2)	2 (1)	2 (2)	2 (0)	10 (10)	7 (2)	17 (12)		
計	10 (10)	6 (1)	3 (3)	2 (1)	8 (7)	4 (3)	7 (7)	6 (0)	28 (27)	18 (5)	46 (32)		
農水産資源環境科学	生物環境保全科学	A1 岩井 久 A1 曾根 晃一 A1 境 雅夫 A1 津田 勝男	b 鶴川 祥信 b1 坂巻 直也 b1 橋本 正幸 b1 畑 邦彦			A1 大島 一里 A1 松谷 孝 A1 野間口 真太郎 A1 早川 洋一	b1 上野 大介 B1 草場 基章 B1 徳田 誠 B1 吉賀 豊司	A2 鬼頭 誠 a 谷口 真吾 a 田嶋 聡 A1 辻 瑞樹	b 金城 和俊 B1 立田 晴紀 b 松本 一徳 b 渡辺 慎				
	小計	4 (4)	5 (1)	0	0	4 (4)	4 (3)	4 (2)	4 (1)	12 (10)	13 (5)	25 (15)	
	地域資源環境工学	A2 岩崎 浩一 A1 河野 遼夫 A2 之山 道郎 A2 地頭 隆 A2 西野 吉彦 A1 梶井 和朗	b 井倉 洋二 b1 伊藤 善則 b 服部 芳明			A 近藤 文雄 a 田中 宗浩 A2 長 裕幸 A 廣間 運夫	b 郡山 益実 b 原口 智和 b 宮本 英揮	A1 井上 章二 A1 上野 正実 A1 酒井 一人 A 芝 正己 A 中野 拓治 a1 中村 真也 A2 弘中 和憲	b 川崎 聖司 b1 藤内 健志 b 瀬戸内秀現 b1 仲村 渡得 b1 ラザフイラバ				
	小計	6 (4)	4 (0)	0	0	4 (3)	3 (0)	7 (6)	5 (0)	17 (13)	12 (0)	29 (13)	
	水産資源環境科学	A1 本村 浩之		A1 大富 潤 A2 門脇 秀策 A1 鎌塚 俊介 A1 小山 次朗 A1 廣瀬 律男 A1 鈴木 廣志 A1 西 隆一郎 A1 野呂 忠秀 A1 藤枝 繁 A1 藤田 茂 A1 前田 広人 A1 松岡 達郎 a1 増田 育司 A2 山本 淳 A1 山本 淳	b1 安樂 和彦 b1 石川 学 b 石崎 宗尚 A1 宇野 誠一 b1 江村 恵香 b 小谷 知也 b 西 隆昭 B 寺田 達太 b 山中 有一 b1 山本 望子 B1 吉川 毅								
小計	1 (1)	0 (0)	15 (14)	11 (4)	0	0	0	0	16 (15)	11 (4)	27 (19)		
計	11 (9)	9 (1)	15 (14)	11 (4)	8 (7)	7 (3)	11 (8)	9 (1)	45 (38)	36 (9)	81 (47)		
合計	31 (27)	28 (7)	20 (18)	14 (5)	26 (24)	14 (7)	28 (25)	21 (2)	106 (94)	77 (21)	182 (115)		
専攻名		A1 16 B1 4	A1 14 B1 2	A1 9 B1 3	A1 14 B1 1	A1 4 B1 1	A1 14 B1 1	A1 53 B1 10			63		
		A2 4 B2 2	A2 2 B2 3	A2 6 B2 1	A2 3 B2 1	A2 15 B2 0	A2 13 B2 7			20			
		A2 4 B2 0	A2 2 B2 0	A2 6 B2 0	A2 3 B2 0	A2 15 B2 0	A2 15 B2 0			15			
		a1 1 b1 9	a1 1 b1 4	a1 1 b1 2	a1 1 b1 10	a1 4 b1 25	a1 4 b1 29			29			
		a2 2 b2 0	a2 0 b2 0	a2 0 b2 0	a2 0 b2 0	a2 2 b2 0	a2 2 b2 0			2			
		c1 0	c1 0	c1 0	c1 0	c1 0	c1 0			0			
		c2 0	c2 0	c2 0	c2 0	c2 0	c2 0			0			
		d1 1	d1 1	d1 0	d1 0	d1 1	d1 1			1			
		d2 0	d2 0	d2 0	d2 0	d2 0	d2 0			0			
		27	15	19	10	19	6	22	12	87	43	130	

注) 1 氏名の前の大文字(A・A・B)はD合(主指導教員資格)を示す。 2 小文字(a・b・c・d)はD合(副指導教員資格)を示す。
 3 A(a)は教授を、B(b)は准教授、cは講師、dは助教を示す。 4 A・Bは主指導教員、氏名の前の数字1は第1副指導教員、数字のない者は学生を担当していないことを示す。
 5 ()内の数字は、指導教員資格者のうち主指導教員資格者を内数で示す。 6 アンダーラインは女性を示す

代 議 委 員 会 委 員 名 簿

A 任期 平成25年4月1日～平成27年3月31日(継続)

B 任期 平成26年4月1日～平成28年3月31日(新規)

専 攻	連 合 講 座	所 属 大 学	氏 名
生物生産科学	熱帯資源・植物生産科学	琉球大学(農)※	A 川 満 芳 信
		佐賀大学(農)	B 鈴 木 章 弘
	動物資源生産科学	鹿児島大学(農)	A 岡 本 新
	地域・国際資源経済学	琉球大学(農)	B 内 藤 重 之
応用生命科学	生物機能化学	鹿児島大学(農)	B 玉 置 尚 徳
	食品機能科学	鹿児島大学(水産)	B 上 西 由 翁
	先端応用生命科学	佐賀大学(農)	A 石 丸 幹 二
農水圏資源環境科学	生物環境保全科学	佐賀大学(農)	A 野 間 口 真 太 郎
	地域資源環境工学	鹿児島大学(農)※	A 西 野 吉 彦
		琉球大学(農)	B 芝 正 己
	水産資源環境科学	鹿児島大学(水産)	A 門 脇 秀 策

※は講座外枠選出

平成26年度年間行事予定表

(鹿児島大学大学院連合農学研究科)

年 月 日	行 事	備 考
平成26年 4.11(金)	連合農学研究科入学式(11:00) 連合農学研究科オリエンテーション 代議委員会(第129回)	履修登録(Web) 「Newsletter 第34号」原稿依頼
5.16(金)	代議委員会(第130回) [琉球大学担当]	研究科教員候補者推薦依頼(D・准教授を含む)(〆切 7.4) 前期学位論文(論博含む)提出 (〆切 6.2) 秋季入学出願資格認定申請受付→審査→報告→通知
6.5(木) ~6(金) 6.13(金) 6.18(水) ~20(金)	平成26年度第1回全国連合農学研究科協議会(当番 東京農工大学) 代議委員会(第131回) [鹿児島大学水産学部担当] 学位論文の受理及び審査委員会委員の選出 平成26年度前期連合一般ゼミナール(日本語)(当番 鳥取大学)	秋季入学願書受付 (6.16~6.20)
7.11(金) 7月下旬~	学位論文審査委員会 学位論文「公開審査会」・・・1週間前までに公示 代議委員会(第132回) 事務会議及び事務連絡会(7月下旬~8月中旬予定)	学位論文審査・最終試験等結果報告 (〆切 8.20) 授業料免除(後期)申請
8. 上旬 (木~金)	人材養成学生支援セミナーI(鹿児島大学農学部担当) (予定)	「Newsletter 第34号」発行予定
9. 4(木) " " " " " " " " " "	秋季入試説明会 秋季入学試験・入試委員会 代議委員会(第133回) 専攻会議(第1回) 教員資格審査委員会(D・准教授を含む) 専攻会議(第2回)	入試実施方法 入試合否判定 教員候補者資格審査の付託(D・准教授を含む) 教員資格審査委員会の設置(D・准教授を含む) 教員候補者資格審査結果(報告)
9. 5(金) " "	代議委員会(第134回) 研究科教授会(第21回)	学位論文審査結果 教員資格審査判定 入試合否判定 学位論文の合否判定 教員資格審査判定
9. 9(火) 9.16(火) 9.19(金)	秋季合格発表 秋季入学手続き(入学料免除申請等)(~18日) 学位記授与式(予定)	秋季合格通知書・入学手続き案内の発送
10. 3(金) " " " " 10. 9(木) ~17(金) 10.30(木) ~31(金)	秋季入学式 オリエンテーション 代議委員会(第135回) 第一次選挙管理委員会 人材養成学生支援セミナーII(洋上セミナー) 開催予定地:韓国济州島 (鹿児島大学水産学部担当) 平成26年度第2回全国連合農学研究科協議会(当番 鳥取大学)	後期学位論文(論博)提出 (〆切10.22) 学生募集要項発表 (下旬)
11. 5(水) ~7(金) 11.12(水) ~14(金)	農学特別講義I(一般セミナー)実施 [佐賀大学担当] 代議委員会(第136回) [佐賀大学担当] 平成26年度後期連合一般ゼミナール(英語)(当番 岐阜大学)	研究科教員(D・准教授(特例))候補者推薦依頼 (〆切 1.6)
12. () 12.19(金)	第一次選挙 代議委員会(第137回) 学位論文の受理及び審査委員会委員の選出 次期代議委員の調整	後期学位論文(課程博)提出 (〆切12.5) 出願資格認定申請受付→審査→報告→通知 入学願書受付 (12/15~12/19) 中間発表会(平成25年4月入学者)未定
平成27年 1. 9(金) " "	学位論文審査委員会 学位論文「公開審査会」・・・1週間前までに公示 代議委員会(第138回) 教員候補者(D・准教授(特例))資格審査の付託 第二次選挙 選挙管理委員会	学位論文審査・最終試験結果報告 (〆切 2.2)
2. 3(火) 2. () 2. 6(金) 2.12(木) 2.13(金) " " 2.17(火)	入試説明会 第二次選挙 代議委員会(第139回) 入学試験 入試委員会 研究科教授会(第22回) 合格発表	入試実施方法 学位論文審査結果 次期代議委員の決定 合否判定(午前) 合否判定(午後) 学位論文の合否判定
3. 2(月) 3. 6(金) 3. 中旬	入学手続き(入学料免除申請等)(~4日) 代議委員会(第140回) 学位記授与式(未定)	兼職申請書等作成 秋季入学募集要項発表 (中旬~下旬) 教育研究指導計画書・職務内容調書等の作成依頼

※ 委員会等の日程については、都合により変更することがあります。

平成25年度連合農学研究科活動記録

25年

4月12日 (金)	平成25年度連合農学研究科入学式・オリエンテーション
〃	第116回代議委員会
5月17日 (金)	第1回FD委員会 (琉球大学で開催)
〃	第1回入学試験検討委員会 (〃)
〃	第1回教務委員会 (〃)
〃	第117回代議委員会 (〃)
6月13日 (木) ~ 14日 (金)	平成25年度第1回全国連合農学研究科協議会 (東京農工大学担当)
6月19日 (水) ~ 21日 (金)	平成25年度前期連合一般ゼミナール (日本語) (東京農工大学当番)
6月21日 (金)	第2回入学試験検討委員会 (佐賀大学で開催)
〃	第2回教務委員会 (〃)
〃	第118回代議委員会 (〃)
6月28日 (金)	TA研修会
7月12日 (金)	第3回入学試験検討委員会
〃	第3回教務委員会
〃	第119回代議委員会
8月1日 (木) ~ 2日 (金)	人材養成学生支援セミナーI (佐賀大学当番)
8月5日 (月)	平成25年度連合農学研究科構成大学事務会議・事務連絡会 (鹿児島大学で開催)
8月23日 (金)	第120回代議委員会 (メール会議)
9月5日 (木)	秋季入学試験説明会
〃	秋季入学試験
〃	入学試験委員会
〃	第4回教務委員会
〃	第121回代議委員会
〃	専攻教員会議、教員資格審査委員会
9月6日 (金)	第122回代議委員会
〃	第19回研究科教授会
9月10日 (火)	秋季合格発表
9月20日 (金)	平成25年度連合農学研究科学位記授与式 (前期)
10月4日 (金)	秋季入学式・オリエンテーション
〃	第13回 (平成25年度) 鹿児島大学大学院連合農学研究科運営会議
〃	第123回代議委員会
10月18日 (金) ~ 31日 (木)	人材養成学生支援セミナーII (洋上セミナー)
10月24日 (木) ~ 25日 (金)	平成25年度第2回全国連合農学研究科協議会 (鹿児島大学担当)
11月6日 (水) ~ 8日 (金)	農学特別講義I (一般セミナー) (アーバンポートホテル鹿児島で開催) (水産学部当番)
11月8日 (金)	第5回教務委員会 (アーバンポートホテル鹿児島で開催)
〃	第124回代議委員会 (〃)
11月13日 (水) ~ 15日 (金)	平成25年度後期連合一般ゼミナール (英語) (鳥取大学当番)
12月20日 (金)	第2回FD委員会
〃	第4回入学試験検討委員会

〃	第6回教務委員会
〃	第125回代議委員会
26年	
1月10日 (金)	第5回入学試験検討委員会
〃	第126回代議委員会
1月15日 (水)	英語論文作成指導セミナー
1月20日 (月)	第3回FD委員会 (メール会議)
1月23日 (木)	英語論文作成指導セミナー
2月 4日 (火)	入学試験説明会
2月 7日 (金)	第4回FD委員会
〃	第6回入学試験検討委員会
〃	第7回教務委員会
〃	第127回代議委員会
2月13日 (木)	入学試験
2月14日 (金)	入学試験委員会
〃	第20回研究科教授会
〃	ハラスメント防止のための講演会
〃	男女共同参画推進セミナー
2月18日 (火)	合格発表
3月17日 (月)	第128回代議委員会
〃	平成25年度鹿児島大学大学院連合農学研究科構成法人連絡調整委員会
〃	平成25年度連合農学研究科学位記授与式 (後期)

◇事務局だより

○連大事務室室長 川西 正美
(鹿児島大学農学部・共同獣医学部等事務部長)



昨年10月に総務部企画評価課課長から農学部・共同獣医学部等事務部長兼連大事務室長として異動してきました。来年の3月末には定年を迎えますので、ここが終の棲家となります。さて、今般、国立大学はミッションの再定義と国立大学改革プランにより各大学の強みや役割を整理し、国立大学の機能強化に向けた改革を迅速に実行に移すことが求められています。連大においても、3大学の教員による多様でユニークな教育指導体制のもと、個性的で国際性豊かな連合大学院としての特色をさらに伸ばして、地域社会から国際社会まで幅広く活躍できる人材を養成していく必要があると思います。杉元研究科長、山本副研究科長を始め、代議委員会委員、その他構成大学の先生方及び事務職員一丸となって国際競争力や地域で果たす役割をよりいっそう強める改革を推進していくために、今年度いっぱいではありますが、微力ながら大学改革の一端を担えるように努力したいと思います。

代議委員会委員・連大事務室事務係メールアドレス一覧表

所属	氏名	E-Mailアドレス
連合農学研究科長	すぎもと やすし 杉元 康志	yasushi@chem.agri.kagoshima-u.ac.jp
連合農学研究科 副研究科長	やまもと あつし 山本 淳	ayam@fish.kagoshima-u.ac.jp
佐賀大学	いしまる かんじ 石丸 幹二	kanji@cc.saga-u.ac.jp
	すずき あきひろ 鈴木 章弘	azuki@cc.saga-u.ac.jp
	のまくち しんたろう 野間口 眞太郎	nomakuch@cc.saga-u.ac.jp
鹿児島大学農学部	おかもと しん 岡本 新	chacha@agri.kagoshima-u.ac.jp.jp
	たまき ひきのり 玉置 尚徳	noritama@chem.agri.kagoshima-u.ac.
	にし の よしひこ 西野 吉彦	nishinoy@agri.kagoshima-u.ac.jp
鹿児島大学水産学部	かどわき しゅうさく 門脇 秀策	kadowaki@fish.kagoshima-u.ac.jp
	かみにし よしお 上西 由翁	kaminisi@fish.kagoshima-u.ac.jp
琉球大学	かわみつ よしのぶ 川満 芳信	kawamitu@agr.u-ryukyu.ac.jp
	しば まさみ 芝 正己	mshiba@agr.u-ryukyu.ac.jp
	ないとう しげゆき 内藤 重之	naitoh@agr.u-ryukyu.ac.jp
鹿児島大学農学部・ 共同獣医学部等事務 部長（連大事務室長）	かわにし まさみ 川西 正美	nkbuchou@kuas.kagoshima-u.ac.jp
連大事務室長代理	いまむら てつろう 今村 哲郎	rendairi@kuas.kagoshima-u.ac.jp
連大事務室連大事務 係長	かわそえ たかこ 川添 隆子	renjimu@kuas.kagoshima-u.ac.jp
連大事務室連大事務 係員	ふくのうえ てよこ 福之上 天代子	
	いしかわ まゆみ 石川 まゆみ	
	いけだ きくみ 池田 菊美	

編集後記

鹿児島大学大学院連合農学研究科ニューズレター34号をここに刊行することが出来たことをご報告させていただきます。執筆および資料等を提供して下さった先生方、学生諸君にこの場をお借りしまして御礼の言葉を申し上げます。有り難うございました。また、連大事務室の福之上さんをはじめ事務職員の方に多大なるご協力を頂きました。深く感謝申し上げます。

平成26年8月

Newsletter 編集委員長

杉元康志



平成25年度 鹿児島大学大学院連合農学研究科
農学特別講座Ⅰ（一般セミナー）平成25年11月6日～8日
於：アーバンポートホテル

鹿児島大学大学院連合農学研究科

Doctoral Course Newsletter

第34号 平成26年8月発行

編集 鹿児島大学大学院連合農学研究科

鹿児島市郡元1丁目21番24号

電話（ダイヤル）市外局番099

研究科長 285-8780

副研究科長 285-8792

連大事務室長 285-8510

連大事務室長代理 285-8791

連大事務係（総務系）285-8792

連大事務係（学務系）285-8795

FAX 285-8799

URL <http://homeugs.agri.kagoshima-u.ac.jp/>

E-Mail renjimu@kuas.kagoshima-u.ac.jp



鹿児島大学大学院連合農学研究科を構成する4つの研究を4枚の羽根で表現し、連合農学研究科が今後ますます活躍するようという意味が込められている。青は水産学研究科、緑は農学研究科をイメージし、デザインを取り込む円の部分は緑の大地を表現している。